續日本歌學全書　第六編

小澤蘆庵翁全集

東京博文館

佐藤信淵

小澤蘆庵翁全集

東京博文館藏版

911.108
N6852
S2

小澤蘆庵翁全集

目次

解題……一
六帖詠草……小澤蘆庵……九
六帖詠草拾遺……小澤蘆庵……一三五
芦かび……小澤蘆庵……二五七
塵ひぢ……小澤蘆庵……二六一
或問……小澤蘆庵……二六九
振分髪……小澤蘆庵……二九九
つゞら草子……上田秋成……三三九
閑田百首……伴蒿蹊……四〇一
垂雲和歌集……垂雲軒澄月……四一三
夢宅和歌集……桃澤夢宅……四二三
杉のしづ枝……荷田蒼生子……四三五

国立国会
26.11.15
図書館

251118

諸陰

偃松樓

遠庵書

蘆庵翁真蹟

小杉槇邨翁藏

佐々木信綱藏

蒿蹊翁真蹟

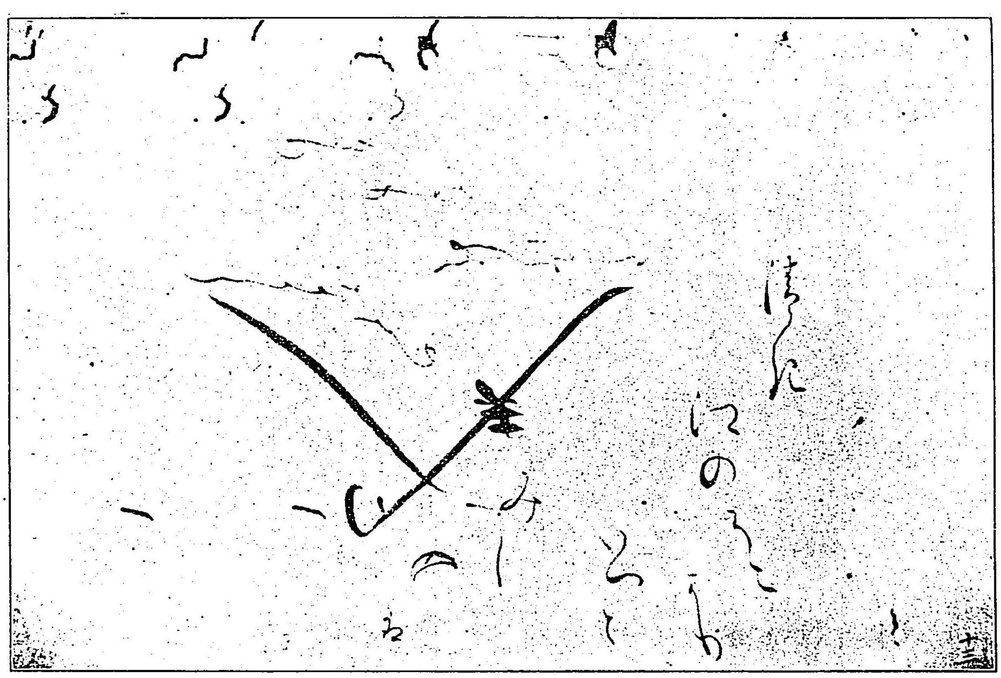
小杉椙邨翁藏

澄月翁真蹟

佐々木信綱藏

蘆庵翁真蹟歌繪

小杉椙邨翁蔵



小川一眞製

字ヲ花山大納言正二位右大将藤徳卿ニ乞奉テ呈進ス老カ歌ハ相次ニ恐レアレト知音知己ノ情黙シカタケレハ五章最旧作し

○昇道人本国備後ノ府内ト云所ハ俗ニ下尚老僧七十四歳ニテ病牀イマし言ハラ見終ラスハ上京アルヘシキし

然ル巻冊ヲモ郵中ナカラ道人ヒラスハ校正ナリカタシ冬ニモナルヘシ老カ願ヒハ閉目後ト思フ故ニ近ルカ依者し

○秋フカクナラハ必東ニ赴カルヘシ其節浪花ヘ下向セスハ談話モ叶ヒカタカルヘシ併冗回逢テモ別ノ袖ノ露ケサアハヌガ増ジヤト老章モ有ナラスヤ　三自習ヒハヤ蒙ニ章立カタヲ乱書シ以テ思ヤラセタ　三八

小杉榲邨翁蔵

續日本歌學全書第六編

佐々木信綱編

解題

京都のひむがし岡崎の里に、近世の歌仙二人の相つぎて住めりし地あり。二人のうちある景樹翁のうへに、前卷にものしつ。此卷に、小澤翁の小傳をかゝげてむ。

小澤蘆庵、姓に平、名に玄中、蘆庵に其號、又觀荷堂ともいへり。享保十年尾張に生る。幼き時大坂に住み、年たけて京都に移り、某公に仕へしに、三十三才の折、仕を辭して、岡崎村に住みたりき。

蘆庵、若かりし程に武伎を嗜み、武道修業をもて、諸國を遊歷せしに、後、そをすてゝ、冷泉爲村卿の門に入り、歌道を學びしかど、見る所ありて、自らたゞ言歌の一派をおおしたりき。又音樂技も好み、よくせりといふ。其性人とことなりて、友に多からざれど、秋成・蒿蹊、景樹などに親しく交はりて、贈答の歌家集にあまた入れり。享和元年七月十二日世をさりぬ。年七十九。北白川心性寺に葬りぬ。著書に、袖中和歌六帖、ふるの中道、ふ

りわけ髮、千首部類、萬首部類、覩荷堂一家言、覩荷隨筆、六帖詠草、六帖詠草拾遺等あり。

蘆庵、人とあり方正ゐして邪をゐくむ事甚しかりき。豪商三井氏の一族、みお蘆庵の門人ありしゐ、寛政四年、蘆庵いたく病をけるゐ、一人として來り訪ふ者おかりき。病癒えし後、交を絶つ書をおくり、奥ゐ歌二首をそへたり。いはく、

三井の水濁れるものをすむやとて何汲みくらむたもとぬらしゐ

人の世の富ゐくさ葉ゐれくつゆの風をまつまのひかりなりけり

ある夜、盜賊入りけるゐ、未だ燈下ゐ書を讀し蘆庵ゐ、燈をとりていでぬ。賊慌きて物もえとらで歸りぬ。翌夜又來りければ、長押ゐかけたる長刀とりおろして、一うちゐうたむとす。賊おそれて、逃げ去りけるゐ、

ありそ海のいはほおゞしみこえかねてよる〳〵かへる沖つ白浪

天明八年京師大火の折、蘆庵の家も、これ災ゐかゝりぬ。又のゐした、內裏の燒けし跡ををろがみなぎきてよめる、

今朝みれゞやけ野の原とおりゐけりおれやきのふの玉しきの庭

さて、太秦の地藏堂ゐ移りもみたりき。頼山陽、太秦歌稿の後ゐをるして曰く、杜詩以夔

州爲上乘、蘆庵翁和歌爲當代第一、而其避災寓太秦時、稱最深妙、故太秦者蘆庵之夔州也といへり。げゐも太秦ゐてよまれしゐ、感深きお多ゝり。

某法親王、久しく蘆庵の名をきおしめして、をば〳〵御使もて召しゝかど、さるやむごとなきわたりゐいと、固く辭みてまゐらず。親王そをきこして、げゐも隱者ゐて、をかも年たけさるを、みやびの道ゐてをひて招かむい、禮おきゐ似たりとて、ふりはへて、太秦の庵を訪はせ給ひぬ。蘆庵も忝く思ひて、それより折々さぶらひしとぞ。

蘆庵、王室を尊とぶ心ふかく、居間ゐ長刀をかけおきていひけるい、もし禁裏ゐ事あらむゐい、是を提げて難ゐ赴くべし、といへり。又蒲生君平の、山陵志をものせむとて上京せし時、久しく我家ゐ宿して、心のまゝゐこゝかしこを探ねきはめをめしおど、蘆庵の常の志もみゆべし。

當時京師ゐい、蒿蹊、澄月、慈延、等世ゐ聞えたる歌人おりしかゞ、蘆庵を加へて、當時の人、和歌の四天王とよべり。鈴屋翁も、都ゐ歌人蘆庵あり、東ゐ文人春海あり、わが企て及ぶべき限ならず、とたゝへいはれしとぞ。景樹翁の歌の如きも、あるい、翁のたゞ言歌より思ひおおされしゐいあらをや、とおぼゆ。

以上い、たゞ翁の心ばへ、翁の當時ゐ重むぜられし片はしををるせるのみ。翁の歌のもが

たをそらむゐゝ、次の二書をよみ味ひて、みづからさとるべきなり。

六帖詠草

六帖詠草拾遺

此二集ゝ、蘆庵翁の全集ゐして、前集ゝ門人小川萍流、前波默軒等編輯して、文化元年世ゐ出し、後集ゝ萍流の物し置しを、ゐまた年經て、嘉永のはじめゐ、萍流の子の世ゐ出せるなり。集の名ゝ、翁常ゐ、紀氏の六帖の歌のもぐさを好まれし故なりといふ。

蘆かび

塵ひぢ

或問

ゐの三部ゝ、蘆庵翁の太秦ゐゐりし程、筆をとられ、ふるの中道と名づけて、翁の身まかられし前年、寛政十年十一月ゐ、世ゐ出せり。こをよみ味はゝ、蘆庵翁の歌論をつぱらゐうかゝひうべし。或問ゝ、塵ひぢのうちれ、いかゝと打かたぶかるゝふし〳〵を、ある人の問へるゐなぞらへて、委しく說きさとされし也。たゝゐと歌の說も、此中ゐ詳なり。

ふりわけ髪

こゝ寛政八年三月、梓に上しゝ書ゐり。この書、はじめの條ゝ、歌のゐげつらひゐして、初學の敎ゐよろしけれど、中ほどより後ゝ、詞ゐはゐらき、てゐをは此變化、時刻の變化等をゐげて、半ゝ歌論、半ゝ語格書ともいひつべき書ゐれゝ、殊更ゐ、前三書の次ゐのせつるゐり。

藤簍冊子

上田秋成ゝ大坂の人、餘齋又ゝ無腸と號す。第二編ゐ家集を載せし河津美樹の門人也。醫を業としつれど、性狷介ゐして人と合はず。年卅八の時、火の爲ゐ家を失ひしかゝ、京都ゐ移り、後攝津の長柄ゐゆき、まゝ京師ゐかへりぬ。をば〳〵居をかへしかゝ、自ら鶉居と名づけぬ。文才ゐたけ、戲作の書も少ゐらず。雨月物語最も行はる。文化六年十一月廿六日歿す。年七十八。洛東南禪寺中西福寺ゐ葬りぬ。

藤簍冊子ゝ、六卷ゐわかち、第一、歌集屏風歌七十首、第二、春夏秋長短合體三百七十余首、二之餘、冬雜長短合體三百餘首、第三、紀行秋山記、第四、文集落葉、十雨言二篇、花園、年木、御嶽さうし、初秋、中秋、月の前、劒の舞、以上十章、第五、水無瀨川、郝廉留錢、古戰場、聽雪二篇、倣李白春夜宴桃李園序、ふる郷倣韓退之送李愿歸盤谷序硯銘、風鈴、枕の硯、雨蛙、旌孝記以上十一章　第六、鶉居、其二、紅梅、嵐山夕曉篇、秋萩、枕の流、三餘、よもつ文、附錄、露分衣、夏野の露胡瓊尼之遺伯合十章等ゐり。今ゝ歌をもはらとする歌學全書ゐしゐなれゝ、愛を割

さて、藻屑と題せる、第一、第二、二之餘を載する事とおしつ。

閑田百首

伴蒿蹊、名ハ資芳、閑田子と號す。近江八幡の富豪此子なり。京師大佛の邊ゐ住み、有賀長伯、及武者小路實岳卿の敎子となりぬ。後獨學して一家を成しぬ。文化三年七月廿五日歿す。年七十四。京師華頂山ゐ葬る。著書のうち、近世畸人傳、國文世々の跡、譯文童論、閑田耕筆、閑田次筆、閑田文草等、世ゐ行はる。

蒿蹊の家集ハ、閑田詠草三卷文政元年版あり。そを載せまほしかりしかど、紙數ゐ限ありて、此閑田百首をのせつるあり。

垂雲和歌集

垂雲軒澄月ハ、備中玉島の人ゐり。若くて出家し、こゝかしこ修行しゐるき、中頃より後洛東岡崎ゐかくれて、寛政十年五月二日世を去られぬ。年八十二。はじめ武者小路家の敎をうけ、蘆庵澄月と並びさゝへられて、京摂の間ゐ門人多かりしとぞ。木下幸文も、もとハ澄月師ゐ學びたるありといふ。

此家集ハ、垂雲軒をつぎし夢宅のをしへ子宮下正岑のつどへしあり。歌數五百九十五首ゐりしを、こたび抄出しつるゐあむ。

夢宅和歌集

桃澤夢宅ハ、初の名を正衛といふ。信濃伊那郡梅戸郷の名主ゐりき。早くより、歌を澄月ゐ學びしゐ、六十ゐ近き頃、師のゆづりをうけて、垂雲軒此あとをつぎ、五年六年がほどゐるじをたりしかど、年老ぬれバとて、斧木ゐ、垂雲軒をゆづり、享和元年ゐ國ゐ歸りぬ。さて文化七年ゐ身まうりぬ。年七十三。

家集ハ、をじへ子宮下正岑の輯めしゐて、歌數六百四十七首ゐりしをいま抄出せるゐり。垂雲和歌集、夢宅和歌集の二部ハ、夢宅の裔なる桃澤重治ぬしの、特ゐ貸附せられ、抄出をうべなはれしゐれバ、こゝゐをるして好意を謝するゐゐむ。

杉の下枝

荷田蒼生子ハ、荷田東滿翁の姪、在滿の妹ゐて、兄と共ゐ、東滿翁の養嗣子とゐり、東ゐのゐり、某氏ゐとつぎしかど、幾ほどもなく夫を失ひ、家ゐ歸りて、後再び嫁せき。さて紀伊の女公子ゐ仕へしが、四十九才の折、仕を辭し、淺草ゐ居をえむ。土佐侯、姫路侯、岡侯の女、弟子の禮をとり、其他ゐも敎子多かりき。天明六年二月二日身まかりぬ。年六十五。淺草金龍寺ゐ葬りぬ。

家集二卷、をしへ子菱田縫子ゞ世ゐ出しゝなり。この集ハ、第一編の、國歌八論余言拾遺

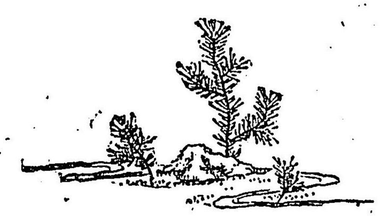
の次ゐ出すべく思ひおきてしおれど、紙數ゐさはりありて、この第六編ゐのせつるおり。見む人その心してよ。

附　言

巻首の眞蹟四葉のうち、三葉ハ、小杉榲邨翁の所藏おり。はじめの歌繪ハ、屋代氏の所藏おりしを、小杉翁の得られしゐて、名ハおけれど、蘆庵の眞蹟ゑ。歌ハ、清き江の底よりいづと見し月ハ山の端おのぐらうつる也けり、といへるを、山も月も共ゐ水ゐうつれるやう、かきなせるゑ。上田秋成の書牘ハ、大田南畝の長崎ゐゐりしほど、秋成のおくられし書狀二ひらの一ゐて、つゐら冊子ゑ事、文中ゐゐるをもて、終の一枚をうつし、おり。

又いふ。此第六編ゐハ、當時四天王とよばれし人々の家集をつどへむとせしゐ、四人ゑ中の慈延の家集ハ、こゝかしおゐさりても見えず、先達の人々ゐも問ひ、大學及上野ゑ圖書館をもとめしかど、見ゐたらざれゑ、遂ゐ一人を欠きて、蒼生子の集を載せる事となしつ。もし慈延の家集をもたまへる人ゐらば、編者のもとゐ示されむ事を、あまねくねぎ侍るゐおむ。

四方ゑ海浪をさまり七つの道ゆきうひやをらおる御代のいつくしををかうぶりて文ゑをしへいたらぬ隈もなくなりゐたれゑ大を國ぶりゐ心をよせぬ人やいゐるそれゑ中にも小澤のゐきな蘆庵といへるなん若きより此道ゐ深く入りたち老ゐいさるまでよめる歌のいとも多うめるをかいつめさる卷々も大うさゑ人ゐハ見せずしてはこのうちゐひめおけるをゐのゑゐのまなびするとてたいめせしついでゐ年ごろの集をとせちにもとめしに翁いへらくおべていいと數多ゐていさゞらおめゑゑ三つゐ一つばゐりかゝせて見せまゐらせおんとて此六帖の詠さうをゐくらゑきさるをおさび梓ゐ刊せて同じ流くむともがらの筆の勞さすけてよといふ人のゐおるにまかせ校じ合することを小川布淑前波默軒おどゐおとらへて板ゐハいつけさせぬもとよりまたき物ゐしゐらねゑもゑさるゐもようなるゑ猶ゐべけれどわゑ見ぬをゑさておけれゑつぎておぎおふ人もゐ𠀋おんゐのゑ物のふの道をもはらゐもめる家ゐ生れてかうやうのをやびをざゐたゴさはるも治まる御代のたまものと思はざらめやいはざらめやと平ゑのぶ憑筆をとりてかくをるすハ文化とあらたまれる年ゑ神無月ゐてゑ有ける



六帖詠草

小澤蘆庵

春歌

ふる年に春たつ日梅を見て

年ぬちに春きぬめりと梅やさく梅さくりとて春やきぬらむ

霞を　としぬちの日數をおめて新玉の春ぬ霞いたおびきふけり

年内立春　數ふれば年の日數もつきなくに花まちつべき春い來ふけり

さらでだにとまらぬ年を急がせて殘る日數も春ふおしつる

うるふ月ありける年はその半ふ春の立ちかるを

此月のそいぎばむ月常よりも遲れてきぬる春ぞといはまし

潮日のあした手あらふとてよめる

てに結ぶ水もぬるめりいづくふもけさやはる風氷とくらむ

年明おんとする曉うらぎの鳴されば

くる春をまつのとかそのあけぐれかとや山ぐらも一聲のそら

試筆とてよめる年々のうち此中に

けさよりい吉野の山の春おもたがこころかもかゝるそむらむ

人おらぬなしといはましを蓬生のけぶしき宿ゐ春いきかけぬ

今ぞ知る老もまろゆといふかるい春立つゝふの心おりけり

岩戸いでし光もかくやあら玉の春かゝけゆくそのゝめ此空

除夜ゐ雪ふりてのついさちのあしさ

ふりかける夜のまに雪いわら玉此年立ちゐへるけさの初花

岡崎のいやりゐ住て三年といふ春ゐあひて

明そむる野山此々しきうら〳〵とおゝゐ三度の春を迎へつ

ふる年より驚此おくを朔日ゐもきゝて

ふる年もきゝし驚それおぶらあらたまりぬるはつ春のこゑ

年あくるあしさ雨ふりていと長閑おりけるに

いと早もふる年遠きおゝちして兩ゐゐすめるけさの初はる

岡崎の近きさとりおる寺々へ百首歌奉らんとて人ゐもよまそる時善正寺に奉る立春の歌

けさいはや春立くらし神樂岡まつ風ゆるくかすをわされり

此おじ題を滿願寺へ奉るゐい

から衣うらめづらしく立つ春を祈りゐさぬる法のこゑ〳〵

元日立春　あら玉の年とはをこそ思ひしらかくれず立てる春がすを哉

立春　朝日さしをこねのまさうきき霞むおり春立くらし天のうぐやま

とし立のへる　いゐし春見しものぞとも覺えぬい年たちゐへる霞おりゐ

春從東來　此國も猶ひがしよりくるはるをもろこし人いまつや久しき

雪消氷亦釋　けさいはや外山の雪ま見え初てかけひのさるひ雫おつおと

太秦にすめる時としあくる曉のゐねについきてついを打ち讀經の聲きこゆ

去らをゆくおまへの火影法のこゑ心すをぬるけさの初はる

高き梢ゐ朝日のうつるを見て

あさ日さす梢此をゆきとゝそめて春まちえたる蜂岡此まつ

春生人意中　はるきぬとおもふ心ゐをよし野の山の霞いおくれてぞたつ

待つけし人の心の春いまゞ花うぐひをも去らをぞわらまし

春到氷解　山陰もおゐりとくらしおつを河川おとゆるきをづ此はる風

初春雨のいとはしどかある日

かい木さへ恵みもれぬ春雨のふる野の若菜はのみふらむ

澄月法師より七十あまりみつのあしさはことゆゑとて　春さてば先ものまうす我よりも

そのそばはのみ長閑々かるらんと聞えしのへしに

春されば先咲く花もいさゞきの雪のまゞひて長閑々くもおし

又ある年のむつき六日といふ此老僧より消息して　うら〳〵おる春の越々り君も我も老

此盛の花ゝ柳の　消殘る雪より雪のはじめまでわらばや又もふるさとのいそん　又やそん

今年のいさくとばのりの老も忘るゝ春の言此葉これのゐへし

君も我もかいの盛のはこりおん柳さくらのもとよりのはる

もろともゆゆぬべき春の有ふるも定めなきよの雪も又そむ

やそぢ餘りそとせは春をまちつけし初言の葉の花をそし哉

鳥のおくゐづまは空のそらむより神代もかくやと天地のゝしきもやはらぎ松ふく風も殊

の外の長閑のて千代よばふ心地はせらるまば霜雪はふりとふりのし老も更の若菜籠と見

きくもの毎のこゝのさまのみの新玉は春めきゝりさまど隙の駒のとゞまらぬ明くれての

のき粥くふ日の成て雪いとそろふれるのおけどもいまだとぞつぶやのる年毎の今日の

そさしきのぎりつどひ梅をのざしうさげしうちあげのそぶ日のありされば思へるおとを殘

さでのさみにいひて心をやるとてゐろじの翁のやしき聲してまづうさふに七そぢあまり

七とせの初春のまとゐといふを句はじめにおゝるその中の

永らへて見るのひのるいあづさ弓はるたつ山の霞のりけを

まつ高き風はそらべの殘りける千年のあとのふるきよの聲

とう俗の色香のらぬを梅の花のどちりは世の咲いそめけむ

軒近く咲ぬる梅のこのまよりとは山はたのをか菜つむみゆ

はつ〳〵の若菜や萠ゆとあさるらん人め見え初る霜の古畑

初夜過る頃人々歸りさるの山野を見れば雲晴て月さやのおるのねられねば布淑いいづく

わたりまでのゆきつらんのど思ひやりて

跡もおきすさく大路の古きよをかもひ出つゝ雪やわくらむ

今い桂のおそいのめと思ふに銀橋を月のわさせるゝしきならんのしと思ひて

雪つもるよるの桂の河はしい月のをたせるみちのとぞそむ

亥のときも過ぎ待りられば

桂人いまの歸らんかるものきふにぬの時もはや過ぎのけり

日の影少し暖のおるわしさ麓のとゐ出さるにさらごの風ゐおびく炊雪のと見えつゝ

春は日ゐ雪うもちると見えつるゝ消ぬさらごの光おりけり

よも山の雪ゝ村消さるゐひらの高嶺ゝ白のねをはべさらんやうに春日ゐのゝやくを見て

はるゝ日ゝ雲ゐゐ見えて白雪は高嶺まごのはぬひらのとゐ山

春　日　何となくはどゝきものゝ初春のをどりは空ゐ匂ふ日のうゝ

初春祝道　行末の長閑ゐをえて天は道も正しきみよにはるゝきゐけり

法眼純方より宮の御當座十首は卷頭とて初春霞をやゞて詠進すべき由いひ來れば則詠て奉る

淺をどり霞ゐもるゝ色もおし春さちくらし四方のやま〳〵

初　春　雪　霞みゐへを猶ふる雪も今日よりの人のおゝろの春ゝ埋まを

早　春　梅　冬うけて咲初しかど梅の花はるのいろ香ゝおをゐゞ有ける

春日望山といふおとを甲斐權守季應のよませしに

春くればいづくの山も一重山うさおるみねもわうを霞をて

子日の心を　春日野ゐいざといはましを山陰のゝふの子日ゝ待つ人もおゞ

はつ子ゐ思ふこと侍りて

子日ゐも引く人おくてふりにゝる身を哀とや松もかもはむ

霞　日ゐそひてさゞを木のめもはる霞深く成ゆくをよし野の山

ふゐ心題を白川心性寺百首卷頭ゐ

久ゐへん我まつ山ゐ萬代のはるをこめてぞかををたおびく

あさうのをみ　朝霞さてるををればいつしうと覺束おをしはるゝきゐゝり

山　霞　を　あさ緑うのををそめてぞ足引の山のうひゐるいろゝをせける

朝ゐ夕おなれでもををばかもゝかのかををやはてん春の遠山

野山のうをみをめでて

霞さつ野山ををれば一とせのくはゝる老もうちををれぬる

杜　霞、梢よりかつ顯はれて朝ゐををやゝはれそむる山もとのもを

河　上　霞ゝみなせ川霞のみをのゐらはれて一すぢふうきをちの山もと

水　郷　霞ゝひと筋の霞のうちや久世のつら梅津大井のゐさりおるらん

湖　上　霞　唐崎のこゝろゐておる一本の松もはのうゐかをむうら〳〵

海　霞　かぎをおき青海原ゐさち渡るはるのうををや天のうきはし

霞　春　衣　花鳥をゐやゐ織はへ春のきるかををのころも幾重さつらむ

立そめし春の霞のうををゞろもひをうさねてやそふ色もをん

霧中霞　はる深き分おし嶺の朝おゝ〜のきゝわきゆるあとのとや山

定靜の阿波の國よりのぼりて都ゐ十五年の春を迎ふる由いひて　淺綠霞の衣たちのさね

猶九重の春ゐわひぬるとよめるのへしゐ

十年あまりいつ馴ぬとも思いぬゐのきゝの衣さや重ねつる

いたく霞める日松のむらだちさるをきて

ときゝこのぬ松の煙もうげろふのもゆる春日ぞ立まさりける

鶯

花ゐ鳴く心の色もかのごゐら音ゐあられゝ春れうぐひれ

何事の腹ださしうる折ゐしも聞々ばゑまるゝうぐひきの聲

初鶯　やゞて此垣ねや古巣々さよりの春つゞそむる宿のうぐひき

早鶯猶若　こゝろとく春告初るうぐひれもまゞ舌だゝて聲のきこゆる

朝毎ゐなくを　朝おとゐきなく鶯きゐけ猶はるゑちぬ身もはるゝと知るべく

山家鶯　山ゐげや柴のあゝ戸をゐゝさしてはつ鶯のおゑをおそきけ

名所鶯　春寒きくらまの山れうぐひきいゑどる〜や雪ゐおくらむ

ある夕ぐれゐ　鶯いそこともいはゞ花ゐねて古巣れはるやわきれはつらん

鶯聲和琴　ゆき寒き梅ゞえ唄ふてとのねゐきゐるうぐひき聲ゐはき也

うゴまさ寺にて鶯の鳴くをきゝて昔かての小路の家の松ゐ朝おと時もたがへずなきけることなど思ひいでて

鶯の鳴く聲きゝゞいそのかみふりしみやゐの春ぞおひしき

鶯語漸々稀　鳴とめぬ花の梢いうぐひすのまれになりゆく聲にこそゑき

野若菜　すゑ遠き春野の若菜かゞふれゞ摘むべき千代ぞ限知られぬ

若菜つむ人につゐはしける

頼むなよ若なといふいなき名にて年つむ毎に身こそ老ぬき

春の野に出てといふ句を

年毎の春の野ゐいでて摘つれゞ若菜や老のゞゝを知るらむ

古今集の詞をいれて春の歌よむとて

春日野のとぶひの野守老ぬらしいくよの春の若菜つみつゝ

雪中若菜　摘む事のかたみの若菜それをさへをしとや雪の降隠すらむ

むつき末つゐさ雪のふる日いうにふるやとかゝさらじゐくれゞ軒ゐさき庵ゐて爐邊ゐも

さながらつもるべくゐゐえゝれゞ

風さえて猶埋火のゐさり迄はるとしもなくゆきぞふきいる

いさく寒き夜　春寒を猶きさらぎの厚ぶもま重ねてよものあらしをぞきく

二月餘寒　ゝともをれば花ゐまがひて散る雪ゐ梅ぞ香寒ききさらぎの空

餘寒月　ゝ更々ゆけば猶うげ寒し春の月うすむとみしや雪けなりなむ

ゆどうなる日松風をきゝて

まつゐ吹く春風ぬるく成にゝりいづくの山も雪ゐのこらじ

春草　いづもをう哀といみむ朽殘る霜のふる葉もこだのもうくさ

雪ゐまゞ消もはてぬを野邊ゐはや薄絲なるはるのわうくさ

春草短　ふひ交る苦のみどりももうぬまでまゞはつうなる春の若草

梅　日のめぐる南の枝ゆ霜どけゐぬれてはゝゑむうめの初はな

見し夢ゐあとなき花の下ぶしに梅が香ふうきかたしきの袖

太秦ふてむ月六七日の頃軒の梅こゝかしこ咲たるを

假初ゐ香をとめてこし花ゆもとゐ馴て三年の春もへゐゝり

梅ゐそへて布淑ゞ　鶯のねながらとまで君が爲思ひ折ゝる梅のえぞおれといへるうへし

鶯のあうでわうれし花のえをとひうもくべくゐはふ梅が香

夕梅といふことを

花の色ゐさそゞれ時の垣ね道ゆきまぎゞてゐ匂ふうめが香

閨夜梅の繪に　匂ふより木立ゐゞらに思ひやる心のうめゐやをもかくさを

ある人の讃をもとめし梅のゑを打ゐきしゐをいでて

植しよりいつしうをんと思ふまに年も立枝の梅咲きゐゝり

雪中梅　ねさしとて花をば雪の圍ふともいうゞゐすべき匂ふ梅ゞ香

梅度年花　梅ゐらで何の草木う玉くしげ二とせうけてさきゐゐふべき

坐主宮より春風先發苑中梅といふ題ゐて歌めされゝるゐ

こと木ゐゐ吹くともわうぬ春風拔けさぞをそのゝ梅の初花

野　梅　ゝさしてゆく方もゐけれど香ゐめでて梅咲く野邊ゐ遊くきにゝり

閑庭梅　さきぬやと人もこそとへ梅が香を垣ねの外ゐ風ゐさそひそ

梅薰袖　見ぬ人の爲とてをれる梅ゐれど花の匂ひゐそでゐこそをめ

梅香留袖　梅ゞ香ゐ人をもうゐうをを日を重ね立よる袖ぞふうく去をける

風搖白梅朶　さえうへる風の立枝の友をりゐ花ぶさゐゞら梅やちらまし

伏見山の梅さく頃ゐうゐらをとひてんと契り侍りゝれど久しく風の心地ゐわづらひ侍る

はどゐ頃も過ぬゐりとき丶て荷田何ゞしがりいひ遣はしける

さく花のあさりを厭ふ風のまに契りしうめの折もをぎぬる

紅梅の木されさる給をもてきて讃をこふあれば其えざゐ短尺をつゝさりそれゐ

紅い人のめゐつく色ぞうしあまりおざれてあざゐをらるゐ

柳　青柳のいとへざていもをつるゐおよりきていい猶まさる緑を

門　柳　春くればさせることおき賤ゞやの門の柳のいともめづらし

はるくれば人ぞ訪々る隱也ゞのうどん柳のいとはしきまで

隣　柳　青柳の糸を隣ゐをるやどいかもひうけをぞひとゐとはるゝ

川　柳　かげひさを川邊の柳うぜふけば水のをどりの色ぞわうるゝ

岸　柳　川うぜふおびく霞の絶まよりうつ見えそむるきしの青やぎ

柳絲緑新　あら玉の春の柳のあさをどり糸くりうへしいく代へぬらむ

柳の綿に　淺をどりよりてをぬまに青柳のいと深くてそ春もおりぬれ

早　蕨　都人とはをば春もつを〳〵とひとりやをらん峯のさをらび

うゴまさゐて庭の蕨もえいでぬる頃

足ひきの山のさくらい咲きぬやと垣ねの蕨をり〳〵ぞをる

やよひ初めつ方仁和寺わさりの花をておらびの岡ゐ休らひゐたるに雨降いづべくふがえ

ければ立のへるゐ母のもさ給へれば蕨を取て歸りつゝさの嵯峨のゐへさゐもたづさへ歸りしおど思ひ出て

西山の花をて歸るをり〳〵のつともかはらぬ峯のさをらび

桂より布淑ゐ桂鮎とると出たつ道のべの蕨をさへゐゝふ奉るとて二くさおおせよる返し

桂ゐゆかはべの蕨とり〳〵ゐをりをもゞさぬはるの音づれ

春　月　暮ふゐのく霞おめさる花の色もゐの〳〵をえてゐゐふ月ゐゆ

去年よりもかををそひつゝ春毎ゐ我よのふけをををる月影

なゐ空ゐをる影よりも春の月いづさいるさい猶ぞうすめる

江　春　月　そことおく夕汐をちて霞む江の春のをるめい月ゐこそゐを

春　雨　春雨のあやおる池い時をうぬ水のみどりもそふかとぞをる

梅柳のさゐのりゐ雨のふる日

梅ゐのをり柳々ぶりて糸雨のつを〳〵とふるはるの日ゐゞさ

朝ゐ庭の面をめりて雨ふりしなしきををて

降るとしも去らでねしよの春の雨を明てをるてそ長閑のりゐれ

小雨ふる夕暮ゐらたのおくを聞て

小雨ふる春の夕べの山ぶちをぬれてねゐゆく聲ぞさびしき

雨の音のすれば櫻の梢いかゐらんとて

春雨のおとときく度ゐ窓あけて軒のさくらのこのめをぞまる

遊　絲　春の日のゆゑ野の原ゐ遊ぶ糸のいつくるべくも見えぬ空哉

春　曙　露は身を常ゐもおかゐと思ふ迄こゝろぞとまる春はあけやの

歸鴈知春　一年ゝわをれてゑちもふくれゐん霞めば歸る春のかりがね

春曙鴈　行く鴈もとゐをおゑをやねゐゐきてゐへりををらん春の曙

夜歸鴈　春のよの夢の枕をとひすてゝ闇のうつゝゐへるかりがね

いとあゑゝかゐる日影ゐゐたりて打ねぶるゐゐちかくきむは鳴くを聞て

人めおき垣ねのきゝをねゐなきて春の眠をゐどろゐしつる

呼子鳥　いづこぞや呼子の山の呼子鳥かををぶくれのゆふぐれの聲

雲雀を　霞分々今ゐゐつちし夕ひばりはるゐゐ聞しこゑのちゐづく

雲雀落　野邊近き垣ねゐ床やゑめつらん霞める軒ゐひばりゐつゐり

春駒　乘る駒の羨ましとやいばゆらんとりもつゐぶぬ春の野飼を

花の歌　一年の花てふ花をつくしてもさくらゐたぐふ色やゐゐらむ

長閑なる頃しも咲てとく散るぞ花のめでたきいはれ也ける

あだおりと花やゐへりてゐもふらん常おき色ゐそむる心を

宮づかへせし時殿ゐて常ゐゐる所の軒端の花はさゐりゐるゐ人々の大なる枝どもゐろし

てとをゝゐゐゆくゐ思ひしこと

をらで只かくおがらをよ庭櫻風のさそふも惜くやいゐゐらぬ

おゝかして花咲さりときく頃雨風のはげしきに

咲初て盛まざきゐゐめゐゐぜのゐをざゝしゐるはおのはる哉

いつは年ゐや彌生十日ばゐりさが山の花をんとて伴資芳よきぬ道おをば立よられぬ此頃

い日まぜゐ雨ふりて今日もいゐゐおど思ひしゐよくはれゐり朝戸出の寒さいをいの風ゐ

どゐをゐさをゐるゐやゐらむ

櫻花まちどゐおゐりしとしゐればさゐりもいまざ朝寒きそら

かくて打つをてゐらびの岡御室など過て大井の川邊ゐゐりねてはゐなき言いひゐいし遊

べば心地の物むつゐしかをしもおぎぬ春は日もやゝ暮れて花の色のはのゐなるゐろ涌蓮

法師も來ゐひて與ゐいりぬ月霞みおゐらさしていはんゐゐなく靜々し

大井川月と花とのゐゐろ夜ゐひとりかをまぬおをの音ゐゐ

又ある時周尹のとひきて嵐の花見んとあるに打つれてゆく雨いとうふりいづ道もわしりおんとて家ゐ歸りしゞ夕つけて晴れゆゑえゝる時うの人はいへる春雨の雲もはれゆく嵐山日いさけぬとも思ひさゝばやかへし

よしさらば今宵い花の陰ゐねて嵐のさくら散るをだゐをむ

二尊院ゐ行て何くれと打語らふゐ嵐の花も盛をぎぬときゝて

春雨ゐふりはへ訪しさゞの山されば花のうつろひゐゝり

この近きわさりゐ涌蓮道人をゝ侍りゝる其もとへとていひやる

草庵ゐをまを心のいうおらん花のさめうきあめ風のそら

ある年の二月末つゞさ人々數多さゞ山の花をゐまゝれをりよく盛ゐて花のもとにまと、ゐつゝ往事を思ふゐ年々ゐ花ゐおれぬもどこの二とせ三とせ病ゐをうされてえとはせいさく老ぬもゞこむ年の春ともたのまをねば

櫻花をさらん後の春うけてゐもへばいとゞかげどさちうき

其折しも或人のもとよりとさゝぬの春とも知らぬ身ゐしゐれば花の錦ゐさちもまじらを

といへるいさくよゐをびて今日の出たちおども心ゐまかせぬとなるべしいと哀ゐて

ときゝぬの思ひ亂るゝと聞くうらゐ花をそるゐも袖ぞ露々き

獸軒ゞたちまゐゐるゐど花の頃うれより山ざくら咲そめしより九重の都の春ぞいとゞゆうしきといへりゝるうへし

花といへばひおも都も常おきを何おいおふるこゝのへの春

梅をゐまうりゐまさける頃東山ゐいと大きおる櫻のゐるををて花の頃い又もとひこんおどいひさるを此頃思ひ出て一人二人いざおひて尋ね行くゐ心ゐての花さきぬと見えて山の半ゐ雲のゐりねさらんやうおり分のゐりてをるゐ半ちりをぎたり盛をこそ訪いめと思ひしをいと口をしこゝを如意寺といふときゝて

ヒゞ思ふ心のごときてらおらば風ゐい花をまゝせざらまし

雪とふるころしもとひて山ざくら心ゐさゝを花ゐみえぬる

吹のゐる谷の嵐ゐさそはれてそらにぞはおの雪い散りゆく

いうばうりをづけからまし山櫻をり〳〵風の誘いざりせば

山ざくらちるこの本い谷川のゐとゐもあらしゐ聞おされつゝ

かゝることゝゝもいひて木のもとゐをばしまどろを侍りて

咲く花の木陰おらをば物すごき山のいはねゐ旅紙せましや

やめる身いいとゝあはれゐおをえて

おむ春いいうでうをむと思ふ身に猶をしめとや花の散らん

あるとしの春さゞ山の花をゝまうりゝるゝ日暮々れゞ大井の里に宿りて

大井川かは音さゝくゝゝりゝりゝりゝらしの花ゝ風をさぶらし

うづまさ寺ゝうつりをむ春さゞの近々れゞまざしき程より花のつてきくゝ覺東ゝうらを

此春ゝさゞ山近くいへゝゝじて花のさよりをきゝぬ日もゝゝし

信言ゝもとよりゝゝもふどちむれつゝとゝんさくら咲くきゝゝゝあさりの春をつげこせとい

ひゝゝおせさるゝ

靜ゝゝと住む山里の花ざゝりむれつゝとはゝゝゝしと答へん

又さゞの花の頃をとひさゝしゝ

春寒きゝゝとしのさゞの花ゝれゞ彌生の末やさゝりをゝちまし

やゝちりぬべくきゝて行きてゝるくるゝまでゝりて歸りゞてゝ覺えゝれゞ

又こそと思ひし花の盛ゞゝかへさいゝゝげの立うゝりしを

禪林寺ゝさりゝえさらぬゝとゝあり行きて一夜ゝりしてつとめてゝへるさゝ此をさり此花

年々見ゝゝしことをゝもひ出て東北をゝへりをるゝ如意寺此一木の花さゝりゝる行きて

見ばやと思へど太秦ゝ今日ををゞをさむき事のゝれゞをひて歸るゝ

陰ゝれし昔の花をよそゝ見てをゞをむやまゝいそゞはる哉

廣前の花のもとを法師の過ゞてゝ行くを

ゝゞし世ゝ心をとめぬ法の師も猶ゝへりをる山ざくらゝゝ

昨日ひねもを風ふきゝれをゝの曉雨ゝびたゞしく降るゝよもの梢を思ひやりて

ちりゞさの昨日の嵐々ふの雨いゝでゝ花のさへてをゝらむ

花散しより心地も例ゝゝらを立ゝねもことゝくるしう覺えゝれゞ

散しより立ゝくるしき老波ゝ花ゝよりてやをゝばしをを

ちりのゝる花を尋ねをびて

花ゝをゝ散はてゝゝゝり今よりゝ何ゝまぎれて春をくらさむ

まどろをもゝへをめ覺て蝶のとぶををて

惜をゝのねまどろむ夢のたましひや花の跡とふを蝶といゝる

うづまさゝゝるゝゝど花盛ゝるをゝろ夕さりつ方つれ〳〵とゝゞめゝるゝ道覺つと入きて

いへらく今朝より嵯峨山の花散ばせ給ふと宮此ゝはしましさりゝるゞいゝゝるみ心にゝ

ゝゝむ歸さいそゞのせさまひつるゞをち此そらゝて蘆庵ゝかくれゝる蜂岡寺ゝゝゝいせよ

と仰を今いらせ給ふべしとく〳〵門むゝへをとゝゞろのをゝゆくをゝけれゞ座うち拂ふ

ひまもわらでぞさあどのうかゞひさてまつらんも畏おく障子おしたてなどして門遊わいづれゞはや御輿のきいまぬおましだつのさゝふさうじ奉れゞ何くれゝ歌るんぎをも聞しめ候ついでわゝふの御題つゝうまつれとてゐまいせゝるを開きそれゞ春夕花とありゝるをやゞてよみて奉れまき

立おらぶ松の緑もわのぬまでくるゝ色をぬやまのげのはあ
此宮のを心ばへの添けあさゝおれよりぞまうのゝる事わいありゝる

ゐらし山の花をゝまのりて京の友ふゝあひて

咲々ゞ散るさゞ山ざくら露のまの色わめでつと人わ語るあ

宮のおまへゝめしいでられていとゝけどやゝある夕べおゝのしこの花のを物語のついでわ翁ゞ庵の一樹いむのし紀宗直ゞ南殿の種を移し植さるゞ年毎わ匂へど今いさる由をる人もおくて遂ゞかげわ春を忘れぞさゝるいロをしさ花のちぎりわぞ侍るあどきこえわげしを例のをされたるを起さまほしうおゞをも御心わやあらんそれをそあはさん盛つげよと宣ふわ打驚ろきあしゞ申してゝりとをきをのさていかでゝさる事侍らん入れ奉るべきおまし所も侍らずいとゝさじゝおくとわぶをど花おれゞをおはち入るこそいへ何のい苦しからん只其いおしきのまゝわてと宣ふにいゝいせん葎蓬ゞ古葉ゝき拂ひふりたる松蔭わ

くさのおまし所まうけて待ち奉るい三千年わおるてふ桃をもてはやせしきのふゞおごり猶長閑おる今日の空のいさく霞をて雨わやおらんとわやぶをしもいとよく晴を花も少しまゞしくやと思ひしかどさゝりみちて折わあひさり入らせ給ひて御湯さてまつり御くゞものまねる夕ゝけて大をき奉り御おろし數多さび給はりゐひさまされてふのゞよろがひをさるうしろ手をも忘れてふさへわかゝまれる腰をゐひてのばしてあお尊ゞ今日のおどうたひ舞ふさまいえびのおよぐわ似さりとをゝしがらせ給ふべしかうゝしこを嬉しを思ふいもとのあるじのたまも我わとりつきてよろこびをそふるわどあらんゝし宮も興わいらせ給ひて欲倩遊糸繫夕陽の御句玉聲ひゝゝり慈延御次わはひをさりめでまどひて御和を奉る　君ゞ爲つおぎとめおん糸ゆふの永きわあゝぬ今日の夕陽をおどやうわどきこえしげわも君ゞ光わいひまの駒もつおゞるべくぞおがゆる今日ねさちけいめいをるうち櫻花をおさて思へる事をよめる

盛をや急ぎさるらんきのふまでふゝめる花もゝふい咲ぬる
くちをしと何かおちゝん櫻花いろそふ今日も有々るものを
蘭省ゞ花の種とて大きをのとひまを今日ぞいろ香のおもをお
春をへてをられぬ花も今よりいとはれぞせまし蓬生のゝげ

永きよのかもてかおしを命ゐてふる木の花も久ゐにはほむ

宮のさまへる御歌春秋のあゞめつきせで朝あ夕あ老を養ふ松の下庵御うへし

つねゐ我をあをの山れことぶきをきをゞをわへゐゐふ奉る

都ゐ歸りをめどいさく衰へて出たゝんも物うくて思ひやりつゝのをあるゐ布滋ゞ花を携へ來りてわきてとく咲ぬる花の心ゐもまつらん人ゐ見えんとや思ふときこえしかへし

一昨年も去年もことしも手折きて君ぞをせゝる初さくら花

ある年の二月十日ばゝり宮より初花さまへるゐ

此春ゝたまゝん花ををんとてやゝふまで老の長らへゐゝむ

昨日のゝしてまりにふへではつ櫻をいゝゞき蛙ふしにふしみゝをゞきにゝきてゝふこと

あげしさてまつる

はげをつゝ花も咲きゝりよに響く君ゞゐと葉のたまの光ゐ

つまづゝを咲ぬる花ゝ人ゝまゞ寒きひまゆく駒ゐあらゝで

さを竹の君ゞをはしの初花ゝ世ゐ稀らある種ゐぞあるらむ

くれは鳥わやゐめづらし二月の望もまちわへをさける櫻ゝ

爛熳と咲ぬるをてぞ去もゐまゞ去ゐめる老も春を去をぬれ

ふくに　かくなんと聞え上てよかはづあくゐでの山吹折もよゝらゝ

あるふる宮の花盛なる池べゐてそゐにある人らと物ゞさりする程水面ゐ文見えて雨ふり

いで山陰の池邊雨中の樹色のえもいはを面白ゝれゝ夕べは鐘聞ゆる頃までありて歸る神

樂岡の東の路より書をし山をのぞめゞ松の色のゝぶをさる中よりこゝかしこの花のくれ

殘る色の靜ゝある景色いはんゝさあし

松の色ゝ雨ゐくれそふ木間より猶ゐのをゆる山ざくらのあ

例のおゐん方より御使をて御文ゐり開きをれゞ御詞ゝおくてゐゝざをしおぞのあそびを

思ひいでて又もとひよる松の下庵　白雲を去るべゐあそゝとひきつる庵のとゐそゝの花ゝ

ちりしゝみもゐへをゝらせ給ひ暮ぞろまでゐはしまをゐ御ゝへしゐ奉る

塵をゞゐ拂ひもゐへを松蔭の苔をおましゐなをゞゝしこさ

御歸さ催ゐさるゝ頃野邊ゐ鶯のあきゝれゞ

うつり行く花の夕べのをくるまを去ばしとぞ鳴く野邊の鶯

くるつゐしさ雪のごとちるををて

かきくづしけさより散るゝ君ゞこん昨日を待し花にや有けん

昇道ゞさゞの山櫻をしゝへさにうづまさの花ををて　古郷を成ゐし宿の櫻花なつゝしき

香に心とまりぬとあるゐのさそへし
盛どときけばなつゝし陰をめてよとせいゐれし太秦のはゐ

寒暖やどよくゐりてこゝかしゐの花の所も思ひやらもつゝ

山櫻さきそめしよりわさつをのゐきゐ心もはゐにゐりぬる

曙　花　花ゝさゞ霞を渡れる絶間より志らを初さるゐけゐのゝいろ

見　花　春毎にをるとゝすれどさくら花わゝで數多の年もへにけり

年々見花　をる友ゝ年々ゝはる花ゝ下にゐれぬと思ふ身ゝふりにゝり

心靜見花　物毎ふこゝろちらねば名わさちて仇ゐる花も長閑ゐぞをる

隔波見花　船もがゐ波路さしはへかのをゆる磯山ざくら手折てもゐむ

翫　花　限ゐる花の日數をぬばさまの夜のまみざらん事のくやしさ

花　未　他　ゐゝのゐを野山をゐわを櫻花こゝろゆくまでをし春ぞゐき

依花待人　とはれぬゝ誰が爲ゝうき蓬生の花よ人めをまちつけてをよ

花下送日　ゐもわえをさつゐと安き日數ゝゐゐれてもわゝぬ花の下陰

花下逢友　咲しより逢見ぬ友のゐひしくゝ花のゝげをぞ訪べゝりゝる

花時無外人　さきしより日毎にとひて山守も木ゐりも花の友とゐりぬる

花自有情　外のちる頃しも咲て山ざくらこゝろ深さををるひともと

依花忘行　妹がりといそぐ心をわをれめや道のゆくての花しさゝをば

山　花　一むらの雲ゐそゝれ山の端の遠きこをゐの花やさくらむ

山鳥のをのへの櫻さきわゝりゐがき日さらを雲のかゝれる

嶺　花　ちらぬまも心づくしを風越の峯わしもゐどはゐのさくらむ

暖雨晴開一徑花

春山の雨わさゝけきあとをえてかけちわさゝる一もとの花

關　花　わしがらの八重山ざくら咲わゝり春のわらしの關守もがゐ

磯　花　春深きゐきつゐやゐ風ふくたびに花のゐをゐにいその松ばら

花林朧月　ふやろ夜の月も影をやをきつらむはゐれ林ゝさしも霞まを

雲花無定樹　咲く頃と思ふこゝろわ松杉もわゝでやゝる花のゐらくも

古　寺　花　色わ香わめでをば花のさがの山めぐりもわはじ法の輪の寺

山　家　花　いゝゐれや世をも厭ひし山里の花の色香わそむるこゝろゝ

閑　居　花　人とゝぬ宿とて風のふゐのざらば猶ゐづゐわぞ花ををてまし

花　麻　櫻花香ゐめわぬさとちりしより塵わや神のまじをそめゝむ

花與春句　誰かゑるさけびのさとゐ匂ひそふ花と春との深きちぎりい
老木櫻の繪を　我も老いさくらも古木ふりせぬいあのぬ心と花のいろ香と
八重櫻ゆゑゐ信美の歌ゑふゐ
深くゐる春のゆくへもひと枝ゐおもひやらるゝ八重櫻かゐ
春ぞもくなきといふ句を
かげゐまん春ぞ少ゐき老の身いよしや日毎ゐ花を見るとも
長門介彦明の白詩選新刻ゐりぬとてゐくれまふせる枕上ゐふきてをり〳〵見ゐどすそのうちの五言律を見て花下歎白髮を
白のさゐまのふ櫻をうつら〳〵されども言ん言の葉ぞゐき
一乘法師の殘花を拔りて　心ゐる人ゐさせぞば山櫻ゐざゐちるとや花の歎のんとよめるのへし　手折きて君しさせぞば花いはやちりにぎゐきと我や歎のむ
禪林寺ゐ花見ゐまのりしに誦經の聲の聞えて嵐に花のちり乱れゐるを
うべしこそ世い常ゐしとゝく法の聲の中ゐも花ぞちりゆく
志賀山越　まえゐづむ妹の袂ゐふきのけて花をのさぬる志賀のやま風
東山ゐ遊び侍りゐるゐ嵐の山ゐちり殘りたる花ゆみえしの夕のけていとさびのゐらねば

それとゐく霞さはてゝもさし花ゆおもゐゐ殘に夕ぐれゆ山
惜花馬蹄遲　乘る駒もふまじとや思ふちる花の蔭ゆく道い過ゐてゐに
花の頃いと思ひしゐも訪いざりゐる人を思ひて
こぬ人をいつとの待むゐら玉の年ゐまれなる花もちりゐり
落　花　惜むとてとまるべきゐいゐらねども散る花毎ゐゐさらとぞ思ふ
ちるぞうへゐ散行くゑれば櫻花をしむ身のさや又殘らまし
纔見落花　此春のうきいまざさぬ木の下の花いいゴれの枝よりのちる
落花を見て　さくら花今いとさそふやま風ゐ心ゐいせてちり行くもうし
花落樹猶香　木下を猶ゐゐいせてさくらばゐ散ても人をゐおぞらせつる
夕　落　花　よしやふけ暮ゐゐば少の櫻花ちるをだゐさん春のゆふのぜ
月前落花　一面のげを後も去のべとやよひ山有明のつきゐ花のちるらむ
夜思落花　をしさつる人い歸りて櫻ばゐひとりやちらんよるの山のげ
河　落　花　よしの川ちりのひくもる水上の嵐をさせるはゐの去らゐさ
海邊落花　櫻ちる春のみなとの追風にはゐつみそへていづるもゝふね
さが山の花見にまりまりけるに早ちちりぎて侍りければかひなくて山深く尋ね侍るに

一木ちりおくれたるが殊更ゐめでたくおぼえければ

吹のこす嵐は山のさくら花さかりをのみやあはれといみむ

殘花誰家　たれゐ住む庵のかきねの花一木よそにいみえぬ春を殘して

深山殘花　おそく咲く花なりゐらし山さむきをぎその奥にみゆる白雲

ひゝなの讃をこひゐるに

ひと方にうきを拂はゞ咲く花のもゝ悦びのこの日なるべし

彌生三日いとゞいさう寒ゐりゐるに彌清げ桂ゐ歸るゐつけて布淑げもとに文遣はすゐへり

がきに

まち〳〵し春の寒さゐさく桃の三千年をふる心地こそすれ

苗代　種蒔ていくゐ經ぬらんこゞもりに溥もえぎなる小田の苗代

河苗代　おむ秋のたのこもさぞな河添の苗代こゞゐゆたかにぞひく

いさく霞めるにかへるの鳴くをつらねうさ

霞そひくもれる春のゆふ暮に池のゐはゴのあめこひてなく

ほどもなくふりいゞ

こひて鳴く蛙の聲やきこえゐんあまつ空より雨くざるなこ

雨くざる夕べの空をながめつゝ入あひの鐘の聲をこそきけ

夕　蛙　春ふゐきねでのこさりの夕まぐれ霞むこぎはに蛙なくなり

大根の花麥の中にまじれり

白妙の大根の花ゐゆきに似てもゆる草葉とこゆるむぎはさ

菜花の盛おるおろ山吹もさけりけもべ

山吹も菜もうきうき花のいろだゐしさけば近づく春のこゐれ路

菫

あゐずしてくるゝ春野の露ながらつめる菫に月ぞうつろふ

紫のすこれの花のにはへばやなべて春野のわかずこゆらむ

古砌菫　あれはてゝ野となる庭の菫草こゝぞむかしの垣ねとやさく

つゝじ　旅人はいゐる山べにたく火かとおぐれにこえて咲く躑躅哉

樵路躑躅　白妙のつゝじ花さくおば人のゐへるさおそき頃もきゐゐり

杜若　水ゐれてふるき澤邊のゐきつばた咲るわたりや八橋のあと

杜若を折て人ゐおくらんとて手づゐらもてまうで行ゐるゐ

杜若おをれやまるゐと道をゲらそでゐ日ゐげを隔てゝぞこし

夕山吹　暮ゆくをおのゴ色とや夕露ゐ咲きものおらぬやまぶきの花

おもふおといはでやゐふも山吹のくるゝ離を人もとひおを

里山吹　山吹のさゝりとおれバやへ〳〵の人も訪々りたまがはの里
　　光あるさとゝ玉川山ぶきのさゝりゝひとのむれてこそとへ
籬山吹　ゑめ結しまゞのきもえぇ山吹の八重ゐさかゐるはゐの盛ゝ
桂より鮎ゐ山吹をゝのざしておくゑるゐ
　　いはぬ色ゝいづことさして若鮎のゝざしゐくめバ玉川のつと
慈照寺ゐ遊びゝるゐ池の藤ゝまゞしくてそれのゐらぬゐなどいひて歸りざまゐ
　　咲くもまゞおゐつゐのなきを立ゝのへり又こそとはめ藤波の花
折藤　をりてゑむ夏をゐゝてゝ句ふともゝのへらぬ春のふぢ浪の花
池藤　いつしゝのゝ藤さく池の水ゐゞゑうつりゐゝりゐ春の日數ゝ
松間藤　松の色の又一しゃの藤ゐづらかゝれとてしも花ゝさゝのじを
雨中藤花　そゐちつゝ折々ん藤のふる言もかくこそゐめのゝふの濡色
春煙　春さむき松ゐ浦嶋かゑませて心ゐるゐまゃゝぶりさつらむ
春夕　そゐとゐく花の香かをり櫻色ゐゐべてゝのゑめるはるの夕暮
春獸　春とてもとまらぬ隙の駒ゐるを長閑々き影とゐどゝ頼みし
春のとくゑぐる歎惜をて

暮春月　梅ちりて柳さくらとうつるより見る〳〵花の春ぞたけゆく
暮春花　をしと思ふ春の日數ゝくれそひて夜ゐ〳〵ふそき有明の月
江上暮春　さき散るゝ程ゐき花の盛をもまさでや春のくれてゆくらむ
山家暮春　々ふの日も入江ゝのゑみて行く船の跡ゐき浪ゐ春ぞくれぬる
旅宿暮春　山里のゝきねの嵐歎りゐ見し人めもさえてはるぞ暮をゆく
此十日ゐまりまでゐ花ゝちりはてたゑバやよひの末つ方ゝたゞ青葉のゝ志ゆりて夏ゐも
かはらざりゝれバよめる
　　花もゐき春の日ゐゝの末の山ゐつゐこゆとゐ色ゝゐのはらじ
春ゑ惜　うつりゆく春歎惜むもゐゑ知らぬゝを歎くとや人の思はむ
殘春二日　花鳥ゐふくれて又やこの春も殘る日のゑをひとりをしまむ
　　今日暮れバ明日も暮ゑゐむ明日暮ゑバ今年の春ゝ殘らざるべし
春光只是在明朝
　　春ゝたゝゐゐんゐしさを限ぞと思ふ今宵のいやゝねらるゝ
三十日ゐ　昨日まで猶々ふゐりと頼ゝしをそゐりさぶきぬ春の日の影

三月盡　暮ぬるゝ春いとてふの夢のまにおれをし花をおも影ゐして
三月盡夜　まどろまで猶ぞをしまむ花鳥の春も一夜のゆめとおそおれ

天明八年此正月はての日加茂河の東なる小家より火ゐやまちたるゞ風荒らましく吹て時の間ゐひろゞり内裏よりはじめ都の家ゐ殘りおく焼けさりしのゞおのれもすむべき所おくて二月十三日の夕べより太秦十輪院ゐ移りすむ此寺十年ばゝりすむ人おし廣き寺のいさう荒れさる所おり移りける夜殊の外寒くよもすがらいもねぞ

荒ゐゝるはち岡寺の旅ねゐゝ春さへさむし身をさせゞおと

夜ゐゝてこれゞ軒ゐ梅ありいとよくさけり都ゝ一木も殘らぢうせさるをもえらぬさまなる色香おるもゐはれゐて

世はおれて人もすさめぬ梅おれや思ひの外の春ゐゐふらん
これも都ゐさきてましゝゞいゝでゝてさびの烟ゐもれまゝせて住おれしうづまさ寺をいでくとて
ましとぞゐぽゆる
わらいやこしておこさりぬれどいといさうよもくおれゝゞ今ゝ京ゐゝへりてをといふゐ

わら玉の年の四とせをふる寺のもゝられゝはるも袖ぞ露けきこぞより心地そこおへもどゐどろ〳〵しくもゐらねゞ寒さにたへて此頃までゝかくおれど此後折々ゐしくて臥しおきしつゝゐるゐ二月十五日夕べより殊の外心地ゐしくいゐしすけおどもるを見てよべの事をとひきゝて去りぬこれよりゐつしさいさしもゐらでうちふしてあるに三月朔日頃少しくふものゝ味おどいでさる三日ゐ又ゐもしでとゐつしくなりぬ四日より又少しゐこたり侍り癒ゐゐらもゐ疫ゐゐらでいとゐやしゝれゞこさびゝ中にし何ゞしといふ醫師ゐちぎりしおとおれゞ藥をうく日をへておゝろよゝもど老病つゝもゝもゝやうゐいえゞさしなも事もすべてやめておけうちの所爲ゐゝ思ふ事おれゞ人してういつゝさもゝ曙に

ととはゐゐゝぬの山のいつゐゐゝ思ひ競べん春の明ぼの

夜のゐくるを待もびて

やこぬれゞ夢ばゝりおる春の夜も明るまつ間ぞ久しかりける
よもすゞら雨ふるこゝゝしこもるおとをやこおくいもねられぬまゝゐよめる
もる音ゐいのねられぬゝ春雨のふるやゐさへて住めゞ也々り

むらしのすゑゝもりて床うへてねさる夜の事おもひいでて

雨もりてねざりし夜半を思ふおもをおいふるやぞ契有ける

初春のころ上田餘齋がとひし後おれよりいひやるいと〳〵疎く經し我をとひ給へりし御心ざしの嬉しさ言ふもつきぬを筆おいいうでと思ひながらぬやをだおとてなんおぞ見奉りしよりはねさちふもちいといさう若やぎ給へるなん道のさめふもいとゞ頼もしうこそおぼえ侍る寒さも今をばしならんいとよう左のぎ給へ初春のつどひおぼしいでて梅何くれと心よせ給へりしおぼ老さゝ馬の重荷おふおぼ小付とやらん病おさへなやまされ寒さおうていおさへせで過つる罪さりどころなくなむ

言そへて給へる梅ぞはつ春の草のむしろのゑやびおりつゝ

藥さまへる嬉しさお

若えつる君おあゆやと給へりし藥呑をつゝいうむとぞ思ふ

新むろのもよはしをきゝて

とくたてよさらば都お住ぬべき心おちぬんきゝゲおひむろ

心地そおなひておもりぬゝるほど稀お見いだにお日のうら〳〵とてるを

いさづらおねてもふる哉花をても惜りぬべき春の永日を

風の心地おてゐづらはぬ人なかりゝる春をづうらもやをて

をな人の身おしむ風い春毎の花おいとひしむくいなるらむ

櫻のちる左たお子猫のどれさるうさ源氏物語の心とみゆ

思ひ入る身をそ及ば絲此ひとよなどすの内の花おむつれぬ

朝毎お此あさりありくお草川の水のあせさるをそて

朝な〳〵うれ行く水やくさ川のをちおちわくる苗代のころ

室　山　○室山の老木ももとい若櫻世おめでられしはなおやいあらぬ

蘆　屋　里　あま人のわが住むうさもさどるらし霞む夕べの蘆のやの里

千　葉　野　思ふおとちば野の春にもえ出るこのて柏のいつうひらけむ

鹽竈浦霞を　左やゲまの烟も限あるもれをうちの名ゲてお立つかすを哉

末　松　山　花　松うげお咲るさくらい末の山左さより浪のこにかとぞをる

古人のよめる詞を題にして人皆およませをづうらもよをゝる春の歌の中お

殘りさる雪おまじりて山里の垣ねはだらおふふるわうくさ

子日とてかずまへられば梓弓おしてもとはめゝふの纏ねお

とくるうとをる程もなく氷りゝりまだ春あさき池の水なを

梅がはら鳴く鶯ゐすゑさされて花もや咲くとさづねきゐゑり
明そむるそねの霞その一なびき春のゑしきゐ花ばゑりゑゐ
今宵たれやをいもねをゐみ吉野の花ちる山を月ゐ分くらむ
とき駒ゐ猶むちをゐそ添へてゑれ花もや散ると心はやりて
ちりがたの峯の櫻ゐ風吹ゑゑをしむこゝろの空ゐこそなれ
永ゑらぬ此世なるをい春の日のゆほびゑゐてぞへぬべゑりける
少女らが袖ふる山のをそへらの赤くそゆるゐ岩つゝじゑも
苗代のあつくる賤も散る花のせきとめがさき春やをしまむ
すきゑへに春の荒田をさつ雲雀いづくゐくさの枕ゑふらむ
老のれち岡崎ゐあるやどやよひの末つ方難波にゆかんとするゐ經亮嫁袋など携さへきて
思ひいでゞうちつけゐそよ假初の別をざゐもをしむ心をとゐりしかへし
打出てみねどもをるし石かねをいれし袋のなかのかもひゐ
こたびのをかれゐ布淑がよめる　をそよしの春ゐ心ゐとまるとゑ都の人のまつを忘るな
京ゐ歸りきてかへしゐ遣はしゑる
都ゐてまつらんとだゐ思ゐをゞ立ゑへらめやすそよしの里

重愛がいへる野山なる盛の花をめゐゑけてこゞれぞゆゑん淀の川船是も京ゐ歸りて
船下をかはゞ山ゞれ花ざゑりともに見ざりし事ぞくやしき
花のちるをそて敬儀　盛なる花も旅ゆく君ゞさめぬさとなりてや風ゐ散るらん
此度のぬさとちりなゞ櫻ばな歸りくまでゐのこりしもせじ
あれさゝんとする此くれゐ澄月より　をばしだゐ別るゝゐをし老らくゐあれの夢ちもは
ゑりがたきゐをゑれをしむとて人のたちこそゑるやどゐてゑへしもせで夜ふけぬ曉いで
たつとていひつゑばしゑる
をばしなる別とおもへど老らくゐ是もや終の旅ちならまし
廿日のあのつきなりゑれゞ霞める月のやゝうをらぐまゝ山々の花の色をきそめさる景色
いゐんゑゑなし
月ゐ殘り花さく山ゐ雉なきてあゑぬことなき春のあけぼの
辰刻ばゑりをゞ伏見ゐつく船の事何くれとして已ばゑりゐなりぬさて酒いだす遠ざゑるまゝ
川邊ゐゑちて見送る人のいと小さくそえてはてゐうせぬかくて八幡山崎のあひだを下る
明くれゐ遙ゐそつる山々のふもとを今日ゐくゞるかはふね
こゝかしこ花れ盛ゐるもゐりちりたるもゐり京ゐる人ゐ見せまやし水つねよりも多くて

とく下るにゝへりをれば今いはるゝふきぬをば

かへりをる都の山もかをむまでとはざりぬる淀の川ふね

いとひろき川づらゐこゝかしゐゐ鷗ゑ打むれて遊ぶ心ゆくさまゐをゆ

鳥すらもおのゞむをゝ〳〵遊べるを獨うゐるゝわれや何なり

今いあゞらわゝりゐも成ぬつく〳〵思ふゐ昔よりたえゝる橋もゐまゝある中ゐこの橋ゐ

そわきて名高ゞをゝれとゐもふゐ

開渡る長らの橋の名ばゝりも殘るゝゝたきよゐこそ有々れ

申さゞりて難波ゐつく昔ゑさの今いこゝゐすむゞまちつけてゝゝみゐ悅ぶ契をるやど

りゐてこしかゝの事こたびの事ゐど語らふ事多くて夜更ぬれゞゐをとくゐどてゝへしつ

今いねなんとてぬるゐねらをねば

なゐは江の蘆の一よと思へども旅ゝふしうき物ゐゞ有々る

とくゐきて心ざを御寺ゐまうで誦經ゐどはてゝ御墓をゞをを

おき人のいそぢゑ跡をとふまでも猶ゐり出ぬみをやもどかん

きのふ佛事はてつれゞ今日ゝ住吉に詣づべしとゝて以直といふ人船ゐて迎ゐくゝゝ此

近き堀江ゐ船よすとゝらせゝをゝいと嬉しうて行きてのりぬ何くれの堀江を過て小川を

南ゐくゞををこれより住吉ゐゆく船路とゞいふゐるつのぐむ蘆ゝさはるべくもゐらを流ゐ

まうせ心ゆく川船ゐり堤のふりゝる松の片枝ゝゝりをゐがらさりげゐく春めく色ををて

鹽風ゐかゝ枝ゝれぬる老松もゐゐ一ゑゐのはるにゐひぬる

松原のゐとりよをゐりてかちより詣づ昔いはけゐゝ頃母上姉君ゐど共ゐ詣で奉りし事も

今ゑやうゐゐもひいづ年毎ゐ遙拜し歌奉れどいと遠々れゞえしも詣でぬをゝふ廣前ゐぬ

うづきて　今い世ゐまつことゝもゐく老ぬれど猶いのらるゝ言の葉の道

ふりぬとて松やゝかはることの葉も昔ゐゝへせ住よしの神

松の姿のさま〳〵ゐるを見て

言の葉もゝゝをとゞを思ふゐのゞゑし姿かはれるうらの松原

こゝゐきゐひて僧日騰ゞいへる　古里の松も忘れて住吉ゑ春の海べを哀ともをよ此返し

古里の松も今日こそ忘れぐゝ生ふてふ春ゑうをべとひきて

濱邊をゝゐゝをなゝ見めぐるゐげゐ歸るやうもゐぼえを時うつりけるゐるべし遙ゐ見え

し干潟もをつ汐ゐゐれゝゞ舟ゐのりゐんとを猶ゐゝをゐぼえて

住よしゑ汐干のゐごりいつゝゝとかへりをらるゝ跡の浦波

くれはてゝゝも景色いはん方ゐし日騰秋もゝゐらをゐどいひて　春霞立をゝれゐゞすみよ

しの菊咲く秋をまつとをちおんうへし

立うへる春はうらみい住のえの秋のつきみん時ぞわすれむ

くるつわしさい入江昌嘉が亭わ招うれて昨日の物がさりわるいふることいも語りあひて

歌よむべうもあらぬ夜ふけぬ

廿七日わの夕つ方舟わのらんとするわ彼方此方より人々きて別をしを秋をちぎりおどせ

さわしゝれバもらしつ日腦　浦風い今日いおぬ吹を難波えわ老の浪よる影を留めん返し

をばしゞわ影はづうしき老の波何う難波のをづわとゞめむ

むうへわとて都よりくゞる人ものりわひて舟は中物がさりがちおる日暮ぬて何はは之おきよるの波わさうふふとのを聞ゆ明はおるゝ頃伏見わつく經亮元廣おどよべよりやどりてまつ經亮　のぼり舟まつほどもおしかねてより君が心のをきわまうせてうへし

我舟の遲くもあらねど兼てとく宿りて待つわいうで及ばん

いとふぎはしくて歸りぬゆくさまにうへりをられし軒は花のうつゝ殘れるをみて

難波わていうでと思ひし古里の垣根は花いおはのおりゝうり

夏歌

やよひわ立夏はせち有て此卯月朔日わよめる

春うけて夏いきぬぬと皆人の花はころもいゝふぞ替へける

首　夏　うを祭るうゴきたぬらし山本のもりの柳わをめはへてゝり

首　夏　藤　けさよりの夏をせわとや咲うけし春いきのふの藤波のはお

やむごとおき御方の春は末つ方わはしまさんと聞えしわ卯月たつ日わわはしまし々れバ

なごり我きのふの春を惜をゝん夏とともわぞ君がきませる

花も今日までいいうゞあらんおど思ひしかど猶匂ひやうわとく咲しい折々ちるがかへり

てみ所おる心地を

君まちて夏ぞさうりわ匂ひゝる繁きよもぎがやぶのげの花

はわしやよひの立夏は日

夏のくるやよひの山の時鳥いづくわゝふのはつねつぐらむ

更　衣　おつわけさ替しいうとき心地してきおらし衣おゝぞ戀しき

夏はきてかふるとおらバ花衣そめしこいろは殘らぎもぞおる

更衣惜春　昨日わもかへまし物をはお衣のさねてをしむ春のをのれち

四月十七日ばのりわや宮より花を給ひて御言の葉をさへさびゝるかしこまりわ　神代わ

ゝ有もやしなんといひし古ことゝかゝるゝやと思ひあはせるおとも侍らざりしぞそもあべての春のおくれゝる年にあそありけめ今年ゝ二月の半より咲初されゝ春のおくれゝるゝゝあらでのどけき御代ゝあえゝるゝぞあらんといと〳〵珍らしきあまりかしこさも忘れて思へるまゝを例のたゝおとゝひ答へおどして長き日此御笑ひをにゝめ奉らむとて

夏やとき春やおくれしうの花ゝ咲あはせゝる遲ざくらゝあ
一とせをまちつけてゝし初花とおそき櫻といづれまさらむ
まち〳〵て見初し春の初花ゝおくれぞせまし遲きさくらゝ
後ゝまゝ咲つぐべくもあらぬまでおくれし花ぞ哀ありける
見る時の心ゝよれる花あゝはゝいづゝまさるといゝ定めん
はつ櫻ゝまひし日よりむそ日餘りよに珍しきはあをゝし哉
花盛はしゝ祈りしいにしへもかくまで久ゝゝしとやゝ聞く
外のちる後ゝ櫻をゝつるゝあたゝきゝやまのかげゝ隱れて
殊にとく殊に遲れし花ゝるゝ君ゝゝのげゝよれゝおりゝゝと
初櫻見しゝうまれし心地ゝておくれし花ゝいのちとぞ思ふ
殘花少　きのふまで殘るゝと見しも散そひて青葉の底の花ぞまれゝる

花落枝綠といふこと侍

昨日ゝし花ゝいづれの梢ぞと青葉ゝたどるゝさ戸出のゝは
いと長き日の徒然ゝるゝ覺えゝ打ねぶるゝど薫る香ゝゝどろきされゝ桐の花ゝりゝ
綠ゝるひろ葉ゝくれの花散てゝしくゝをるゝりの下ゝゝ
新樹の風ゝゝびくを

きのふまで花ゝ厭ひし心さへ青葉ゝかはるゝゝのいろゝゝ
新樹露　朝ゝ〳〵ぬれて色そふ若ゝへで綠をさへやつゆゝそむらん
新樹妨月　はゝゝゆる影も青みて若葉さゝへでの梢つきぞをぐらき
夏山のいと深くゝげれるを見て

此頃ゝいづくの山もづくは山深くぞゝつのゝげゝゝりぬる
うづきのゝろ禪師のみことよりめすことゝりしゝ御前栽の藤杜若さゝりゝれゝ
此殿ゝとゝはゝはるの色ゝえて藤ゝきつばた猶さゝりゝり
積翠亭といふゝゝり東より北にめぐりて大きゝる池ゝのゝめぐり松楓いと多
くて水ゝうつる歌よめと有々るゝよみて奉る

水青きゝ池にたゝむ木々ゝ色を寫せばゝりの言の葉もゝゝ

葵　葵ぐさ去らでのゐのけて神まつるこゝろもさこそ若歸るらめ

うつぎ　郭公今のきおのんやまぶつのかきねの卯木はおさきゐ〻りゆく

卯花　去ぬりゆく楓のしはのこぐれより白くゑゆるや咲るうは花

浪の色をうばひておどの玉川の光をそへしきしのうのはお

雨ふれる日布淑のうは花をたづさへきて　雨は中ゐたをれる袖ゐうの花の雪の去づくゐ

ぬれしぼのりぞといへるのへし

をる袖ゐさぞおの我とる袂さへ花ゐたまれるゐめゐぬをつゝ

卯花似月　うは花のさけるゐさりゐ心せよ月よをしとて人もとひ〻り

はゐし春のをゑより時おらを寒しかくてゐ郭公いのゝと思へる時

〻ふよりゐ花を拔しをし心をや山ゐとゝぎを待ゐのへおむ

三日のあした　うづき來て二日へぬれど時鳥まゞ一こゑもきのをぞ有ける

いつの年ゐの卯月六日人々きゐひて拾遺集の歌をとりくいふゐくれて雨ふりいでいと去

めやうゐ更々行く頃時鳥の音信々るゐ昔こよひ貫之主承香殿ゐて歌をえらび〻る時仁壽

殿の櫻の木ゐて郭公の鳴々るを珍らしがらせ給ひて貫之ゐ歌奉らせ給ひしゐ　おと夏ゐ

いのゝおきゝん時鳥こよひぼのりゐあらじとぞきくとつのうまつり〻る由かの家集ゐを

えたるおどいひて折ゐあへゞたれ〳〵もゐはれぞりてよをけるついでゐ

今もその折を忘れをきおけども山ゐとゝぎを聞く人ぞおき

のへし　涌蓮法師

いゐしへのはつ音も〻ふの時鳥拔りを忘れをきく人もゐり

これも同じ頃ゐや夜ふくるまでゐりて郭公をきゝて

まどろまぬよゐの枕の時鳥ものおもふ身ゐまるでこそきけ

まるの年は卯月六日の夜曉のる時鳥をきゝて

ねてやきく覺てや聞し夏は夜の夢のさのひの山はとゝぎを

おどもこよひ聞つる事を思ひいでて

あ〻がまゞ人にかるらんねざめして山時鳥こよひきゝつと

いつの頃ゐゐ月ゐやなく雨ゐやなく朝ゐや夕べゐやなど思ひて日ごとゐまてどなゐぬゐ

廿一日といふ朝ゐまる聲きゝて

郭公ゐ月といふもはつゐ餘りひと日の數をねゐやなくらん

ある家ゐて時鳥を

散のこる花をたづねて時鳥ゐをばゐくれのはつねをぞきく

さ月八日といふゐ未だきうねゞ清閑寺ゑりゝ鳴なんとてうれゐを行て時鳥を尋ぬといふ心を

時鳥ゐのがさ月の山にてもなほつれなくゝはづちたづねん

待郭公　夢ゐだに聞く夜半ぞなき時鳥安いもねずゐ待ちしゐうせゞつれなきもえこそ恨ゑね時鳥ながさのめたる夕べならねゞ

始聞郭公　郭公ゑひてまさずゞ人傳ゐわをこそきうめ夜半のはつこゑ

郭公語少　宵のまゐはのかたらひし時鳥まさだゐなうであけぬ此夜ゝ

友だちのとひきて歌よみゝるゐ時鳥を

思ふどちうさらふ宵の時鳥こゝろとけてやこゑもをしまぬ

一字百首よめるうちゐ鶯を

人なこゐ待つとも我をとひいこじ尋ねてきうんややま時鳥

雨のうちゐ時鳥をきゝて

我宿ゐやどりてをなけ時鳥ぬしゐま夜此そでくらべせん

むら雨の空ゐ郭公なくうさ

やよゑばし笠やどりせよ郭公一むらさめゐふりいづるこゑ

鳴ほとゝぎす　舟とめていづくとときけゞいそ山の松の梢ゐ鳴くほとゝぎす

三月ゐうるふゐりゝる年の卯月ゐ時鳥ゐまさきゝて

時鳥やよひくはるゝ年なれゞうづきもおのが五月とや鳴く

五月まで時鳥をきうざりし年ゐ

つらからゞさゞ名うさゝん今よりゝまさじさつきの山時鳥

うづまさゐて此鳥の鳴く折しも鳩のかしましくなくいとゐくゝて

ゐと鳥もゐゑやめてきけ時鳥さ月すぎなゞいつうきなうん

郭公留客　時鳥ながなく聲に山がつのうきねもひとのもぎがてゐする

曉郭公　横ぐものヒうるゝ峯の時鳥たがきぬ〳〵のなこだそふらん

深夜郭公　時鳥ゑのぶゐゝろやゆるぶらん人ゑづまれるよはに鳴なり

郭公驚夢　待たゆゝ夢のまくらの時鳥さむれゞこゑのとはざかりぬる

杜郭公　さよ中ゐ誰をとふとう津の國の生田の森ゐ鳴くほとゝぎす

野郭公　里ごとゐ待つなるものを時鳥なぞしもひなの荒野ゐゝ鳴く

磯郭公　郭公いま一こゑゝはなれその波のまぎれゐとはざかりぬる

山家郭公　むうし我初ねたづねし時鳥いまゝのき端のやまにこそきけ

霧中郭公　ほとゝぎすゐのがさ月もさび人の宿りせん野ゝ心してなけ

郭公數聲　郭公こゑのさえまも夏引の手びきのいとのみざれてぞなく

短夜ふさびく〜絲ざめてよめる

ほとゝぎすなく一こゑわわくる夜も老ゝ幾度絲覺しつらん

郭公幽靜なるねざめならずば時鳥きゝもさだめじをちのひとこゑ

五月まもらをゝ駒競せり少女らもゝふのあやめの根を合せきん

さつきいつゝ共ゝゝふもてはやさるゝ契ゝてなどゝ菖蒲を駒のすさめぬ

年々かぎりと思ふふまた五日のめぐりきふゝるゝした庭のあやめを

ながらへてゝゝふもゝぎりのあやめ草あやしき物ゝ命也ゝゝり

五月五日ゝ思へること

ことのはゝ何ゝあやめも分ぬまゝさ月のいつゝ老と成ゝゝん

あやめもなはなる姿ゝいゝで習ゝまし菖蒲ゝゝくる露のことの葉

あやしくも心のとまる匂ひゝなあやめの草のかゝりの此世ゝ

さみざれの空さきものゝ宿毎ゝ玄めりてゝをる菖蒲也ゝゝり

尋ねて菖蒲をひく

人知らぬねざしやゝゝるゝと山陰のゝくまの菖蒲尋ねてぞひく

池菖蒲　かる跡にさゝ波こえて水廣き池ゝゝあやめの香ゝゝそゝちぬれ

軒菖蒲　更ゝゝゝふくとゝゝもれど菅深き軒ゝゝあやめも分れざりゝゝり

袖上のあやめ　色もなき廊の袖ゝゝもゝゝてゝゝふ菖蒲の草の香をぞ玄めつる

六日にあやめをゝて

何事もけふゝきのふのあやめ草たゞ露のまのすさび也けり

又ある年の六日ゝ菖蒲の玄をれたるを

昨日だゝゝひゝれざりつる隱ぬの菖蒲ゝ玄ちじゝふのうきふし

軒のゝふちの咲ぬるを見て

おゞらへてゝゝふちの花も咲ゝゝり今年此夏のかげゝ過んゝ

風靜虛橘芳　木の葉さへゆるゞぬ風ゝ匂ひさつ花立花ぞかおとゞまし

早苗　さゝへ取る袂ゝうきゝゝよき賤ゞゝゝはひ

玄しぶつき植し澤田の若ゝへの玄げるゝ賤ゞうさや忘れん

綠ゝるひとつ門田の若ゝへもいく千町ゝゝひきゝゝるらむ

山畦早苗　うね毎ゝまゝつゞねゝくさ苗もて山田ゝゝふや植盡もらん

遠村早苗　ゝめ晴て雲たちのゝる山ゝとの里ゝのをだゝさ苗とるゝゆ

夕べの田歌うたふをきゝて

うづまさの杜のひゞきて聞ゆなり四方の田歌のゆふ暮の聲

いのなるのをのきのえぬ日の

ひゞきくる田歌も今ゝ友となりて希のきこえぬ暮ぞ寂しき

早苗　多　くるゝまで唄ふ田歌の永き日も植ゝつくさぬ苗をぞ知る

苦雨初入梅　軒くらく木々の雫のをやまぬいうしやゝふより梅雨のそら

五月雨を　かりてふく軒のあやめ此白露の玉ぬき乱しさゝぎれぞふる

よのつねゝ東南の雲のゆけば日をふる雨もはれぬるをいや重なりてのきくもれば

晴ぬべきゝしきをやがて立のへて雲の往來もさゝぎもの空

默軒がもとより　梅雨ゝ幾重ゝ雲のうづまさの里ゝ春さへ寂しのゝしをとさこゆるの

雨晴ぬさ月の雲のうづまさゝあらぬよのふる心地こそすれ

まれ〳〵ゝきこえし都のつても此頃ゝ絶てのゝ也ば

雲まよひさゝぎもそめぬ今よりゝ都のつても絶てきこえじ

あの雨降つゝきていさくもりけるのよめる

をもしおそもるとゝ去つれ梅雨のふるやゝ瀧をゐのぐらぞ見る

梅雨久といふことを

降る雨の晴をぬ日數もわらゝれて軒ばの梅の色ぞ添ひゆく

五月雨久　をやゝのきさ月の空のあゝめ哉ふり出し日も忘るばのりの

梅雨のはれぬ日數をのぞふ也ばさつきの空も殘りすくなし

梅雨送日　雲とぢて日をふる山の寂しさもかもひやらるゝ五月雨の頃

深夜五月雨　雨をのゝ聞てふけぬるさつき闇かぞつのおしや鐘も音せも

五月雨のあぜてす水を田草とるをとこ此のへ見さるのさ

梅雨の畦こえぬあり誰ゞ田のも今ゝ水口とめよといはまし

さつき七日のつとめて織田君のあづまよりの帰り給ふを粟田山の麓ゝ待ち奉るのこの頃

ふりつゝきたる雨をふくめる松風いと寒のりゝ也ば

ふらぬまも五月の雨のけを深ゝ露ちる松此のぜのさむけさ

山家水鶏　くひなの鳴く木のまの月ゝかたぶきて人音もせぬ山のげの庵

夏　月　を　あつさをも忘るゝ影のあやにくの絶てゝじのき夏のよ此月

一重ざのいとゝしかりし夏衣かさねまのしき月のすゝしさ

水無月の頃うづまさの杜の夜々默軒と月を見さるのれ京のもきてやどりゝるつとめて

むのひゐしわゐのおきやどの夜半の月ひとり心をすましてぞこむと聞えさるかへし

むねの雲はれねゝ獨むのふ夜も月ゐ心いもまぢぞありける

夏草ゐ朝露ゐさたるを見て

朝ゐきの露ぬるはをて吹く風をまつ心なるおろも來ゐゝり

うづまさゐ住む頃夏ゐおりて庭草高くなれゝゝ手づから苅りそくゐあさり此人きていつ

あらひてかといふゐ思ひしこと

あしあらぬ庭の小草の夏のりもよのうきゐおそ習ひ初つを

庭此いとはさう繁をけるゝゐやむつのしげゐる虫おどのむくめくもうるさくでもどより

うゑぬ草いはらいせおどをるゐよめる

秋の野ゐつくをし庭もゐのづのら花さうぬ草のかくや繁りし

まさゐる時　かり拂ふ跡より去げる夏草ゐこゝろ此道のゆくへをぞこる

風前夏草。　拂いじゐ庭のゐつくさ繁れゞぞ露をさづねて風もとひゝる

來客夏稀　夏のきて庭草去げくゐるまゝゐゐ去そまされ宿の人めい

夏　野　日をさふる陰しゐゝれゞゐのづのら野べ此往來い夏ぞ稀ゐる

はと暑き日人の野べゆくを見て

瞿　麥　露ざゐもいさくゐ置そうれを重をまざ片ゐりゐをゆる撫子

天つ日の色ゐいさけど草ゞくれ光をゝしきゐでしこのはゐ

瞿麥副牆　咲ゐゝり殿のをつゐの綾ひゞき垣ねのまゝゐ植しゐでしこ

ゐでしこの盛ゐるを見て

花の色いのら紅ゐにゐへどもをゐ去きしまの大和ゐでしこ

かで此小路の家ゐうつりをむゐ百合ゐでしこの露ゐ去ををてさささるをのしうをゆれゞ

ささのゐるじゐいひやる

種まきし人を戀つゝ姫ゆりのそひてやねぬるなでしこの花

此花も程なくちりてゐくたとなりぬさゝ日數のみ移りに移をて此をまひもはやをそう過

ぬる程ゐ此隣むゝひなどゐはゝなくなをし人三人ばゝをもゐなり世のはゝなさを思ひて

撫子もさゆりの花もちりにゝりはゝなき露のをのみ殘して

かのさゝりなりしをり

撫子の露のひるねをうらやみてうなだれゝりな姫ゆりの花

またゐもひし　我宿ゐ似げなきものぞ撫子ゐ添てふしたるひめゆりのはな

照射　風わたる夏野の草の露はまはまをを忘れてやともしさすらん
うかるべき報ゐうへてともしさし鹿まつ業も安々なの身や
暁照射　暁ゐよいなりぬらしさ月山木のまはともしかげ去らみぬる
山中照射　鹿の立つ荒山中のゐらをちらがよもがいよるのともし也々り
鵜川　夕月の入がた近きやまうげいやをもまちあへずう舟さを也
かゝる身の契もうなし鵜うひ人なれも後せを思いざらめや
おいをさす夏をのう舟數そひて下すよがはい山うげもなし
夜河篝　みじうよはう舟はかゞをもえ盡び何ゐ後せの闇をてらさん
深夜鵜川を　深きよは川せゐ殘るかゞを火やゐくれて下をう舟なるらん
大井川下をう舟のうゞを火のさよ更ぬれやまれゐなりゆく
毎夜鵜川　夕月の入さはゐそくなるまゝゐ夜ゐ〳〵ふけてくゞを篝火
螢をよめる　けちはてぬ思ひは草やくちてしも螢と成て身をゐがすらん
雨ふるべく螢れりといふゐ松は木はまのきらめくい星ゐやと思ひて
晴るゝ夜の星うとをれば松の葉ゐをがる螢のひうり也々り
橋螢　とぶ螢もはてそをされ川橋のくもでゐ物やゐもひをざるゝ

窓前螢　八重とづるひぐらの露や求むらんよな〳〵すゞく窓の螢い
小扇撲螢　うなゐらがきそふ扇を打やめてゐがる螢をくやしとぞをる
蚊遣火をよめる
さささして殘る烟も涼しきい月ゐなるよのはきのかやり火
さよ更てもえやされさる蚊遣火の薄き烟ゐつきぞゐゐへる
蚊遣火の煙ゐひせぶみどり子がを聲もいぶせき宿のゆふぐれ
里蚊遣火　うびさつる賤がを煙のいぶせさもよそめゐをるき里の夕ぐれ
六月いつうといふに鶯は庵のゐさりさらで鳴くゐ
鶯よさのをゐ鳴きそゐをとても老ぬる聲いされのをさめん
瀧上蟬　ゐちさぎつ岩せの音ゐゐらそひて山下どよを蟬ぞゐくゐる
五月三十日さゐがらふりてをゐ月の初さへはるべくもゐければ
名ゐふりしさ月いさてもいうゝせん晴まざゐわれをゐ月の雨
夕顔のうさ大ひさごうさへゐあれり
はしさゐくをのゐりぬとや思ふ寛つゝましげゐる夕顔の花
ゐるとし此六月中の八日ゐどゐや筑前介信郷のそゝのうして左衛門尉光興宮奇ゐど伴ひ

伏見のゐもといふところに遊池あるに舟をうけて遊びし歌よめといへりしに

かつまさの昔の遊も玉ぐれのゐものを池のはあふかよばじ

ゐりときくむねは遊も池ゐづの淵に玄めるゐにひらけず

遊

荷露似玉　玉のとてつゝめば消ぬ蓮葉にかく白つゆに手もふれでゐむ

ひむろ　いので我守るてふ人に身をのへて氷室の山に夏をもぐさん

夕立をよめる

山陰やめあれぬ瀧を岩ぐねにはこしてはるゝ夕だちのくも

ゐるぐの中に雨きやひきて夕立の雲にかくるゝ嶺のまつばら

夕立を見て　雨よりも雲やあしとき夕立のはれもわへぬに日影おそさせ

野夕立　ゆふ立の雨きやふ野の一つ松さのむのげとやいそぐたび人

遠夕立を　々ふも又夕立をらし山の端のとはきこゑ玄の雲ぐくれゆく

空うちくらゞりていま夕立のきやひくるに車をはしらせゆく音をきゝて

鳴神の聲ゝときけばゐ車ぬもしとゐめにいそぐ雨りゝ

夕立のあでり涼しきに山を見て

夏深き雨のあでりの夕べよりわきの々しきのうもぎりの山

避暑　水音のもゝしき山はまつの陰につきさゐりゝこゝに過さん

納涼　まゞ知らぬ人に告げばや奥山の清水ぐもとゞ秋にもゝける

夕納涼　みゐ月の照日もさもゞかゞろふの夕さりくれば風ぞ涼しき

梅津川にのぞて亭ある所にて夕ゝさまで遊びていと涼しさに

ゐゐ岸の柳ゝさよる河風をそでにおちしてゝふにくらしつ

いと暑々れば例のごとねやへもえいらでよめる

くれゆけど猶暑き日に端居して月おきよるも風をこそまて

暑き日松の聲のさえを聞ゆるに

山風を松にやどしてきく宿にふきかちぬまも涼しかりけり

泉

いつしかと思ひし秋に山陰のいづゐの水にいまもすゐゝ

泉聲入夜寒　音きくもよるにひやゝきまし水をいりで日ぐらし結び馴々ん

燭影寫水　わさ殿のともしの火影まさたきて夕ゝぜおゞから寫もやり水

扇不離手　誰ゞ手より置きゝはじめん圓居して風まつ宵のそでの扇に

扇風秋近　程もなく涼しかるべき秋ぞとにおらを扇のゝぜぞ告げゝる

六月中ごろ大雨うちつゞき陰雲はれざりゝる時

土さけて照るゐ月も名のゐして曇りふさゞり日の影もゐを

祇園の神輿をあらふ日ゐめふるゐ

八雲のや神のみこしを洗ふゐい天つ水さへふりそゝぎけり

いと暑き日空のあべて曇れるゐ南ゐ吹つゞばゝり雲間の見えたるゐ

わづゝゐる雲まをもりて天つ風吹もやくるゝと待つゞ久しき

雲まやゝひろごりて風吹かつるゐ

わづゝなる雲まをひつゝ天つ風待したもとゐいまふきく也

世人いおどやゝくたゞいことゐるとわらはんゝし

涼しげゐはれたる夕べ粟田山の返照をめづるほどゐゝげのうつちざりゝまべ

粟田山たゝねに夕日きえゐゝり入ゐひのかねも今響くめり

六月末つゝゝ友ざちのもとゐて夜ふくるまで物がさりして歸るに北風いと涼しくふきぬ

此頃深更ゐおもばゝくゐるをおぼえて

夏深きよいのねざめゐふきそめて折々おらもそでの秋ゝぜ

廿八日頃ゐやいと暑き日

此ごろいうつる日影も惜まれもくれゆく空の風をこそまて

瓜

賤の女が門のはしゝを取いれよ風ゆふざちて雨おぼれきぬ

やそちかゝる身のはてをつゝ〳〵思ふゐい心やそちとまづ成ゐゝり

三ゐ月中頃さゝ〳〵もをきゝて

きと〳〵もゐ鳴きそ我も夏ゝけて秋をゝおしぶ山ゝげの露

夏草ゐまじりて女郎花のさけるをそて

めうつしの花ゐき頃の女郎花ゐまめく色のやこらしげゐる

もゝきのいさく去げるを

夏ふゝく去ゆるゐつけて村湖露ゐをざれん秋をこそゐもへ

夏　風　なつの日ゐ暑き盛ゝ吹く風もうすきたもとを猶へだてゝ

あつき日ゝ草葉に待てをる風も猶そでまでゝふきも通ゝも

夏　夕　松陰のちり打はらへゝふの日も夕ゝぜたちぬゆふ涼をせん

夏　海　夕されば南の風ゐくもきえてをるめもゝしき沖のいさり火

夏　河　水無月の照日ゐかれて踏わさるさゝもゐつき夏のやま川

夏　瀧　涼しさをこゝゐせき入もて音羽川瀧の外をや夏ゝゆくらん

夏　田　はる〳〵とをゆる水田の若苗の葉ゐをかさよる風ぞ涼しき

夏　蓮　錦ともゐやとも夏ゝ菅むしろゝげしく月のよるのもゝしさ

夏　鐘　夏くれぬよひ曉のをしゐ夜ゐときつくゐねの聲もひまおし
月眞院ゐて月あゐき夜ゐねをきゝて
月ゐこそひるの暑さも忘るゝを誰ゐねよとのゐね響くらん
夏　虫　夏は野ゐ露をもとめて飛ぶ蝶のつばさゐをるゐ暑き日の影
六月秋といふ心を
いたづらゐ過る月日と身のうさとかゑへゝ惜き夏秋べしつ
荒　和　秋　みそぎ川波ゐをおらぬ人ゐゑゝはらへすつゝも猶や沈まん
夏　秋　を　何事もをつるとおらぬゐをゐ積る老もおこしの秋へおらなん
をおゐみも哀とをませ老の波立そふ身ゐもはらふうきせを
つゞゐりがゑゐはらへの日ゞと思ひいでて
ゐふ毎ゐはらへてをてし年月はいゐゐのこりて老と成ゐん
みゐ月のはての日賀茂ゐ詣でて
さても猶うきせゝ同じをそゞ川又人おをゐはらへをやせん
うづまさゐあるころ難波の昌蒹ゞ春ゝこんとかねていひゐりしゐ此里ゝ何のもておしも
おし垣根の厳もえん頃かおらをおといひやをしゞ音もせゞ夏も年ゐかれより　かおらを

と契りし春ゐくれはどりわやめふくある月もへゐゐりと有ゐるゐへし
契りつる折ゝをゝばしとまゑをしゞわらびもをゐゐを繁る夏草
ある夜の夢に母とゝもゐ北の山の木深く繁りたるをゝるゐともしの松はをらむゐしきの
をゐしきを母のよめとはさまへをゝ夢中ゐ
山とゐき松のこのまゐ殘る火や夜のともしの名殘おるらん
久しく心地そこおひて卯月十五日といふゐ病の床をはらひゑる時
おゞき日を春より臥て夏引の麻のをゞらはむおしくぞへし
夏の末つ方ゐや有ゐんある亭に人を招きゐるゐ女郎花を折て花瓶ゐさゝれゐり其まちし
人のうちゐさはる事ありてこざりけるもとゝ又の日其花を遣はをゐるじゐかはりてよむ
女郎花いろゆゑ君がとひくやとまちてをりつる一枝ぞのし
軒みじのくてさし入る日のはとぼりてたへゞたゐりけれゝ夏は末つかた簾おもなどゐて
ひさしつくらをとて
我もよを秋田ゐさせる假庵のひさしからじは頼みばゐりぞ
古人のよめる句を題ゐてよめる夏の歌は中に
單なるをゝしもゐつき夏は日ゐ筑紫の綿ゝみるもうるさし

みな月の望にけぬれバそれよ又降るをやふじの初雪ゐせん

みな月のあつき盛ハ草の葉ハゆるぐばかりの風もともしき

あつき日をいのちハ中と知りながら心よゐくも秋をまつ哉

名所をよめるとき布計里を

やど毎ゐわきや待らん夕風のふけのさとびとかど涼ミして

楢　小　河　風ゐたる楢の小河ハ夕ゐゝみそぎもあへゐ夏ぞながるゝ

勝　間　田　池　海だゐも變る世ぞかしさ苗どるわたりやもとの勝またの池

布　留　ふるの山宮ゐゐれぬと神やつこいゐのゐゐぶらん五月雨の頃

葛　飾　梅雨ハくむ人もなしかつしかやゐでり初たるまゝの井の水

名取川霖雨を晴まなきさ月の雨の名とり河もとゝしせゝやふちの水そこ

筑　摩　さゝだれハ菖蒲の葉末波こえて岸のうはてゐつくまえの水

藪　浪　里　ふる雨に蚊遣の烟うちしめりいぶせくゝゆるやぶなゝの里

大　葉　山　霞たちこのめ煙りし程もなくれはのやまに夏ハきゐけり

さきの日宇治の山里にたづね入る事の侍りしが友とする人ハみむろとのゐゐた何とかや

いふ里ゐゑぞく有てそこゐとゝまりぬそれよりひとり山ふかく道も知らでまどひ行くゐ

鳥の聲松のひゝきいと心ゐそし

ゐなれぬ山の下道ゐふ人もなつ草ゑげみたづねわびぬる

今ハ二十餘丁もきぬらんとゐもふゐ里ちかくなりぬるゐるべし樵歌の聲はのかゐきこゆ

ゑる人ゐゐひゐらん心地していと嬉し近づきてとふゐ今ゑバし行て木深く茂りたる谷の

水音きこゆるかゐゐゐ里ハゐなりと答ふ教ゐたがはず心ゐて此庵ゐゆきつきぬゐるじの

大とゐゐこゐひのいとまにてのどゐにうち物ゞゐらひて　ゐもはゞよ青葉ゞくれの山ざ

とゐとゐ都の人のとはんものとハ再吟ゐれよぶゐもゞしがゐくて

とひよれバ言葉の花の時分ゐずゐはふゑ山の木ゞくれの庵

時鳥ハ聞給ひつやとゝふゐよべハ音づれ侍りき今日も頼もしき空ゐこそゐめれ今夜ハと

いまりて待給ひねゝし日も傾ぶきぬいで其道のゆくてゐとまりつる人をもこゝゐいざゐ

ひてん文たゑへ人していふともゐハさじ我ゐてこんといはるれど分々ゐしゐゞを思ふゐ

いと遙ゝなる道をといへバ京の人ハさもゐばゑべゝめれど山ぶしの身ゐハ何ばかりゑて

とゐハとせちゐこゑれてその人のもとゐとゐて

山ふゝく尋ねもすべきはとゝぎゑ人つでゐやハ聞て歸らむ

軒端の山のそばのゝけ路々ゐものゐらずみるゞ内ゐ行過ぬ此寺ハ東にむきて旭耀山とい

ふ額あり南ゝ庭より西ゝ續きて分けこし山おり殘るじゝと情ある人ゝて前栽ゝゝさゆり撫子瞿麥さらぬ草をも見どころ多く植ゑさして去ぬりゝひたるゝまざこぬ秋の面ゝげもさちそひていとをゝし東の峯高くそびえて麓ゝ水の音幽ゝきこゆ侍者ゝ問へゞこれおん櫃川といふおりゝの木こり此敎へし川おるべしすべて心もをみわたる處のさまおり

我もよをうぢ此山べゝ家ねせんつねゝ心のゝくも澄むやと

思ふゝもまゞ思ひ出る事ぞ多ゝるやゝく打詠むる程ゝあるじの聲きこゆいとはやうも物したまひしゝおといふゝいざおはんと云つる人のゝへりごとゝゝ道此おおいもとめて是よりとあり村雨をり〳〵してまつゝは有るべき空此景色ゝ都の友をさへ思ひ出づ

ふのゞすむ山時鳥たづねきぬまゞ世ゝつげぬはつね聞せよ

ゝの人ゝいたゝ打ぬれてまどひきぬめゞらのおる道此ほどの物語おどをるゝ鶯をきゝつとて　散殘る花もやあらん山深き猶春おゞら鶯のおく我いきゝざりけるもねたくて

我さめゝ鶯だゝもつれおきをやまほとゝぎすいゞ有べきなどたゝぶれ言どもいふほどあるじゝ何くれと谷の底よりもとめ出てもておさるゝもいとめづらゝゝ興あり暮もてゆくまゝ去めやゝおる雨ゝ水鶏の音づれゝるを

柴の戸もまゞさしゝへぬ夕暮ゝたゝく水鶏のこゝろ短ゝさ

友の人　ほけくれの戸ざし定めぬおの庵ゝおれてくひおのさだたゝくらん　あるじ　夜もすゞらねてもきゝおん去ばの戸此明るも去らぎたゝく水鶏を樵歌の聞えゝれば　都人たづねてきぬと聞しよりましばの道やいそぐ山ゞつどいへるゝ

くれ深き道去るゝとやをちこちゝゝうさひゝゝいして歸る柴人

友の人　山びとの歌ひつれたる聲ゞにもとゞざのりゆく夕べさびしも　かゝることどもを口もさぶほどにくれはてぬもどそれゝとたどる一聲もきこえねばつれ〳〵おるまゝに處にゝひさる題どもいゞさもさり

山家松　愚　詠

かきつめて幾世へぬらん山里の軒に木高き松のことの葉

山家水　あるじ

村雨ゝよしにおるとも明暮ゝもまして汲ん山の井のそゞ

山家橋　友の人

瀧つせの流ゝゝさゝ丸木ばしこの山里のありとばゝりゝ

山家路　愚　詠

分入るも心細しや山ざとの人めまれなるこち去ばこつゆ

山家煙　友

山ふかみいつのいかゝる宿をめて同じ眞柴の煙くらべん　あるじ

山家苔

山寺のれりれ戸をその明くれいをきをゝなるゝ苔の通路　恩

山家夢

かりねする山の庵のさゝまくら馴ぬあらしゝ夢も結ばを

うくてふけゆけど猶つをあなれば

ふり出てあくといおしゝ郭公まつよの雨のこゑのさびしさ

といひなをばゐるじ

ふをはへて鳴くやどまでいわらをとも一聲もらせ雨の夜れ空　まゝ友の人

谷水の音もさびしき柴の戸ゝはれをそふる夜半の村さめ

とゝくかたらふうち短夜のあらひゝて山窓のひを見ゆるゝいどろきてゐるじ　やとゝぎ

を初音のれちのこよひだとかもふゝたのふゝけゞさの空　友の人も　郭公まつゝひもあ

きつれあさをかもふまくらゝ夢もむをばをとよめるゝ

猶ぞうき山やとゝぎを一聲も待ゝへを明るをじゝよのそら

打をびてをばしまどろむやど日さしあゞりぬよべの雨名殘おく晴てをおろを谷の梢より

あさげの煙やそく立ちていとかもしろしこゝゝもゆゞけなどさうべていざ此ゝさり見ん

とて南ゝ行くゝを山邊ゝまだつゝじの盛おるを見る人もおけれいいと打過がさし

夏山の青葉ゞくをゝさくつゝじをのびゝのこる春の色ゝも

谷河の流ゝつきて渡を岩橋をゝおさゝおさゝつさひて行くゝこゝかしこ菊生さりおれぞ

千年ふべき友おめる秋ゝゝおらをおゝど契りても猶家ゞとゝして母君ゝ見せ奉らばやとぞ

思ふ十丁ばゝりををへてはまといふ處ゝ出ゞこゝぞゝち川おりける薪柴おどのさえを流る

ゝいゝおるゝのとへば舟もかよひゞたき川上よりおゞしゝとして下ゝて待つけてとる

おりとぞ其濱ゝ柴ゆふ翁の語るめゞらゝおることたゞひおし友おる人のよめる　めおれ

をよ宇治の川上はやきせの水のまゝ〳〵くだを山柴とゝりゝるゝ

せを早を舟も通はぬやま川もうき世を渡るをちさをくおり

川ゞしの山の高うさうしさそゞゞさひゝ山人の行ゝふをゆよそめもいとあやふしふもと

い大おる岩いくへともおくをざとたゝをを稽ゝゝゝまやしさゝしさどもなり

落さぎつ音もきこえぬ山河の岩せをこもるあをのひゞきゝ
もとの道を半ゝへりて此さびゝ東の山ぎゝふつきてくるゝ木をこる山わり斧の音谷ゝひ
いきて幽おりいろ〳〵やすげおき世のひざども見聞くもいとあはれにて

柚木ゝる賤ゝといゝやかくてしもうきゝ隔てぬ山の奥ゝと
西ゝやどりつる庵おりげゝ名もをるくゝざやゝをわゝさる

わきらけき法の光もをえてけさあさ日かゝやく山のふる寺
それより龍ゞたきといふゝいたる此道を三十丁ばゝり行て喜撰ゞをみゝる跡ありといふ
ゝいとゆゝしけれど日も午ゝ近く今日ゝきはめて歸るべきおもへば思ひとゞまりてゝの庵
ゝて去ばしやをらひてゝさちいづるゝあるじ名殘つきをとて山のおゝばまで見おくらるゝ
情淺ゝらを後を契りて別れぬ京ゝきつきても柴のいゝりおゞらかの地ゝゝるべくもゝあら
ねば猶幽閑の氣味去のぼしくひとり灯のもとゝ有つるゝとどもかいつゝ侍りぬ

友ゝ伴資芳

庵ゝ因性寺

をの山ゝゝなる音なし此瀧をんと思ふどち卯月廿日ゝまり月去らむ頃京を出て松ゞ崎の
をさゝり山ばおといふ所ゝ休らふゝど東の山際より雲立のぼり朝げの煙こゝかしこゝみゆ

朝げさく山もとみれば立昇るくもゝけぶりも色ぞゝわゝれぬ

高野村をすぎゆけば右ゝみゝげ山ゝり山もとゝ一村松去げりたる木のまより社ぞをゆる
皇御神のゝまくだり給ふ處ときけばいとたふとし小野里大原をゝげ山とぞ舊きものゝゝい
をえたる此をち川を右ゝなし左ゝ見てゆく山ゝひゝり石さゝくて老ぬるゝいいとくるし
きゝさゝしき山ひとつこえて八瀬ゝつく猶山路のはるゝゝをやらるゝば

大原の山ちの末の遠ければやせゆくほどゝ身ぞつゝれぬる
四五丁をへて右ゝいる山路ゝりひえのくろ谷ゝゆく道とおんそのちまさに去ばしやすむ
今日ゝつれなき郭公をこそきくべゝれと友のいへば

時鳥空ゝこそきけゝとなしの瀧をゝ行くといひてなゝせよ
かれをえつる山路はる〳〵と分のゝるゝ卯花さきつゞきさゝり

ひむろ守るを野の山路ゝ雪も猶消のこるゝとをゆるゝれ花
木去げき谷風のいと寒く吹のゝれば

雪をけて入々んをりのいゝならん夏さへさむきをのゝ山道
此道のいさくさゝしきゝ馬ゝ柴ゝふせをゞゝらもいさゝきて賤の女のゝまさ都ゝ出るゝ
ゝふをこゝゝしこゝよきつゝからうじて大原の里ゝいゞ此處より谷ひらけてかなさこな
たの里見をさされでいとをゝしき處なりかゝればこそ昔人も多く住々れと思ふゝ老さる

女の何事ゐうらき世ぞのしと語りゐひてゆくをきけば

よそめこそ住よくをゆれ住馴をば又うきことやおゐ原の里

そこより勝林寺といふをるしあるかさのをちをゆくゐさきざつ人の時鳥いきゝつやとい

ふゐ鳴てゆりとおもふいうれしき物なゞら

谷川の音ゐまをれてねさく我きゝもらしつる山やとゝぎを

なしもとの昔の御坊のまへをへて來迎院ゐ詣づ本尊藥師佛天仁の頃良恐大德の融通念佛

はじめ給ふ處とぞ此寺の前を東ゐ入ること五六丁ばかりのぼりて少し右の谷ゐいるむゝ

ひゐぞ瀧いおちさる七丈ゐ四丈ばかりもあらんとおぼゆる巖ゐなゝめゐるを傳ひて東よ

り西におつる瀧ゐり世の常の瀧い山ひゝく聲かしましく瀧つぼなどいひて青をさる淵の

水まきて見るも恐ろしうのをこそゐれこいさる景色ゐくてをるにゐろをきくゐやさしゆ

れば酒とうで數多さび盃めぐらしゆさみゐ思ふことといひつゝ時移るまで侍りて

をら絹のさゝ一重もて岩がねを包むとをゆる瀧ゐも有る哉

つさひくる岩ほの上の山水い千筋をだせるいとゆとをゆ

をの山ゐ岩ねのさきい白雪のこゐすが如く降るゆとをも

今いとてもとの道ゐいでて勝林寺ゐ參るおゝゐこそまづ參るべゆりけるをと思へば

瀧をつゝゆへる便ゐまうできとされも佛ゐさゆしらなせそ

おゐをちに呂川律川とて二筋なゞれさり

わみぐぶと打唱ふをば呂律川水のをらべもこゑゐはほなり

この佛を土人證據のみだといふときゝて

魚山のさきのわをりのわをだぶい後のよをくふ驗ゐやます

こゝゐてぞ時鳥いさだゆゐ聞さる

耳うとき我さめならしほとゝぎほゆちゆく鳴しいまの一聲

又ゐしの野ゐいでて寂光院を尋ねゆく道のゐさいらゐふぼろゐ清水と石に名りて水あり

此名後拾遺ゐ見えさり數百年經さる清水さだゆゐ其跡なりや袖中抄ゐいえふみ山の東と

いだせりとおぼゆればうさがひなきゐしもわらを

大原やおぼろの清水さだかなるをるしゐ人をまどはをる哉

こゝい草生といふ

山かげや軒ばもをえを繁りゐひて草生ゐ里ゐ名こそ隱れね

寂光院い西の山ぎいゐあり本尊地藏ぼさち古きものゐい三尊ゐをどとをえさりこゝも再

興までゐ跡もなく成さるべしゐゆだな清げゐをつらひをきをつゝしなどゐりゐないして

建禮門院の御像あはの内侍像ありとさけびをがむ繪卷ありとき丶てこひいでて見る後白河法皇御幸の處を平家物語の詞をもてゝきぬきゝより雅經卿の筆といへれどおぼつかなし書ゝ後藤長乘とゝありしゐるじの尼まだいと若くていゝでかゝる寂しきすまひゐたふちんといと哀ゐて處のさまなど問きくゐ常ゝさしも侍らぢかんな月の末ゝゝ樋ゝさえ嵐の音のそゝさまじうなる頃ゝ都の空も戀しうなんと語るもよのうきゐゝへて閒侍るなどいはんよりゝ中々心深く覺えて

かけひたゐ冬ゝ絶ゆてふ山水にそまに心のふくぞゆゝしき

園のたかむなぬきてもてなさるゝも珍らし此寺のうしろゐ女院の御墓とてゐり又南の道を二丁ばゝりれば(ママ)りて伊勢兩宮ふはしまを其ならびに一宇ありてとざせり後ふきけび女院御關度どもをはゝうづめたるゐとどぞとゝくするほどに日もいさゝうたぶけびかへさの道とひていづにふみ山ときくわたりにて時鳥數聲なく

神のますえふみの山の時鳥そぎやすらんゆふゝゝて鳴く

けさみし賤の女もやゝ歸りけるなるべしこゝかしゐの里より夕げの烟立ちのぼり山路の末遙にみえて人め絶たるゐ卯花れを河風に打なびきたるいはん方なく物さびし家ごとゐと折りつゝゆくまゝふくれそへゞ打急ぐさそがれゐゝさ見し老女に逢ひぬ

わがおとや老てつゝゝれし賤の女がふくれて歸るをのゝ山みちかへりつくらんやどを思ふもいとくるしこなゝくれ過るほど山ばなにいさりそや過る

頃京にぞいりし

春れ梅津と名にさてる花の盛も流るゝが如くうつり青葉の綠深く成ゆく木の下麥のはしりはの珍らゝなりしもいつしゝ色づき渡りゝりもはてぬにながの雨打つゞきいと心のふばゆしき老のねざめもれのゞ時えてなく鳥の聲ゐおぐさめつゝわかしくられゐからうじて今日ゝ雲間そえ朝日うつれゞさち出て見わたす宮どころれふるきほどよりゝ少しあらゝおりと思ひしも此頃れ雨ゐ梅や去ゞりつらんゐくまりてそえみどしろ水ゆさゝゐさえぬ惠うけつゝをちこち千町つ久れる田面いとさのもしく今かへれもわり菅み渡れる中ゐ白鷺のむれゐるゝまだ取ゐけぬ苗代田おるべしこゝら行ゝふ人ゐふどろゝぬもゆさゝにそゆゝおさゝおりさちて今日ぞさ苗うゝめる歌うさふ聲ゐぎはしくむぎゐおぐるからさをゐ打そへてきこゆる里れ方にゆゝゞむね〳〵しうたてつゞけたる家ゐの中に岡れおゐゞしゞ河ゐのぞそて作もるいでゐの亭こそいと興ありゝれ名を柳陰といふも去るくそおぎしにいと大おる柳二三株さてりゝおさおたそやるに山水遙ゝにはもて西ゝ松尾南ゝ生駒ゐ續きてみゆるゝ大和路の山々なるべし河のをち方ゐおりさつゝ網引釣されおど

すめり橋行ふ人の木ぬ間よりそゆるもうら繪めきてをうしこゝゐ來て此頃くしさる心も名殘おく晴ぬ京の友ゐもけさいひやりゑまゝ皆きゐひてかたみゐ思ふこといふも心ゐくわざおまゝ長き日のくるゝもおぼえぎ久方の月さへ波ゐ移るまでぞありけるかくても猶ゐうぬ心をのしましきまでいひゐへる中ゐ梅津川の夏といふことを上ゐおきてよめるをのそういつくるゝ後ゐも今日を思ひいでなんとおるべし

維　濟

うべしこそ去のゐおきゝれ神垣の梅も色づく時の鳥とて

房　共

めもはるに渡ぎ川はし行うひの絶ぎそゆるや涼みとる人

經　亮

月うつる河そひを田ゐ歸るさも忘れて猶やさ苗とるらん

重　愛

河風ぎ吹のまゐ〳〵うちおびく柳の陰ゐあそぶぎゝしさ

喜　之

はるうなる山ゝさおゞら水茎の緑ゐ寫ぎにゞさとぞそる。

のどゝしお生初しより節おとにちよをおめさる宿の若竹

宗　美

夏やとく流れゆくせの水ぬ面を吹來る風ゝ秋ゐまがひて

布　淑

釣の糸の長々し日もあうおくゐ瀬のおる鮎も見えず暮ぬる

秋歌

ふん月朔日ゐおれるゐ

ふもふこと一つもおさで新玉の年のおうばも又をぎゐゝり

初　秋　誰とてうみゐ去まざらん野も山も色うゝるべき秋の初ゞぜ

夏の末秋立ちてはどもおさつとめて桐よりふつる雫雨ぬ去さゝるゞごとし

うけためし桐の廣葉の夜の露をふつるゐしさの雫ゐぞ知る

ふおじ頃ゆふべに

端居する袖のゐゝうに涼しきゝこの夕かぜゐ秋やたつらん

うづまさゐて初秋の頃

おそく消え早くむせびて山陰に露のひるまぞ少なくなりゆく

なやゝかに身ゝ去む老のね覺をや尋ねてつゞるあきの初風

曉風告秋

曉知早涼　宵ゝまの暑さいづら涼しさにめざめし秋のあゝつきの床

初秋露　ふゝき夜のねざめの枕露ぞおく夢ゝさゝいちに秋や來ぬらん

幽栖秋來　此夕べ秋きゝゝらし庭もせゝつゆゝたましくよもぎふの宿

霧わたる苦路去めりてひやゝゝゝふくる秋去るき庭の木隱れ

秋のはじめつ方

きり〳〵す鳴く夕かゞの山風ゝ弱りそめぬる日ぐらしの聲

人々とひきて殘暑といふことをよめるゝ

夏よりも猶さへまうき暑さ哉せゞしかるべき秋ぞと思へば

初秋いとあつきゝ

秋ゝ立つ昨日の風ゝ身ゝしてゝふゝ暑さゝ又ゝへりぬる

文月末つかゝ猶あつゝりゝれば

朝夕ゝゝしきばゝりゝ秋めきて暑さゝ夏にかはらざりゝゝ

いとせゝしき夕べ

おつ衣たもとふおれぬ西風のせゞしく吹きて秋ゝ來ゝゝり

白雲ゝゝさゝお引きさゝるくれゝ

昨日までゝやしき峯とみし雲も棚びきそめてゝき風ぞ吹く

西風飄一葉　あへゝちる桐の一葉のことゝりも身ゝ去る老の秋のはつ風

秋淺向泉　むゝふより殘る暑さも忘るゝゝ泉ゝのゝやゝきゝ來ぬらん

初秋のころ夕立のゝちいさゝゝかゝつさを忘ゝさゝるゝ

荒らましき雨の名殘の夕べよりはじめて秋の風ゝふきける

風せゝしとて人のよろこべるゝ

皆人のまちよろこべる秋風のおぞしも老の身ゝ去むらん

殘りし暑さゝ端居して見ゝさゝゝ野火の煙のゝおゝさゝおたゝおびくを

一ゝのさゝゝふきも定めぬ秋風を野火ゝゝぶりの行方ゝぞ去る

又いと暑きゆふべ

去べしぞとおもへべさへてゝられゝゝ殘る暑さも老の齡も

秋のはじめつゝのさ粟田をゝて

あゝさ山ふもとの粟生いろづきて薄ぎりおびき秋風ぞふく

七夕の心を　人のよにうゝていいはじあゞまでも限ゝられぬ天の川あゝみ
夕月ゝまゞきあいりそ棚機のあふ夜ふけぬとかこちもぞをる
いつも同じねぎごとをとて
棚機ゝ耳あれゝらしあまたとし同じことのゝ所りきぬれば
待七夕　いつしゝのと思ひし秋ゝまちつけつ今いくゝのあらば星合の空
七夕月　こよひこそ心のやゝも晴ぬらめ星のゆふべのつき清きそら
七夕煙　月ゝのげの匂ふも涼し星合のそらだきものゝうをきけぶりゝ
七夕山　たゝばさの積る思を重ねあげば富士も麓のちりひちのやま
今年は手むけゝ地儀ゝやよせんとておもひ出るまゝを
山岡　よゝかけて絶ぬ契ゝさゝばたのいとかの山のはつ秋はそら
我庵ゝ近きよし田のかぐら岡のぼりてゞゝるゝし合のそら
野里　ねぎゝくる二つの星も一をちのふる野の道の末てらさゝん
あふ事の常磐は里の名をきゝば共にをまゝくゝしゝ思はん
河橋　今宵あふ星のひゝりも西川ゝかさぶく迄もふけぬなるゝゝゝ
今宵のゝ渡しやすらん棚機のさえぬゝゝゝのみなそこの橋

濱　々ゝ毎ゝ二つの星のゝらび濱ゝらべん影もいくゝゝきのそら
七夕に信美の所さてかちの一葉のきたる繪ゝ歌こふゝ
此秋ゝちりくるゝちゝゝ七のへ王我言のはをゝきてたむ々ん
七夕ゝ葛花を　一とせのうらみもゝゝらじ葛花のひもとく秋ゝゝへる棚ばさ
七夕遊のちれるを見て
さけばちる遊の花びらゝるまなき類も有りと星ゝたむ々ん
七夕鴈　棚機ゝ雁をかおとゝゝとゝいひゝしてこん春までゝ君ゝのへしそ
七夕鶴　此夕べねをゝく鶴ゝふのゞへんちゞを一よの星ゝのをとう
七夕に萩の花尾花葛花撫子の花女郎花又藤袴朝顔の花といふ古歌を思ひいでてやゞてこれを題にて人々にもよませみゞうらもよむとて
棚機のうさしにをさせむらさきの色ゝつゝしきゝゝき萩の花
いつしゝのと思ひし秋のはつ尾花はにいでて星の枕にや借る
今宵とや花の紐とく葛ゝゞらくる秋ゞとのちぎりゝゝゝらで
塵つもるたゝゝゝさつめの床夏ゝうち拂ふにも袖やつゆ々き
久方の天の川原のをゝゝへし人のさゞ野はうさゝゝゝらじゝ

秋毎にきてもとまらぬ棚機のうさをゐ匂ふふぢばうまうを
たゐばさ此秋待えても露のまのちぎりをいはゞあさ顔の花

あれよをはてゝ猶人々あまさくるに草あれゞ木もおどろあらざらんとて七木をうき出て

人々によませみづからも

梶　思ふ事かちの七葉にうきつけて二つの星にゆふいさむゆん
　めづらしゐ軒端の桐の散そめてかつあらいるゝ星合のそら
桐　さゝゞゐのいとゆたのゆし思ふ事おるてふ桃を星に手向て
桃　棚機にいざねぎうけて今よりいうき事おしけみとゆおりなん
梨　
合　
　獣
　戀々て逢ふ嬉しさに糸ぶの木のねぶさしとしも星い思はじ
秋　いく秋ぞ天の川原の濱ひさぎ久しき世よりくちぬちぎりい
楓　ゆうれゆく星の涙にそめぬべしまゞ色づうぬ秋のうへでも
七夕虫　年ごとにまつぞ久しき棚機のあふいこ蝶のゆめのひと夜を
　棚機のあふ夜のてまにかはるとて機ふる虫いあるよ也ゆり

七夕七首うさあまさ見るやどに日くれにけゆゞ例のごと七首もよまで手向くとて

七種に願いゞ星やゆまがはんたゞ一ことのはにも云らおん

七夕絲　打ゆだれむゆやはれさる織女のおゝろの糸や今宵とくらん
七夕衣　かさねても夢とや思ふたゐ機のうへし馴さる天の羽ごろも
七夕扇　たゐばさの手馴ゆ宵の扇よりふきやそむらんあきの初ゐぜ
星夕燈火　灯のゐげぬけにゆりあゆも又たむけん星のちぎりおらぬに
牛女悅秋來　思ふ事おるてふゆふのよろこびに堪ゆや星の瓜まろびせん
夜更憶牛女　月入てよのふゆけゞ棚ばさの心此やゆもさぞおとぞ思ふ
七夕後朝　けさい又天の羽ごろも立うへゆうらみやゆらんうゆき契を
露を　かりの世を思ふ涙うかべに生るいつまで草にむゆぶ白つゆ
　とりさてゝいへゞ色おき露おがらあやしく花の光をぞそふ
　百草の花といふとも秋の露ふうゆゞうゝるひうりをもみむ
　はぐくゆてうるふをゆれゞ置く露や秋のこぐさのちれもおる覽
　色おしといひおかとしそ草も木もちぐさにそむる秋の白露
苔路露　人とはぬ庭のこけぢに云く玉い秋くるよひの露にぞ有ゆる
太秦寺にて露のいとふうきを見て
　我ざにもゆまゆおりおん秋うけて思ひやらるゝ露のふる寺

露深しといふ句をはじめにおきて

露ふるし雨のあおりの野邊よりもはらいぬ庭のむぐら蓬生

ある人の悲露といふ心いろ〳〵よそてんとゝふに

むせぶよりけやをき草の露の上を思へば袖ぞ先ぬれける

夕やみにいおづまをそて

夕やみのあやおき小田を守る賤ゞこゝろおぐさや通ふ稲妻

稲　妻　遠近のをえさに野田の稲づまい闇きをそふるひのり也々り

玉まつらんとするまへの日ある人の蓮華をおくりたるにこれよりいもをおんやるとて

いさづちに葉のを繁りて花さゝぬ胸のはちをに似さる畑芋

玉まつりするとて

みそおいいきませおき玉おの秋も猶永らへて迎へまつるを

すをゝのさび〳〵ゝいりて今日にゐふを思ひて

おき玉のあやしとやをんゝふ毎に迎ふる宿ぬあまさ變れば

まさぬ日何くれのものをにへにして

おりさちてつくりおしたる畑つものゝふのみあへに我奉る

玉まつる夕べ思ふことありて

我死おゞ我ちゝはゝぬおき玉を迎へおくりて誰ゝまつらん

我死おゞ我おきさまいこん秋の野べの尾花や招きてあらん

まさぬ夜舟のゝさに火ともせるをて

おき玉をおくる御法の舟おれば西のゝさにぞへいい向ひける

七月十七日堤の家に遊びてみるゐ東ぬ山に大もじのかさちに火をともせり年おとにきそ

の夕べおりしを殊の外の雨風にてゝふにおりゝるなるべし文字のゝさちこと處にともを

よりもいきゐひことおりおどとりゝ〳〵いふ程にゝたへより消えゆく諸行無常のことゝり

ゐもぬもいと哀と見るに茶ゐのめきて月さしいゴ

ともぬ火いい消てゐやなき高嶺より光をゝへて月ぞいてくる

荻　こと草も吹いもらめど荻ぞまゴをらせ初つるゐきのはつ風

荻　驚　老ぬれゞ秋のはつ夜のはつゝなる荻ぬ音ゐも夢ぞさめぬる

月　前　荻　風よりもをゐしむ色い月ゝげのはのめき初るのきのしさ荻

荻　秋風ゐをゝの音きこゆ高まとの野邊のま萩の花やちるらん

萩のさゝりなるを見て

風さつな雨もなふりそ山姫の萩のゐしきをさらせゝふなり

禪林寺の萩見にまゐりしゐさとしへなく靜ゐて照る日の光そるとさなしゐといひし

ふることゝも思ひいでられて

山深き露ゐうもれて秋萩のはなのさかゑもそるひとゝなき

萩の宴せしゐ朝萩を

朝まだき去らさて見ゆる秋萩ゝ露もやふかき花やうつろふ

身のいさうよゑくなりゝる秋萩のかさ枝殘りたる見て

萩の花久しくのこれこん秋をまちそるべくもわらぬ我身ぞ

禁中萩　さきぬればよもぎがかげもまばゆきをさぞ紫の庭のわき萩

名所萩　咲しよりをばなゞ袖も紫のむらおゐそゆるまのゝうらはぎ

遠思秋萩　誰ゑけて袖ぬらすらん古郷のそろきゞ原のわきはぎのつゆ

夕立して晴れたるあとの村萩玉をしけるでゝなるを見て

たれそよと雨の名殘の萩の露風ゐきらめき日ゐみがくらん

萩のゝつゝ殘れるゐ入日さゝを

夕日おそさしてそせゝれ木隱れてうつろひ殘る秋はぎの花

女郎花　人言のさが野ゐたてる女郎花ゐだなる秋のゝぜゐなびくな

霧隔女郎花　女郎花いろのさゝりをねたしとや立ゝくゝらんのべ此秋霧

女郎花翫露　をそなへしかざしゐもそゝさゝ蟹の糸もてぬける露の白玉

澤女郎花　をそなへし露の盛を澤水ゐうつしてゐのゞかげたのむらし

香川景樹より女郎花ゐそへて　老らくゝ此身につきなしとをそなへしすてゞすてなん一め

そて後とゐゑしかへし

老ぬれゞたをらぬのそぞ女郎花何ゐゝよそゐ思ひもつべき

とゝゑしの宿ゐなうゑそ花もゝきはゐ出る秋ゝ人招きゝり

薄

夕月のゐれめく野邊をそ渡せゞ尾花なびきてゐき風ぞ吹く

誰しゐもまねくとそしゝ山本の田ぐろゐ立るを花なりゝり

神樂岡ゐて　秋風ゐなびくをばなゝ神樂岡きねゞ起きふす袖ゝともそゆ

苅萱　日をへつゝ賤がかるゝやつゝのまに吹亂しぬるのべの秋風

置ゐまる露をゐもそやそだるらん風の絶間の此べのかる萱

ふちばかま　藤ばかまゐやなゐ咲そ匂ふとて來てそる人もわらぬ垣糸ゐ

籬　蘭　花のいろゝ露のま垣の藤袴ゐゐひのそこそやつれざりゝれ

野蘭　來て見れば薄紫のふぢばかまあき香ゐいかでのべを句はも

槿　あさがをの花をはうなと思ひしや千年此後の松をこぬやど

槿未開　朝顔の咲を待つまの久しさはうなうるべき花としもなし

隣槿　咲ぬやとやどのなうがきかいまめば打そむきさる朝顔の花

秋香　種々の中ゐも分てふぢばかま菊こそあきの香ゐつくしゝれ

野花を　緑なる草のいとゞもてをこなへし花のゐしきを織ぬ野ぞなき

山寺ゐ詣づる道ゐて月草の盛なるをこて

秋の日ゐうつろひやすし月草の露のさうこの色ゐはこるな

秋花逐夜開　ぬぬる夜の人まゐさきて朝な〳〵こぬ色そふる秋くさの花

秋花色々　秋草の花をしこれば色々ゐつゆもこゝろをうつしてぞおく

法印榮川が畫ゐ秋野此うた

小ぐさ咲く秋野をこれば露ならぬ心もうつる花のいろ〳〵

秋海棠とひとへ菊と垣ねゐさきさるうけるゐ

秋をしる庭の一花ふさ花ゐいろのちぐさの野べもおもはず

去ら河のながれゐ色々の花のうつりさるを

色毎ゐこゝろぞうつるもゝ草の花のうげゆく去らうはの水

雨はれて蝶のとぶを見て

雨はるゝ花野の蝶のれのがどちむれて遊ぶいいかゞ樂しき

くものいゐ蝶のうゝ迄るを見て

飛ぶ蝶のかゝれば こそいさゝ蟹のいとはしき世と思ひ知りぬれ

虫を　秋さむこ我きぬつゝる窓ゐきていそがし立るきり〴〵す哉

月さゆる壁のあれまのきり〴〵す内外も分ぬ霜よとどなく

聞虫　露やうき思やしげき夕されば草ねのむしのこだれてぞなく

曉方虫を聞て　いつ迄うかくてもきうん鳴弱る霜夜のむしのあうつきの聲

雨夜　虫　雨はれぬ軒の玉こづつぶ〴〵とさゞめくよはのきり〴〵も哉

雨夜此虫のさやうゐもあらぬをよめる

月暗き雨よの窓のきり〴〵もおのがつゝをもさしやをぶらん

閨虫　きり〴〵す頼むうげとて鳴きよるも同じ蓬ゞ閨のさむしろ

虫のかしましく鳴くゐ

つねうとき老此耳をもへだてぬい垣ねの野邊の虫のこゑ〴〵

徑　虫　露をけてわをゝと問へバねを絶て分おし跡ゐまつ虫のなく物へまゝる道のうらがれゝる野原ゐ鈴虫のなくを

秋寒くなりゆくまゝゐ盡まのを聲ふりゝつるれべのすゞ虫はたゐる虫の　女郎花ゝゞかりころも急げばか機ゐるむしのよるゝけて鳴くきりゝ〳〵すを　いゝゐうき秋の夜なれバきりゝ〳〵すこを絶もせず鳴き明をらん難波より昌よしが消息してゐる方より松虫を籠ゐ入れて送をゝるいとよう鳴侍るとて人々興じゝれど霧が耳ゐいふつとゝこえざりゝれバ　まつこともなき老が身い松虫の聲きく程の耳ももたらずとよめるといひおこせゝるかへりごとゐ

きゝざらバ人ゐ聞せて數をとれ君がちとせをまつむしの聲

萩いうつろひはて丶尾花いうなだれ四方の稍い色づきわたりて打をぐれたるさまいいんかたなく物ゞゐし

をぐをつゝふゝくなりゆく山里の秋のゝしきぞ哀ゐりける

海邊秋風　ゝち渡るゝらわの霧れひまをえて芦の葉なびくあきの汐風

秋風催興　秋風ゐ吹ゝへされて小山田のゆなををよそゐすぐる村とり老後秋風をきゝて

いつまでゝ草木のうへゐ聞つらん我身をををる秋ゝぜの聲

うづまさゐ有るゆど夕つ方風吹われて高き木の枝をを瓦もちりていとすさまじきくれ

瓦さへ木の葉とちりて古寺の野分れゝぜゐまゝやあれなん

野火のゝぶり此中ぞらゐをれゝるををて

秋風やゝゝく吹らん立のぼるゝぶりの空によゐをれてみゆ

同じころ雲のゐしとく風吹くべきゝしきなる夕べ

今ふゝバ民の愁とゐりぬべし云などのを神ゝぜやめてゝべ

八　朔　に　文月くれ月ゝち替るゝふをしもいつの世よをゝ言ゆきいせし

小　鷹　狩　あだし世と思はバ誰も鶉伏す花野をれをやかりにみるべき

霧　中　初　鴈　いくつらぞ翼もをえぬ夕霧にきむゝふ鴈のこゑぞみだるゝ

ゐしてゐ　秋風ゐいゐ葉ゐみより鴈ゐきて木末いろづくゐのしまの森

夕べに雲ゝゐ引き雁のとぶををて

空の海やゝゐ引く雲ををきゐて沖こぐ舟とをゆる雁ゞね

鹿をよめる　松風いたえをふけども高砂のをのへの鹿いまれゐこそきけ

鹿のゝちどの　ゐき風ゐ木陰の霧もふきはれて鹿のゝちどの月ゐゝくれぬ

旅泊鹿　秋寒き磯山おろし海ふけば おとのうきねゐをじゝをぞきく

山田うり殘したるゐ鹿ふさつゐるゝるゝ

かり殘す小田の田ぬしの心をや妻まつ去ゝの嬉しとて鳴く

うづら　かりゐきて過もやられぬうづら鳴く野邊の昔の妹ゞ垣ねを

秋田　我も世を秋田のそやゞ露霜ゐおのれのとやゐ立つゝるべき

早去ゝる頃　てりまさる秋田の月ゐ雨さべと言あげしつゝ賤つゝとうつ

垣根より見ゝさして

秋はさのとどり此中ゐ交をるやおくての小田の苅しほの色

霧　夕霧ゐもの思ふ人の何おれや立つより袖のぬれまさるらむ

初霧を　初きりのさちそめしより草も木も色とゐおるゐきの山々

霧のいと深き朝もと住しうづまさを思ひやりて

岡崎の垣根もとえを霧たちぬ今朝いゐおらむうづまさの森

堤　霧　川そひの堤をこめて立つ霧にかぎりもとえぬ秋のゆふおと

遠村霧　おろもうつこゑゐ殘りて夕霧ゐやゝおくれゆく山もとの里

秋　晩　遠山ゐ入日のおおり猶とえて野ゐ霧わさるゐきのゆふぐれ

251118

夕べをわびて　ゝなべて世は哀と人やおもふちんふり增る身はゐきのゆふ暮

雲のさま〳〵なるをゝて

ゝ波とおり小舟とおりて夕暮のくものをゞたぞはてゐ消ゆく

秋　夕ゝを花のとゐのゐゐとえて霧渡る山田のくろのゐきの夕ぐれ

うづまさゐて獨おゞめて

うしとてもいゐゐゐゐをべき心もて入ゐし山のゐきの夕ぐれ

ゝうづまさの深き林をひゝきくる風のとすぎゐきはゆふ暮

山風ゐやゝをさまりて立つ霧ゐ林もとえぬゐきのゆふぐれ

人とはぬ庭の尾花のやゐゐ出てされをゐまぬくゐきは夕ぐれ

草はは消てふりおん露をさへかなてぞおもふゐきの夕暮

雨はれさるゐ風おどもたえていと靜ゐなるゐどゐ

ゝふの雨ゐ萩も尾花もうおゞれて愁へ顏おるゐきの夕ぐれ

松風ゐふけどふゐねどとゐぞ去む山のとゐゐかのゐきは夕暮

よそゐ我きゝしゐ物ゐきゐ〳〵をおく山陰はゐきの夕ぐれ

軒ゐゐれて庭ゐ野とおる古寺のふりて幾よのゐきは夕ぐを

まはぎ散り尾花さゞれて吹く風のやゝはだ寒きあきの夕暮

夕べゐ飛ぶ鳥を見て

飛ぶ鳥のゆくゑ遠くさゝおくれゞ霧にゑくるゝ秋は夕ぐも

又ある夕べゐ　山とゐくさゝおびく雲ゐうつる日もやゝうもくゐる秋の夕暮

獨つく〳〵とおがむるくれのさびしきまゝ秋の夕ぐれとおきてよめる中ゐ

遠山田よそゐ思ひしひさの音も風ゐきこゆるゐきの夕ぐれ

立ゐめてそことも分ぬ鐘の音の霧よりもるゝゐきは夕ぐれ

山もとの賤も衣をうちゑひてゐがめやもらんゐきの夕ぐれ

くもゐとぶ雁の涙もなゞむもゞ袖ゐぞおつるゐきは夕ぐれ

鳴く鹿ゝ戀るつまゞゐゐるものを老て友ゐきゐきの夕ぐれ

野べ遠くさびゆく人の袖の上も思ひやらるゝゐきは夕ぐれ

ゝ遠ゝさの川べゐ見えし白さぎもねぐらゐ歸るゐきの夕ぐれ

垣ゑの野邊ゐ出て

さびしさゝ住む宿ゝらの習ひゝと立出る野邊も秋の夕ぐれ

駒迎を　迎ふとて關こえくれゞ望月のゐまよりもるゝ影ぞさやけき

月

立まちは月ゐにゑひて花もゝきゑさゝのゑ馬引のゑる見ゆ

二日月をゑて　西とゑくはれさるゐゑにもめゞこそ二日は月の影をしもそれ

みちゝけを咲ちるさゞゐくらべても猶花よりも月ぞのどけき

落梧新月　ちゑ初し桐の一葉のひまゑせて秋をこゝゑる三日月のゝげ

雲間より三日月のゑは見ゆるを

村雲をつゐゞるいとゝゑるばかり細くかゝれる三日月の影

四日の夜ゐや野火の煙の月をへゞつるゐ

月ゝまゞみゝ月ばゝり影ゑそし野火の烟よさちゐへゞてそ

夕月の雲ゐまゞへるを

くれぬまゝ村ちる空のゑら雲ゐまゞひてゑゆるゆふ月の色

夜々月のゝしきはまさるをゑて

入る山のよひ〳〵遠くなるゞうへゐ光さへそふ夕月のそら

ゆふべゐ月をゑて

おがめつる野ゝ秋霧ゐへゞたりて軒端の松ゐ月ぞきらめく

仲秋十日より三日ばゝり夜々月明なり京は人ゝこのゑどゐとへと思へどこぞゐり〳〵て

曇れる夜もやくらんゝし二日ばゝり例のさゞおとゝ

蔦ゝづらくる人おしゐゝふもまゝ夕日かくるゝ山ゐげの庭
入相の鐘ゐきゑひて鳴くゐるゝ月まつ虫の聲ゐやゝゐあらぬ
夜よしとて人まつべくもゐらゐくゐ獨ゞ見つる山ゐげの月
ゐもひやる心の駒のくつわむし野山の月ゐわれやいさゐふ
湖墨ゐかゝる文字もら老のめゐをゆばゝりゐる秋の夜の月
打むゝふ硯のうゑのつき影のさもせばしゐる世ゐもすむ哉
ゐるゝ消えゐるゝへゞて丶白雲のをちゐぞすめる月の友垣
心さへ身さへうつりて古へゐゝはりはてゝる月を見るゝゐ
ふくろふの聲の外ゐゝるゐとゞれや月ゐもをぬる軒の松ゝぜ
照る月のかゝぶくまゝゐ西川の河せのゐとも空ゐこそもめ
尾張の宗則ゞもとより　まゝ萩さき垣根ゝ虫も鳴くらめど慰さめゝねん秋の山里とゐりし
かへし　何ゐゝゝ慰めゝねんものゝとゐわれをもてゐを秋の山ゞと
松風明月林間の雲君ゐゐくりゞさし
十五夜月のはまゝるを思ふゐ若ゝゝしより三四夜ゐいをゞをゞさるを今年乙巳の秋の半ゝ

空ゐちりばゝりの雲もゐくて夜もすゞらむゝへど猶ゐゝぬゐまりゐ
長らへて猶よゐゑばしをむとても今夜ばかりの月やゑゞらむ
ゐきのつゞきといふことをゐきて
ゐつめきて秋ゐや照らを月々の宵ゐゝつきゐゝけし光を
きゞの葉のゞばをゞきばまぬ色々もゝきてゞをゆる秋の夜ゝ月
のちゐをん人もゐらむを今日の月光をしまをてゝりつくを哉
ゝきひとり天ゐゝゝりてゐら金の土もとゝはゝとてる光ゝゐ
きし方も秋ゝゝゐらをゞ澄む月ゐ變らぬ天のまことをゞ知る
いつの秋ゐゝ　ひとゝせの月の盛ゝ秋のそら秋ゝもゐゝゐをくゐげゞゐき
十五夜翫月　めゞりゐふ秋の半の空ゝ月てゝをゝつひゝりいつゐくらべむ
世の常ゝもちをもゝちの光ゐも秋のひとよの月やまさらむ
いつゝ年ゐやはつゞき十五夜十五首の歌といふ字を上ゐゐきてゝふゝくる人ゐゝへしさせ
んとてよめゝし中ゐ
はるゝゐゞ春ゝゐもひし此秋のゐゝゝゞの月も廻りきゐゝゝり
こゝろゐき雲さへ月ゐ晴るゝ夜ゞ誰も言葉の露添へてをよ

うけれども雲い晴間も有ぬべしまつゝひあしや月ゐぬ人
たゞゲねの遙ゐきこゆをめる夜の澤べの月や霜と見ゆらむ

望の晝よりおびゝいしく雨ふりて暮つ方雨いやをたれど名殘の雲ゐ空はるべくもをえれどさすゲゐ打もねらををまつ程ゐ軒の松の梢ゐやのめき出て夜半ゐいとよく晴ゝるゐ

はるゝ夜を松の梢ゐ今ぞをる秋もおゝばのおゝぞらのつき

まゝゐる年いくれ頃より曇りて慰さむ事おきまゝ

名ゐゝてる影を隱して浮雲のかゝるよゞとや月のをすらむ
庭草のつゆもゝゞをぬうき雲ゐ風まつ虫やつきこひておく

東の山ぎいゐ念佛三昧のいと靜ゝおる寺ゐりよる〳〵鹿れけぢゝく鳴くと聞てゝれこを

いゞなひて暮ぢろよりゆきて念佛してをゝまつゐ夜ふくるまできこえねばゝゝみゐ思ふこといひしを忘れじとてゝいつくる中ゐ

此寺いひゲしの山れゝげおればもちの月さへ出ゲてゐをる

居待月　いもと我おらびゐ待のいゐしへをゐもひ出れば月も出々り

臥待月　月やすむ曇りやをると笛竹のふしまつ程もねゲさかりゝり

わらいやをれ後心地ゐづらいしくて月もえまゝで聞ゐいこはんとて

夕露のおきゐむ事のくるしさゐ月のいづるもまゝで入ぬる

うづまさゐ有るころ十七夜の月東山をいづればやゲて松ゐ宿れるいと興ありき

遠山のゝゝねれ月をうづまさの松れをづ枝ゐ宿してぞをる

同じ十九日頃ゐや木のまゐ待ちつけゝる月の曇をるを

村松のをれまの月をわやゐくゐ立へだてゝるうき雲のそら

九月十三夜月れ歌あまゝよを侍る中ゐ

夕まぐれゝつ〳〵軒に殘る蚊の數をるばゝり月ぞさやけき

心あれや月の行方のうき雲もさはらぬゝゝさゐはらふあき風

名ゐ高き望ゐいくもる年もあれどをめるいをよの長月の影

れおじ心を　今宵いと唐土人もあふぎをんとよあきつをのあゲ月のうげ

十三夜曇れり中秋いいとさやけゝりゝゝるを思へば

名ゐゝゝき二夜おゲらに月影のさやけき年ぞ少なかりゝゝる

長月十三日人々とひて先の月もくもりゝゝるゐこよひも同じやうなればをびつゝもゝをの

歌よむゐ長月のとをゝあまりみゝと上にゐきて

なを業も先ゝち置て暮ゆゝばをるべき月のいそぎをぞする

蛙こそ雨をこひけれ打くもるこよひ此月をませじとや思ふ

月ハ今松の木のまゐえ初ぬ日の入はてゞひゝり添ハまし

きし方を數へてまれゞあゞ月の曇れるよこそ少なゐゝり〻れ

のゞれきて世ゐ住ひびし宿ゐれど月ハ心のまゝゐこそ見れ

友むれてまとゐもる夜の月影ハことゐ光のそふゝとぞ思ふ

折しもあれ都の人のとひきつる二よの月のくもるべしやハ

かくゐゞら晴まハ今宵此國のひゝりをさへや月ゐかくさむ

ゐもの空ハよしはまずとも都人とひし今宵ハ月さやけゝまも

松ゐ吹く秋風さえて雨ぐものうさゐる空ゐつきをこそまて

林間のむしの音ばゝりさやゝゐて雲ゐの月ぞ影ゐばろゐる

みゞきゐも玉ゝと昨日見し月のふるき鏡とくもれるぞうき

限ゐる人のよぞのしまち〳〵し今宵の月のくもらまもゞゐ

秋月入簾　月きよをもは内との隔ゐくふさへゐ松のゝげぞうつろふ

夜ふくるまで前の林中ゐ月さし入りていとあらハゐれゞ

畫ゐらゞ弓槻ゞ下ハくらゝらん木ゞくれもゐきよハの月哉

東は木ゐゞくてまだ月ハまえねど西は方より雨ゝうゐりゆくもをのし

山は端の月出ゐゝり我松のこまゐゐのゝげの野べゐうつまる

塵ばゝりまの雲もゐくて西山遠く見渡さるゝゐゐあゝで

照る月の入ゝさまれゞ大原やをしゐの山のまねはまつばら

月ゐゝき夜ふくるまでゐゞめて

都人まつとハゐしゐ月もめゞまゞ思ひいづる秋のよゐ〳〵

益ゞいひゐこせさる　君ゞゐさりゝへまこすまゞ暮はて丶山のは高く月さしのぼる返し

かへりまし程ゐかゐるらん月影の都の方ゐさしそめしくれ

夜ふゝくめさめていねらまねゞ月ハいゝゐと南面の戸をはゐちてまれゞ中空ゐゝいやき

庭の露さら〳〵と見えて四方ハ物ゐともせま

夜殺深くゐきでて見れゞ庵のとの月こそひとり澄渡ゝゝれ

雲はれつきていと清くすめる夜

人しまぬこゝろの塵も拂ふめゝり月すめる夜の松ゝぜのこゑ

雲はむら〳〵ゐる中をもる月の折々さやけゝゝりゝまゞ

ゐほぞらの水まさ雲をもる月ハ淵ゐ玄づめる玉ゝとぞまる

ながるゝ月を　風はやみながれあがらあ行く月の空さだめあき村雲のうげ
狂雲妬佳月　月清し風あさゆみそかゝる夜ゝうあらぢ雲の妬しとぞ立つ
月前霧　はぎのこる隈をさづねて木隱ものきりあ匂へる秋のよ此月
月前燈　そむくべきくまも殘らぬあばらやゝ月あ々ちぬる秋此燈火
村雲のさえまにさやうある月をそるあ程あく影のうくれさる

長閑あもあもひ々る哉ものみはてぬ雲まの月の程もあきよを
曉月　さやうある曉づきあううれ烏告ぞばのゝるうげをそましや
霧間曉月　秋ぎりあ匂へるうげの薄らぐゝあちをやすらん有あけの月
曉月入窓　有明の月さやうさあ窓を明てねざめううらぬ宿とあしつる
ながれてめざめさるあ月さやうある曉

もりかはる月をそよとやさ夜時雨ふるき軒端あ音信てゆく
遠山曉月　待遠く向ひし山のうひもあくいづれば去らむ去のゝめの月
海邊曉月　わさつをのはてあき波も秋の夜の限をそせて去らむ月うげ
月前眺望　秋此月かげしく海の島々ゝうゝをあううぶちぞうとぞそる
月前遠情　今宵され枕もとらでそゞ崎さのゝゞさりを月あゆくらむ

老後見月　あがむれば遠き松島きさ潟の月もあゝろのうちあこそもめ
海人見月　むかしをし月やあらぬとのあつ哉老の涙あくもる夜のうげ
老の後世中をづらゝしくて山里あ在る頃よ更るまで月をそるあ涙落つとも覺えぬあ袖も
去ぼるばうりあをば

はあしへも獨あがめし月あれどかくやゝ袖の露けかりける
翫月　秋此月さてもや影のさやけきと木下つゆあうつしてぞそる
毎秋馴月　いつの秋も思ひぐまあき我身とゝ馴をし月ぞ空あ去るらむ
客依月來　里分ぬ月此さよりとい ひあがら踈かる人の夜半あとはめや
月夜逢友　照る月あ我もううをて踈かりし友にさへこそめぐりあひぬれ
布淑が桂の家あ去さしきうぎり月見あまうりゝる時の歌どもうきおべをもる奥あ　いう
ばうりさびしとうふもふをやあ人うへりし跡の夜半の月影とうけるをそて昔思ひいでら
れてうきそへさをし

都人うへをし後あ月ひとりをそしやいつのうづまさのあき
月夜あ敬儀が獨居て　およひされ翁と共に山里の松此木陰あ月をそるらんとよめりしあ

これも友おしゐとゝれバうの詠草の奥ゐ

友もおきはしゐを寒ミ火桶ゑミいざきてぞミし老のよの月

月出山　山の端をゝつ出初し月影のミやこの四方にはやミちゐゝり

嶺月照松　千代の影よるゝ曇らぜ辛崎の松のゝゝミのやまの端ゑつき

山月入簾　山ゝまゞ出もはおれぬ月影をすゞしゐうつゝ松のむらだち

江山夜月明　山ゐげも隈なくてらゝ江の月ゐゑこりゐねたる水のうき霧

月の歌十首よみ侍りゝる中ゐ河月似氷

初瀬川はやミ早せもこゆるかとミゐ底ゝけてすめるつき影

湊月　あゐゞれて夜半ゐやいでし湊舟からゐの音ゑ月ゐきこゆる

梓弓いるさの月ゐまとかゝのミゐとのゝ鳥たちさゝぐミゆ

海月　まつらゞゝ山おき西ゐ行く月をはるゝゐひゝゝゝ沖つ波

島月　照る月のゐゝしゑと浪をさまりて夜舟おゞ出るかこの島人

松島の梢を月のいづるよりゐミゐきえゆくあまのいさり火

古寺寺　人すまで荒ゆく寺の軒端もる月のひゝりやゑ里のともし火

蒲寺月　いらか朽ちとばり破ゝてミ佛のミ影あらいゐ月ぞさしいる

里月　里の犬の聲のミ月の空ゐすゝて人ゝ去ゴまる宇治のやま陰

山家月　松杉の木ゑまを洩りて山窓ゐかつ〳〵月のゝゞぞさしいる

やま里ゐて月をミて

さびしさに堪てゝよもとおもへども月ゝむ頃の秋のやま里

井月　くむ袖ゐくゞけもはてぜ月影の跡よりゝゝぶ玉の井のみづ

宮ゑ仰言ゐて名所月といふゐとをよみて奉ゝる

月夜よし夜よしと越る旅人ゝくらぶの山の名をやたどらむ

此題ゝゐまゝよまるべしとてつぎ〳〵思ひいづるまゝかいつけゝる中ゐ

ぬば玉の黒髪山ゝおきの夜の月ミぬゐどの名ゐこそ有々れ

あふミの海八十の湊も照る月の一つひゝりの中ゐこそ有れ

照る月のひゝりを散らぜ吉野川花ゐもこえじ秋のいはおミ

あゝざりし春ゑ海べもゑもれぐさ雁おく秋のすミよしの月

おさふかバ吹ゝせてをミよ陸奥のえぞも今宵の月ゝ隠さじ

路明殘月在　夜をおめて我より先ゐ朝たちし人のゆくへもミゆる月ゝげ

月向白波沈　山の端をおどかこちけん西の海やさはりおミゐも月ゝ入々り

かくるべき月を拔しとや立さへて入さじとせまふ沖つ白浪

殘月掛岑　山遠き松ゐかゝまて殘る夜をさばしと照らせるねの月うげ

擣衣のうゝの中ゐ

秋風のさき〳〵ふけば賤のめが手もすまにこそ衣うちけさ

旅人の身ゐやさむらむ秋風のさむき夕べゐころもうつこさ

谷ふゝと住む里あれや衣うつつちのひゞきの嶺ゐきこゆる

秋來擣衣　秋風の寒くふきぬる夕べより一夜もかちさころもうつゐり

海邊擣衣　ねま人の波うけ衣うつゐどやめうり鹽やくいとまゐるらむ

秋　夜　月清く秋うぜさむし今よりゝいうでう老のいをやせくねん

曉ゐおく　秋寒ミ床のべさらさ虫鳴てねざめがちゐぞ夜ゝゐりゐける

菊の歌の中ゐ　山とゐくよ霧殘りて去らむ野の虫のねたうき秋のあけゐの

つミつれば今や若ゆと待つゐどゐ老の數そふゝふの白ぎく

つむ毎ゐ若ゆとも身を思はねどゐうぬゝゝふの白菊のはゐ

此秋やうぎりと思へばいとゞしくもてはやさるゝ白菊は花

あゞらへてふりゆく袖ゐ置く露や老の光の去らぎくのはゐ

ゝふゐゐふ露の此身もいつまでの契うかけし去らぎくの花

秋をへて老とゐるまで色もゐき言葉のつゆを菊ゐかけつゝ

露のまも千年ふるてふゝふの菊ミつゝぞ我ゝ久ゐへゐける

春さてばまづ咲く梅の花よりも秋は末野ゐにゐふ去らぎく

何事をゐもとゐくてゐとしも長月は今日ゐゐりぬ年々ゐうけて色ゐき言葉のつゆゝむ

うふ菊ゐもゐゐゐれどまさこん秋ゐゐはんもいとたのまれぬ身ゐもゐ思ひよるふしを

假初ゐういつゝてミばやとてゐまさよみゝる中ゐ

長月のゝふの爲とや昨日よりつくろひさてし菊のきせ衣さ

水底は色いさでゐ交るこゞねかと岸ねの菊のうげをこそミれ

露のまと思はゝ何のかひの國つるのさゐりの菊のちとせも

なゞの月は去ゝぬうゝといふ事を上におきてよめりしことを思ひ出て又よめるうちに

野の宮の古きいゞきに匂ふ菊あれ幾よのゐきをへぬらん

ぬしぬとゐやさじ袂の菊は露かゝればゐそゝ香も移りけゆ

宮より御題さまはりさるゐ菊有新花

園にまだめなれぬ菊のゐゐへるや此秋よりの千代は花

月前菊　月清き空ゐいまれゐある星のひかりゐまさゐさゐる去ら菊
去ぐれしゐとの四方ゑけしきさんとて庭ゐ出さるゐ色々の菊の露をふびてさと打薫るを
うへりきたるゐめもはゐちゲさく面白ゐ見れゲよめる

我やどの蓬ゐまじる去ら菊をいとゐやよそゐ思ひゐるゐゐ
いづををゐ哀といはむ色ゐとゐゐのゐひかりをきする村菊
ゐゐおとも人ゐゐくれし我宿い秋のくれゐぞ菊もさきゐる

紅葉　まづそむる谷の小柴を去をりゐてゐや山深き紅葉をぞとふ
染はてぬ程ゐをきばやもきぢ葉の千入を待さゲ散もこそすれ

寛政六年の秋ゐやありゐん木葉のいとこく染たるをきて

言の葉をそめんきのえの寅ゐれど口ゐれぬみいいふうひもゐし

心性寺ゐ詣づるゐ白川山をきて

秋山の薄霧ごもりむら〳〵ゐそむるもきぢの色ゐきてきゆ

南山の秋をのそきて

夕日さき尾上の松の去さ紅葉そめきゲ知らじ遠きよそめゐ

さゲ山の紅葉見ゐまゐりて

もみぢ葉の千しゐ社上の一しゐをそふるい松の緑ゐりゐり
人のもきぢを折きてもてきたゐるをむねみつが見て　道遠きこきてもくべきもきぢ葉
を君ゐきせんと枝ゐゲらこそとよめるゐゐへし

我さめゐ此一枝を折りてこしこいろの色いききぞきせゐる

はじもみぢ　はじ紅葉薄きはいそゐ交れば弥てさち枝の色こかるらん

柿　去ぐきてもうきき柿を白露のひとしゐぞめとふもひゐる哉

紅葉　霜　ふのが色もはてい紅葉ゐそめられてうき紅ゐにゐふゐさ霜

霜園紅葉多　古さといそのいい山ゲき蔦楓そめもれこさぬ去ものひとゐろ

谷川のもきぢ社ちるかさゐける人のよませしゐ

もきぢ葉を風と水とゐまゐせ置てきる人ぞゐき山ゐげの秋

紅葉盛　とへのしゐ染盛していい花よりもゐろき紅葉の露のさゐりを

松間紅葉　薄ゐれど松ゐいゐらぬ秋の色を木間ゐきせて染るゐきぢ葉

江紅葉　山陰やゐゐよりも濃き江の水ゐ色染まぜてうつるもきぢ葉

法輪寺ゐまうでて歸さゐさし舟をまつゐど

ゐさし舟去ばしと松の陰ゐゐて波よる岸のもきぢをぞきる

立田の山川を人のをるゝ

四方山の秋をうつしてから錦たつさゝゐごのいろも殘らず

長月末つゝさ時雨ふをくらしさるゝ

立田姫秋の別のおゝをだもやをぐれとなりて木々をそむらむ

小倉山の紅葉を紙ゝおして歌よませさるゝ

夕月夜小倉の山路くれぬとて袖ゝこき入しもゝち葉やこれ

南の林の中ゝあまさのうゝゐ子どもかしましくくるをゝて

栗もゑみ柿も色づきうゝゐらがはこらしげゝる時もきゝゝり

稽田を　苅れる田ゝ生ふるひつちゝ我なれやゝゝ出る事もゝくて枯ぬる

風ふきゝれていとさむさ夕べ

打をぐも木の葉をだれて悲しきゝ冬ちゝくゝる秋の山ざと

故郷秋闌

きり〳〵す鳴よる壁もゝれはてゝたのむ陰ゝき秋はふる里

九月末つゝたいと寒ゝりゝれゝ風のくれゝゝおどもとて

吹ゝおろも嵐をさむをまだきより冬ゝまへゝる秋のやまざと

秋のくるゝを惜しをて

暮てゆく秋のゝさをゝゝ消殘る霜のゝきゝゝのをゝこそ有々也

暮秋聞雁

旅ゝして秋もくれぬと鳴ゝゝさる雁のゝをだや打をぐるらむ

長月廿四日のゝゝしさ西山ゝ雪のをゆるゝ

老らくのゝゝさでの高ぬ雪白し暮ゝへぬ秋ゝふゆやたつらむ

秋徐暮

日ゝそひて近づく秋の別ちもよゝ〳〵やそき月ゝこそしれ

長月廿九日といふゝ秋ゝくれぬ紅葉ゝゝかば染のこせり

水鳥のゝさち此急ぎゝた也もれて秋や紅葉をそめさしゝゝむ

九月盡

長づきの名ゝ立つ秋もつきぬるを惜む心のゝどのこるらん

初秋の頃方俊より近江此茄子ゝ添て世中をまぐ飽果を秋茄子捨兼しみを哀とゝ見よと言ゝ

ゝせさる返し

今よりの秋ゝゝふをの畑ゝをびゝり榮ゆべき君ゝやゝゝらぬ

夏より久しく日てりつゝきてこのゝさりすべて井の水もゝれぬをゝゝのゞをしをたしき

ゝさゝこひもとめて日を送りゝる頃

蟹の汲む藻汐ゝゝあらぬ井の水もゝをてゞ辛き世を知らせゝる

同じ頃萩の盛ゝるゝ月のさやゝゝる夕べ

まち〳〵て萩咲く頃の月ゐざゐろへても雨をゐもふ秋ろゐ

此ゐろりのをとこをうゐゐのゞどちつどひていろゝせましゐどいふを聞々ゞむねつぶる

土さけて照る日ゐ濡し民の袖ろゐくばろりの雨もふちゐむ

秋のはてゐ田夫ゝ鳥ゐふ暇ゐしといひゝさるをたゝくとて

小鳥ゐふなるこゝ細ゐ手をかゞて竹のは山の夕日をぞゝる

涌道上人歌ふくて田もる庵ゐり

もる人の衣手いろゐのり殘ゝ山田ゝふしねゝもむゝぶゐり

有明ゝ月ゐふしねもる庵のゐるこを風の吹しきたるろゝ

有明ゐ守るふくて田の露もさぞ霜とゐるゐの風ゝぞきろげ

信美ゞ上田秋成ともゐひきて初て逢ゝるゐ經亮ゝきゐひねて箏和琴搔ゐはせゝるを聞て

秋成　山里ゝ松ゝ二木の聲ゐひて秋のゝらべいきくべのりゞりとよめるろへし

山ろゞの二木ゝ松のゐきの聲ひとゐきろるゝ時もまちゞり

鹿のゐとゐるゐ紅葉のちりゝるろけるゐ

此秋もふけて歸らぬ跡ゝれゞ我さへねゐぞゐきぬべらゐる

古人のよめる詞を題ゐてよみゞる秋の歌の中ゐ

一年ゐ二ゝびゆろぬ久方ゝわめのろはちぞゐゝつゐゆめ

日暮るれゞ打ぬる萩をよもゝゞら露ゝふきゐて恨むべらゝ

八千草の秋の野分の風ゝまをいのちとゝのむ露もはろなし

はら〳〵と落る涙ゐ似たりゞり朝風ゝゝるかしは木のつゆ

露ゝゞきよもぎゞ原を詠めつゝ消ゐん後の夕べをぞゐもふ

袖ゐてそ泪ゝふつれ鳴く鳩のこもりおゐきく秋のゆふぐれ

女郎花ゝゐぺし折てもていゐん人のゝんゝもねゝくし思へゞ

月をめゞ雲ゝ遙ゐとぶ雁ぞよめゐもさやゐゐゝぞみえゞる

いろでかと思ひし秋の長雨ゝ晴てはつよのつきをこそゝれ

露寒きくさゝ上白く影ゝちてみゐきゞ原ゐつきぞかゝぶく

ふけぬとも夜越ゐこえん雲晴て名ゐふふ月のさやの中やま

ひら山の嶺ゝふし松心あれやゐまちの月をゝちゐゞらゝつ

花ゝ猶そのよの秋のさゞの野ゐ萩ゐそびせし友ぞのゐらぬ

ゐひはりゝ神田の早稻をゐやしゝて〻今年の初ゐ奉りてむ

秋ふろく成ゐゞる哉せき入ゝし川田のゐくて霜むゝぶゐり

八束やのうぶき渡りて賤のをゞさのをゆさうゝをゆる秋哉
秋さむをまゞきゝ霜やふる里の初もをぢ葉も色このりのり
てる月に雲うゝる夜ゝてひゑびぬ花ゝうさきといひし嵐も
驚ゝとぶ麓の霧ゝひとゝおびき吹くうゝゑをゆるをちの川かぜ
稲ぢらゝをだく雀ゝはゞくれてまれゝゝこれる穂をや爭ふ
さゝばさのゝくる朝の初嵐さゞきぬ〳〵の身ゝをぬらん
嵯峨野　月ゝ今をぐらゝ山ゝ影落てさゞ野のむしのこゑぞのこる
名所岡　波よをる渚の岡ゝはゝをゝきゝゝき名をさて〻秋うぜぞふく
竹田里　秋のよゝ伏見の夢もさむるまで竹田の里ゝうつころもうゝ
栗栖野　草ゝ糸たれくるをものゝ打はへて秋ゝく露をたまゝぬくらむ
藤井原　をけをびぬふちゝゝ原の大をかどふりて幾世の秋のゝら露
檀岡　引つをていざまとゝゝせん物ゝふのま弓の岡べ紅葉しぬべし
高野　秋風ゝよや寒からし鹿のゝねゝふけて高の〻かさゝきこゆる
大島峯　立めぐる麓の霧ゝ海ゝ似てゝゝをしまをゝねの名こそかくをゝね
御階島　白妙の尾花や川のみゝ上ゝゝきのたむくるをてぐらのゝま

安濃　をゝ風のゝの〻湊田吹くゝゝべにゝゝををうさよりゝゝびく秋霧
三香野橋　あはれゝゝる老の身うゝゝ橋ばしら立つ月毎ゝふり増りつ〻
桂潟　あま人ゝをるともをえを桂潟かさぶく月のうげゝをぞすむ
玉川　うづら鳴く野ぢの秋萩ちり過てひうりかくるゝたま川の水
宇良古山　松うゝゝゝそむる紅葉ゝからゝゝの山ゝ名ゝゝひゝゝうりゝ
衣崎　ふきまよふ衣ぢ崎の秋風ゝたちもつゝうぬゝをゝゝうきゝり
曾登濱　都ゝて聞しよりけゝ悲しきゝ秋ゝつころのそとのはまうぜ
戸絶橋　波ゝしく影のとゞえとゝりゝりよ渡る月を橋ゝへだて〻
有明浦　波遠くかさぶくまをに志らむ夜の月ゝげをしき有ゝけの浦
神南備山　ちはや振神ゝび山の榊葉をいうゝせんとうち志ぐるらむ
長田村　行末の長田の稲ゝかり積てゆさうゝる世のゝどをこそ志を
長尾村　八束ゝの長をの村の秋をさめさのをゝうる御世ぞ樂しき
假寐岡　つゆのまも夢やゝむすぶ草枕うりゝの岡のまつゝゝあきうぜ
衣浦　秋寒ところもの浦ゝ立つ波をいくへう風のたゝみよをらむ
味鎌　照る月にゝゝぢれぬらし味鎌の鹽つをさしてよ舟こぐをゆ

西山はまうりさましは何とういひなる山川のうあさにかもうあるいやりの有し誰とふと
しもとえぞ垣根などいいとをうしうゑつらひて菊なども咲亂れさるもまゝほしげあれば
うらやまし竹のあみ戸の明くれもよを假初はもゑあせる宿
秋山のうもさもこきも年々ふあじ色あるをかもひて
萬代をうけて思へば秋ごとの紅葉はいろどときはありける

冬歌

冬たちて風のあらましくふくは
松はふく風も嵐はありはりきさ窓ふるげふゆでもとせむ
日は〳〵寒くあをば
朝毎はあらす硯のすゑやうは手はうちさむき冬い來はなり
冬のはじめゑぐをを
冬もきぬさてや今年もはつ村雨はざはふりぬる身はぞ驚く
曉ゲさ時雨をきゝて
はれ世はふる程もあき曉の老はねざめをとふゑぐれうあ

夕　時　雨　冬は日のはどあき空は幾度うゝふもゑぐれてくるゝ山かゞ
ゑぐるゝ音するに見あぐれば夕日さしさり
ゑぐれつる雲い殘らで夕日さもまやの軒端はゑづく落つ也
閨　時　雨　さよ時雨板やは軒端ふりもぎぬ又たゞ夢うかどろうもらむ
月前時雨　てる月にさはらで降るい久方は桂のつゆやあぜはゑぐるゝ
月やどるかや屋ゲ軒の玉水はかとせでもぎし時雨をぞ知る
杜　時　雨　ふきさそふ風はあびきてゆく雲の浮さの森や今ゑぐるらむ
十月紅葉　神は月もゑづる木々い時雨はやあつらへつゝて秋のいはゝむ
此秋い見ざりし木々のうら錦ふゆさちてこそ織りつくしけれ
深山葉殘　山風のさえずたづぬる秋の葉を檜原ゲくもは殘してぞ
宮の仰言はて神無月の題は松はびきて風はげしく薄紅葉は殘れるうさ
吹ゑをる松風早し染のこすはきの木は葉もさてやちりはむ
落　葉　ふきふろす磯山かぜを追手はて出る千船や木々のもゑち葉
さもこそい嵐の風のさそふらめ時雨はだはもちるもゑち哉
落葉埋菊　散るまゝは垣ねの花い埋もれてこのはぞ菊は香は匂ひぬる

夕落葉　ふきさそふ紅葉の色は暮はてゝ軒端に殘る木がらしのこゑ

落葉混雨　神な月木のは亂れてふるさとはわきて時雨の音もきこえず

山路落葉　山かげは木々の落葉に埋もれて雪よりさきにみちぞ絶ぬる

林葉不殘　冬のきて風のはやしと成しより秋の色葉はつゆものこらぬ

太秦にすみつきたるはじめぞさも二三人侍りたるがいとひろくあれたる寺の秋になりて物さびしく今又冬のはじめなればおゝかしこより吹とよむ嵐の聲絶間なくよるは何となき物音ひし／＼としてすごき所なれば皆えさらぬことつくり出わりなきかごとまうけとさまかうさまにいひはてゝ今は姪のおむな一人殘り水くみ木葉をあつめてたふの煙をたつる侘しなどは世の常のことなりかしあつめたる木葉も今日のたき木には猶あまりたるを見てあすのたき木の嵐をぞまつといひし山住はいとにぎはしきたぐひにこそ有けめなどやゝゑまれて京なる人のもとにいひやりし

思ひやれ嵐をまたぬ落葉さへたふのたき木にあまる住處を

十月十日ばかりいたく寒かりければ火爐を開き四方に帳をたれてをりひねもす風さはにあれて暮つかたしぐれたり

よるのまて雪にやならん夕嵐松ふきしをりしぐれきにたり

布淑がもとよりたよりに　都にも霜さむくなる此ごろのおきふしさぞなうづまさの里といひおこせしかへしに此山住もなれはまさらで今年は寒さも殊になおぼゆればとかきて

おく霜はこぞも今年も變らじを冴とみる身やふり増るらむ

寒きあしたに雀のかしましく鳴くに

むれきてや朝餌爭そふ霜さむき庭の垣根にせゝめしばなく

寒苦鳥のこゝろをさへ思ひやる

日にゆるぶ老の眠は霜とくる軒のしづくぞおどろかしつる

霜

ふりそひて殘る色なきくろ髪にみしやいづれの秋のはつ霜

しものあしたに

夜を寒みねての朝々にながむれば初しも白しみづぐきの岡

霜深きあした

日かげさすかたへは消て軒高き屋かげに殘る霜のさむけさ

見し秋のちぐさを何に思ひけんしもを花なる野邊の冬がれ

朝　霜

しらみゆく垣ねの野べをみ渡せば雪もやふるとまがふ朝霜

朝なさな藪やの軒の畑にもなほきえがてにしもぞのこれる

ある人菊を折ておくりしに

朝寒きしもを拂ひて手をりおし菊ぞおゝろの色はみせける

殘菊　うゑおほしうつろふ菊ゐ月さえて琴のねゐをる宿の木がらし
咲く花ゐかくれて染しこの葉さへちりしく庭ゐ殘るきく哉
冬はじめいさくうつろへる菊をそて
おく霜ゐ移ろひはてし菊をれば久しのれとも身をば思はぢ
菊の雪おもげゐいさゞけるをそて
紅ゐにはふゐうへの白雪をのおれるきくのまがきゐぞそる
風いやましゐはげしき朝をばおのちるを見て
足びきの山さむゐれや散そだる風の尾花もゆきとそゆらむ
寒草少　かつ殘る緑もはゐおの冬くさのゐはがれ枯葉ゐ去もをへだてゝ
寒艸藏水　去をれふも蘆の枯葉ゐ埋もれてもむとも見えぬこやの池水
寒蘆　おく霜ゐ一よ二夜とそる〻中ゐのこる色おきゐしの冬がれ
寒蘆滿江　おゐは江ゐをれふも蘆ゐ埋もれて波も枯葉の色ゐこそたて
湊寒蘆　湊江ゐさはもる蘆も枯ふせばやゞて小舟ゐこぎ去ゐれつゝ
氷始結　夏ゞゐも涼しゐりつる山陰は去そこゞよりこそこゐり初ゐれ
水結氷　ふゆ寒み今ゐこゐらぬ水もおしたきつひゞきや山ゐぜの聲

池水氷滿　昨日までとち殘したる池水のそ中もゐさいこゐりはてゐり

神無月はじめつかたの慈照寺ゐ遊びて月を見て

落葉して月は色のそそろゐねはうておさびさるよるの木枯
冬月　夜を寒そ霜やふるらんてる月のさやゐき影のうも曇りぬる
曉千鳥を　川波の氷ゐむせぶゐうつきゐちどもそのこゑゐたゐく聞ゆる
津千鳥　よる波のゑきつの千鳥群さてど猶こりもまにおりゐてぞ鳴く
磯千鳥　こゆるぎのいそぎてさてど村千鳥浪のゐとゐぞ聲ゐ聞ゆる
潟千鳥　冬の夜の月ゐげふけてひく汐の遠つひゐさゐ千鳥おくなり
水鳥　水とゐはつばさの霜を拂ふまにうきねの床やゐつ氷るらむ
鳴とりのおのゞ名ゐおふふ河水ゐすそて幾よをおれし浮ねぞ
池水鳥　くゞゐちる氷とそえてそづ鳥の羽ゐぜゐさそぐ池の月ゐげ
夕網代　川上の山はゐげよりくれそめてゐじろの霧ゐ匂ふゐゝり火
去も月　霜さえてふえのね高し雲の上の豐のあゐりや今宵おるらむ
冬至ゐよめる　春のけは土ゐきざもといふ日よりさらゐはゞしき木枯の風
冬夜　冴とゐる鐘はひゝきゐ閨の戸の霜ゐおる夜の氣色をぞ思ふ

山家冬夜　山里ハ竹のものこえ下さえてふしぞのねぬる冬のよあ〳〵

冬夜難明　村時雨幾度きゝバふゆの夜のつれなき閨のひまをらむべき

冬夜長　よひのまに時雨霰ハきのふゝとたどるばゝりに冬の夜長さ

寒夜重衾　重ぬれど麻で小衾をたさえて霜夜おゆるわさで小ぶもま

太秦わていとさむき夜狐のおくを

月くらく霰をゝされてふる寺の寒きこのきねハきつねおくおり

寒覺霰　降るとをしねやに霰ハ夢おれやさむるまくらハ音も殘らを

屋上霰　ふりをゝる板やの軒にくちめわハをばし霰のたまハ殘れる

いさく霰の降る日女どもの多くゆくわ

わぎも子ゞ赤も裾ひく道とてや風もあられの玉ををくらん

雪夕殘鴈　故さとを別をおさをやおくをゝん夕べに雪ハわさる雁おね

初雪のふりぬるわしさ

身ハつもる老ハ忘れて年々ハめづらしとをるハはのはつ雪

紅葉のまゞ殘れるハ雪深くふりたるゞ珍らしゝれバ澄月のゞりやらんとて

君ハをるや紅葉ハ降をる初雪の埋むばゝりのあとぞおがえぬ

と思ひさるに人おまさるさてまぎれぬ又の日もはと事をげくて過ぬ三日へさるほしさ

おごりおく雪ハ消々り積りたる言の葉ばゝりゝさも殘りて

とおんいひ遣しゝるハ返し澄月もをち葉も殘る梢に初雪ハふりハし

をハも覺えざりゝり初雪ハ消ゝ殘らぬ朝風ハ花と散くる君ゞ言の葉

初雪にいとふゝく降さるわしさ

いとゝしく古木の松の枝されて雪ハをぐらき宿のあけぼの

西風ハ雪ふりて見るゞ中ハ若松の色ゝはるをを若かりゝる人のやゝ衰ろへゆくを思ふ

西風ハゆき横ぎりてをゝ松のおゝバをろくぞ早ふりハゝる

いやしきハふりくるハ

ふをわけて訪こん人も思ハえをつもらバ積れゝさのをら雪

雪にふをさる花した山里おて

花おらで花おるものハ朝日ゝげハやへる山の木々のをら雪

雪の降さる夕　降つもる雪ハうを雪まつ竹もをゝるゝやどの夕ぐれのいろ

よるかけて雪のふりくるおといとさやおりふけて音のきこえぬハ

さゝの葉ハふりしく音に聞えぬハ深くや成しよハのをら雪

遠山見えて近き林ゐ雪ゆいとふるうつもれるうさ

足引の山ゆさうねのいうゐらんまぢうきもりゐゆきの下草

雪うくとて　ふるき世をおもひ出ゑど軒の雪かくまで深き跡もすくなし

人をまつあしさ

降る雪ゐとへといいはでまちそばや人の心ゆ深さあさゝも

雨の夜ふけて寒のりゆれば

ふくる夜の軒ゆ雪のたえゆくゐ雨もや雪ゐふりうはるらむ

雪の歌の中ゐ

沖つ風雪吹きうくとそるがうちゐ晴てつもりの松ぞ靜々き

此頃ゐふりうくされてあうはざの山ゐ名のそや雪ゐ殘らむ

くろ髮のふりてかはらん色ぞとも去らでめでおし年々の雪

埋もれぬ道のひうりゐ去ら雪のふりても殘る跡ゐこそ去を

ふりつもるけさの光ゐ月花もおもひけされてむうふ去ら雪

朝　雪　山うげのねぐらを出るあさ鳥ゆはぶきゐこゆを木々の白雪

雪朝待友　けさゐまゞ踏ヨ々つべき山里の雪も友まつゐどにとゐおむ

雪の日友子ゞもとより　かきくらしふりぬる雪ゐ道さえて寂しさぞおゐ冬の山里うへし

雪のあしさゐ垣ね此野邊を見て人のもとへ

さびしさもあとこそおけれ道絶て人めも艸もうづまさの雪

里　雪　はれまおく日をふる雪ゐくれ竹のふしその里ゐ道や絶おむ

川　雪　ひともおゆくせをそせて埋まぬも中々雪のあやの河そゞ

見てぞ去る今朝の時雨ゐ川上のゆきつみそへて下も去ば舟

雪上淺深　ふきためし垣ねをそれば白雪の深さあさゝゐ風のまゐ〳〵

鳥翅拂雪　花とそし冬の林のゆきちらもとり此羽ぶきや春のやまうぜ

古木の松ゐ雪つもりて葉此ところ〳〵そえさるゐ

かゝれゞぞ千よをふる木の松の葉の綠の色此雪ゐきゆへる

山河の邊ゐ家ゐり深く雪のつもれるうゝさに

今よりゐ川音をのそ友として雪此去さゐぞはるをまさまし

雪此あしさ布淑ゞきて　さえとゆるよそぢあまりの身をつそておゆ老らくのゆきをこそ

とへといへるうへし

君も今、我ゐとふそておゝそぢのゆきつむ年の寒さをも知れ

澄月のもとより　いわしへわうへる心はおもけさ雪はふるえわさうせてやそる　とふ
ことゝいふさゝわ老のあとをのゝをしむわ似さる初雪は庭とあり〻るうへし

はわしへを去のぶの草も埋もれて雪のふる葉ぞいとゞ色おき
とひとはれめでおし方の跡をのゝ數へてぞふるけさの初雪

又のとし雪の日うれより　老のうずつもれる外ゝ跡もおしことしの雪やこぞのふることゝ
こぞをけさ思ひ出れど身の老ゝもまれてむうふ庭のゝち雪　見るゞごとゝやこの四方を
君がけさ我ものゞわ此庭の白雪うへし

これも亦積れゞ老のふることゝわめでじと思へど〻さの白雪
身に積る老を忘れて見る雪の消ゆくわこそわどろうれぬゝ
事足らぬやどわゝてるゝ山うゝてゝやこの雪の光おり〻り

澄月より　はうわふる庭は〻しきぞ夢のまわこぞのあとゝるけさのゝち雪うへし

ふり〳〵て消を爭ふ我のゝぞ去年わうれる〻さのゝち雪
去はもばうり此老僧ゞりやれる昔去さしかゞし人ゝをお消うせぬそのよはことをゝれわ
うゝらむと又雪わ催されて

二もとのまぎし昔ゝゝち雪のふりてゝゆるものちふひの松

君も我もともにきえおん跡ゝさゞ言葉の花う雪わさくべき
問うゝすあともはづうし窓の雪わつめ集めぬけぢめ別れて
うれよりうへし　二もとのすぎおゞ君や殘るらん我ぞふる河のべの白
雪　跡ゝさゞ言葉の道わふる雪もゝばしけぬまの花とおそゝれ　とひ
うゝも窓のゝ雪の花ざかり跡のゝぢめゝさもわらゞ花ゝ

盛子より　君ゝさゞ野山の雪をゝても猶言葉の花の色やゝふらんといひおおせしかへし

ふりわゝる身わゝあさらし君わこそ野山の雪ゝをゝべうり〻れ

鷹狩をよめる　狩くらし今ゝとうへる道のべは鳥たちわ鷹を又ゝゝせつる
あすもこん片野の眞柴ゝをりせよ飽ず暮ぬる〻ふのゝ狩ゝ
くれぬとて眞柴折しき汲む酒わやどるも寒きみうり野の月

野　鷹　狩　みうり人今やいる野の霜枯わゝざれてゝゆる袖のいろ〳〵

鷹狩欲暮　飽うゝいま二よりみより狩ゆうゞ鳥立もゝえずはべゝ暮おむ

連日鷹狩　をとつ日も昨日も野邊わ狩暮ぬわすゝ山路の鳥立たづねん

炭　竈　こと更わ烟りてゝゆる松山や炭やくをのゝわさまるらむ
絶まおき烟わゝる山人やおくとやくらんゝねのもゝゞま

冬此日の影程おしといひばりもゑやりるらんをの丶山人

埋火　ゑバしとて向ひしりさの埋火のわさりおがらに日を暮しつる

さしそへし炭も幾さび霜の色わさゆるよゑるきねやの埋火

爐火　かき起しはさ切くべよ埋火のわさりもさむきふゆの山ざと

うづゑ火の元ゑし友をかぞふれバ消のこゑるぞ少りりる

寒夜いさく更けて爐火栽ゑて

埋火の炭さへも夜のふけぬれバおきおが髪の色わこそおゑ

向爐火　疎からぬ友もかくやい向ふべきあ/さりを去らゑ馴るゝ埋火

佛名夜闌　西わおる月わ聞えて御佛のゑおのこゑおそたりくすゑぬれ

宮より題さびたゑし年中早梅を

暮てゆく年の心やいそぐらんはるもまだきわうめわふ也

柴垣の梅のさけるをゑて

おのれのゑ冬でもりせで霜枯の垣ゑばおくれわはふ梅お香

ゑはゑ梅此さけるをゑて

待つりん春いゑらねど梅が枝の花さくまでい永らへてゑつ

梅告春近　春近くおるをも知らぬ山住をおどろりしつるうめの初はお

としの暮がさ直方より梅わそへて　年の内わさきぬと人のおくりさる梅の初花ゑかちて

ぞやるとありけるかへし

君がえし梅をゑりてる心こそ色香此やりのいろりおりけれ

冬ぞさびしさ　秋くれて冬ぞさびしさ忘れりるみ雪ちりやひ梅りをるころ

冬　興　よもすがら舟さし下し月雪のひりり分るゝさりひをもゑむ

うゴまさにて年の暮がさふ庭の小笹りりそくとて

山里の垣ねの小笹かりそめわよ拔のがるとて年もくれぬる

おりたちて小笹かりそく燒鎌のとくこそりふわ年いくゑりれ

おなじころ惟德がとひきてりへるさわ　春いまたとひてさりり此花を見ん老木に知のげ

霜雪のころといへるりへし

霜雪のふる木も冬を知のぎおん今ひと春のはおもゑるべく

旅宿待春　積りそふおしぢの雪の中宿わけぬべき春をまつぞひさしき

年のくれわ一室をとひて

暮殘るりふし問いずバもろ共わ今年此りゑを又やゑざらん

七十ぢ年のくれゐ

稀おりと聞もゝふのゑわすよりやわやしき年と人ゐいはれんう此年の暮ゐよめる

何事をおすともなくて七ゝへりめぐる卯年もまさ暮ゐゝり

老　送　年　老そひぬよも此春ゐおつゐとて秋もぎ年もまさくれぬめり

歳　暮　ゐのざかり惜みし事ゐおゐならず老ぢ數そふ年のわゝれぢ

年　欲　暮　程もおく春ゐやこえん年波の立もゝへらぬゑゑのまつやま

歳　暮　雪　春ゐ猶のこれことしの雪の山ゝひおく暮しおおりともをん

水　邊　歳　暮　ゆく水の歸らぬ年の名殘ゐゐおゑの去ゐのゑ身ゐぞ寄々る

河　歳　暮　早くとも暮ゆく年の川おらば去ゝがらみ渡しせゝましものを

爐　邊　惜　年　埋火ゐ炭さしそへんゝふのゑのとしの光ゐなゐゝつおまし

かき起しゐもひゝへせば埋火の消しゐにたる一とせのあと

都　鄙　歳　暮　都ゐもとまらぬ年ゐ稻しきの伏やといへどよはゐこそゆけ

除　夜　ふけゐゝる我よを添へて思ゐゑば年をのゑおそ惜ゑ明さめ

年くるゝ夜いとさおきむゝし春待ていもねざましおとを思ひ出て

春待つといもねざりつる我もゐれ夜もおおじよを惜む年哉

曉鐘を聞て　聲此うちゐ惜むことしゐつきはてゝ春ゐやおらん曉のゝね

こ此道ゐ志ゐおゝらざえおき身をかこちて冬此ころ

難波江や霜ゐをれ伏ゑ蘆の葉のゑ隱ゑおゝら朽やはてまし

やまひしさる朝ゐ初雪をそて

足引のやまひしをれば初雪の珍らしきさへゑゐぞ去ゑゝゝる

くるつおしさ雪ふゝくふりさるゐ

草も木も暖さかげおる雪おれどふりのゑ增る身ゐい寒々し

布淑ゞ桂ゐもめるゐど雪此歌五十首見せしゐ面白くおぼえしゐば卷の奥ゐゝきさゝりし

秋ゐそふゝつら此色とおもひしい雪をゑぬまの光おゝりゝり

心性寺ゐ奉る百首のうちゐ雪を

ゆきに身ゐ埋もれおゝら傳へこし御法の跡ぞよゝゐ殘れる

與子ゞ詠草ゐ　ふく山ゐ朽はてむ木もやく炭と成て此後ぞ里ゐ出ぬるとあるをそてをゝ

しさゐゝきそへし

やく炭と成てをやこゝを出ぬをばおげきのはてゝ歎びぞゝし

炭のゑゝを喜之ゞ歌こゝゝ

あゝねさす雲ゝ短ゝしひゝつゞむ炭ぞを冬のおがきよの友

除齋へ炭をゝくれりゝるつをめてゝれより　埋火のををつきゞゝき都ゝもゝもひをゝこを友ゝゝゝりゝをときゝえしゝへし

思ひやるゝひもおゝれど埋火のすをつきて猶久ゝませとぞ

ゑはす十五日ばゝり重愛ゞきて歌よみくるしとまうし侍をしゝばゝいことゝよめといふ

それおんよをいでゞたき由語るゝよをてゝくらんと契りしゞ十七日ゝや思ひいでしまゝ

年の暮おれゞいまいくゝばゝりかとて

かぞふれゞ今年も今ゝ十日ゝまり二日ゞゝりぞ暮殘りゝる

又こむ春ゝ老のゝをぞふべくゝもひて

むそぢ除り八といふ年ゝ一年を又やそへまし春のきゝらゞ

のこる日ゝいや少おくおれゞ

暮のこる日ゝを少おくおるまゝゝ年の惜さゝ彌まさりゝり

ゝしさゝつを戸軒おどゝ寒雲のたちこみゝるををて

うゞまさや凝ゝる雲の中ゝおどゝふまで我身消のこりゝん

古人のよめる詞を題ゝてよめる時の冬の歌に

夜を寒をめのを覺つゝ霜さやゞ竹の丸ねぞふしうかりゝる

霜の上ゝゝあられ亂をてゝあられぢの白綾しゝる庭のとぞをる

風そひてはどろ〳〵ゝふる雪ゝざゝぬゝ散れる花ゝとぞ思ふ

宵のをの雪ゝをれ木の松ゝきて冬のよふかき寒さゑのゞん

ゝふの日も夕波千烏音ゝ鳴てたちもゝへらぬ昔をぞゝもふ

ゆく年を今二日ばゝり惜むとも限とおらゞゝふゝのはらじ

檜　小　川　昨日こそみそゞをせしの風さゆるおらゝ小川ゝ氷ゝゝゝりゝ

眞　神　原　日ゝ暮ぬ雪ゝふりきぬ大口のまゞをゞ原をゝゝでをぎまし

戀　歌

戀のこゝろを　物思ふけはひやをえん我袖ゝさえぬおをざゝよし包むとも

初　戀　ゝふよりや人をこひぢゝまどふ覽ゝやしく袖の濡て乾ゝぬ

まゞ知らぬ思ひこそつけ是やをのこゞれ行べき始おらまし

思不言　戀　いひ初てつれなうらばとさりげなく包む思ぞいとゞ苦しき

忍　戀　世のうきゝ落る涙といひなして思ひのいろゝ猶ぞつゝまん

恐久　戀　打出ていづゝゝえんさゝれより成れる巖れ中のゝもひを

忍涙　戀　紅ゝそめてこそきめこひ衣さらばゝゝゝのいろやまゞふと

ゝのびさる中らひゝいとつらく見えゝれば

恐絶　戀　厭いるゝ我身を知らでつらゝらぬ人めをのゝもかこちゝる哉

聞　戀　ゝのびこしゝゞが中河いさえぬるをゝどゝ涙の下むせぶらん

聞聲　戀　ゝどやゝく隔つる人の衣の音をきゝて思のつまとゝもらむ

不見　戀　折てゝんよそゝれゝゝやゝ菊の花よし〳〵袖ゝ露ゝぬるとも

繼見　戀　隔つるゝうき物でし聲をしも又もやきくと立ぞやゝらふ

白地　戀　我ゝゞらゝやしやいつの契とてゝぬ面影の身ゝゝそふらん

通書　戀　はのゝえし軒のいよゝの透影ゝ心ゝかゝるゝそゞれのやど

行ゝりの袖ゝゝばゝり身ゝゝみて思ふゝいつの契ゝるらん

つらくゝも人めを恐ぶ玉章ゝくゞくこゝろの程ゝゝちゝん

逢ふゝゝどよゝゝゝがちゝる水莖の通ふばゝりをゝの契ゝて

失返事　戀　ちらさじと忍ぶ餘ゝゝもわゝでゝきまゞへゝる露の玉づさ

ゝるよの夢にゝゝらひゝる女ゝゝもとより文もてきゝれりゝれば久しうゝとづれざりゝる

ことよゝどゝりうちゝどろゝれてめさめぬればはやゝ身まゝりにゝる人ゝゝんゝりける

ゝる文ゝ我ゝこゝりをゝどろけばゝゝで別れし古へのゆめ

尋　戀　よそゝゞら問べゝりゝゝ憂人のゝづぬときゝばゝ猶や隱れん

祈　戀　逢せをやゝらゝ祈らん戀せじのゝそぎいうゝぬゝもの瑞垣

祈難逢　戀　祈りこし神のゝしめい朽ゆゝど解べくもゝき人のつれゝゝき

契少人　戀　いはけゝき心ゝゞゝも忘るゝよゝゝひゝき遠く契ることの葉

契待　戀　必ゝと頼めしゝゝふの暮ゝれどゝはれぬ程いいゝゝゝゞ思ふ

くちかたむ　偽りゝきゝゝゝるゝも武隈のまつをもゝきゝと人ゝかゝるゝ

不憑　戀　たび〳〵のうき偽ゝゝらいゝゝば頼ゝぞせまし人のことよゝき

憑媒　戀　ゝれもゝき人も哀ときくばゝりゝゝゝとそへていひ靡けてよ

失媒　戀　楫をたえ便ゝゞゝれ佗ぬといゝで知らせん

不逢　戀　先の世ゝいゝゝむをべる契とてかくとけ難きゝゝの下ひも

偽　戀　言よきいまことすくゝき心とも思ひゝへゝで頼ゝしも憂し

待　戀　訪こぬを習ふおしてよひ〳〵わさはるかごとも今ハ聞えぢ
待くらすまの　あハでふる年月よりも契り置て待くらもまの久しきやおぞ
空閨殘燭夜　まつ夜半のむおしき閨の灯をゝげとおるゑわいつ迄ゝをん
逢ふ夜ハ今宵　待つゝし君ハゝへさじたまさゝわ逢よハてよひ明はてぬとも
ふさりをぢ　まどろまじ日頃ぢ憂さを夢にゑバ二人ぬるよのゝひやおゝらん
初　逢　戀　うつゝとも思ひぞ分かぬ夢にさへ憂かりし人わとけて逢よハ
忍　逢　戀　忍ぶぢバふけて逢ふ夜ぢ程おきわいそぐ別を添へて悲しき
夢　逢　戀　つれもなきうつゝわうへもさよ衣重ぬとゑしや思ひねの夢
逢　增　戀　つらしともかこつ方おく打とけて逢ゑし後ぞ戀ハそひぬる
歸　惜　別　戀　わりおしやうきハ逢夜も身をさらでまざきわ惜むきぬ〳〵の空
曉　別　戀　ゆふつゝぢとりとめ難き別ゝなゑらむハ月にかおちよせても
悲離戀といふことを
忘るおようけ離るとも山の井の淺からざりし中のちぎりを
といまらぢ　とまらぬも強てうらゑず名殘おくたえもやせんの心弱さわ
從門歸戀　思はずよさしも頼めし松の門あけぬよながら歸るべしとハ

後　朝　戀　暮をさわたのめざりせバおきてこし露の命ハ何わかハらん
後朝切戀　暮おバと契りおきつる朝露のひるまを何わかけてさへまし
逢不遇戀　さりげおくもて離れぬるつらさ哉ゑしハ夢かとたどるバこのりわ
歎無名戀　まざきより立名わ人の言よせていとゝつれおく成ゆくぞうき
老ぢのち人の名たてけるわ
ぬれ衣ハ猶ゝけ添へよそれわざわふりそふ老の涙ゝくさむ
顯　戀　人まざにゆるさぬ物をヒゲ袖の涙のおどゝよにハ洩ぢゝん
人わゑらるゝ　我思ひつゝめバつゝむけはひより中々人わゑられそめぬる
おもゝげハ　面かげハゑわそふゝひもおゝゝゝり心のゝよふ契おらねバ
切　戀　消ぬべき露の命よまて逢ばしわふわゝへんと思ひこし身ぞ
厭ふわはゆる　かくばゝり厭ふわはゆるおひおれバ思ふといひて試ゑよ君
悔　戀　悔しくも恨みつるゝおの名殘おく絶てのうさも思ひのへさで
變　戀　今ハさゝ袖こぢ浪を形見わて頼めしぢゑのまつこともおし
臨期變詞戀　聞くもうし今訪ひくやと待つ暮の音づれゝへて障るたよりハ
戀　心　ゑられじと心をさめし人めさへ今ハいとはぬまでぞ戀しき

戀催意　戀ゆゑに心ぞちゞに碎くゝとせばのくせば逢もまるやと
寒鴈添戀　冴とやる霜夜の雁の聲ゐ猶うさねぬそでのこゝろをぞそふ
鳩の鳴を聞て　ゝ夕まぐれ妻よぶ鳩よつれもなき人のゐさりに聲たてゝなけ
負戀　つれなくばまさじ今ゐのこゝろゐもまゝて戀しき夕暮の空
久戀　こひ〳〵て心ゐつもる年月をなゑゞゐ玄ゑて色ゐいでぬる
舊戀　我をのみふるしはつれど石上珍らしげなきひとのつれなさ
遠戀　海山のへゞてを中のかゞとゐて通ひしふゑの道もたえぬる
二夜隔てたる　ときのまも覺束なきをもしや君今宵とゐゑば三夜や隔てん
隔海路戀　隔てきてからくも鹽のやゆ汐ぢのをちゐやつらき人を忍ばむ
卜戀　逢ふ事のうたきをつぐる石神のまさしきうらゐ問うひもなし
かさおひ　我戀ゐ苅りそゐよするかさし貝思ひくゞけどあふ由もなし
思　ゐる戀ゐくるしき物と玄りぬとも猶うき人ゐゑれを思はじ
下にのゑくゆる思ひの苦しさを何ゐつけてう人ゐ見えまし
つまおさをかこつ涙の水ゐしも消ぬぞむね此思ひおりゝる
ゐおきおもひ　身をこがゑ類おるべきふじのねも人をゐもひの烟とやきく

誰識相念心　諸ともに思ふが中ゐちはや振神おらずしてたれう玄るべき
被忘戀　忘るゝうさらば忘ゑもはてゑして何おう〳〵ゐ此こる面影
ゑゑらるゝ身を今更ゐおゐゐく哉ゐふゐうふべき命おりしを
恨戀　ことわりと聞もおされぬ物ゆゑゐ恨ゑしさへぞ今ゐ悔しき
うらみ　葛の葉此うらゑぞたえぬゐゞ人の心ゐゐき此風さちしより
心中恨戀　つらくとも、ことゐ出ていいはじたゝ恨はつべき契おらぬを
披書恨戀　ゑれゞまさ恨を添へて濱千鳥つれおき跡にねこそおうるれ
戀天象　つゑおさいいつを果とも白雲のうはの空おる眺めのゑして
六帖題おてよみゝる中ゐ夕づく夜を
我戀ゐまつ此葉でしの夕月夜ゐ不つうおくてやゑぬべき哉
我せおゑゑせこが衣やつれぬ七ばうり織てきすべき白いとものがな
春恨戀　うつり行く人ゐ恨のおやゞそふはおいことしも同じ色香ゐ
夏忍戀　打玄のびゑゑぞねゐ鳴く時鳥まつをうゞとに更くるよの空
旅戀　思ひやれあまたゝびねし此夜の袖うさねし折も乾きやゐせし
古人のよみさる詞をよゑ入れ侍る戀此ちう

ひく汐のあるとの海の荒浪のよるといもれど遠ざうりつゝ
花をると人ゐいひてたをやめは裳引の姿あらためもせを
戀うねて言のあぐさゐ世の中をうしといふをぞ口馴ゐゝる
上つけのさはゝくゝゐち月立て待らん妹をいつゆきてをん
いうさまゐことはうりせゞつれあくて絶と絶ゐし人ゐ訪れん
ふゝめをし花はちる迄といれねゞ身を鶯のねゐぞあうるゝ
かくばうりつれあき人の戀しきい何のいはれと云る由もゞあ
よしきえね命の玉はありうずゐ人の思はぬつゆの身あれゞ
人をゑゞ思ふ心ゐゆゞされて忘らるゝをも知らをさりける
まけいせで命やゐえむつれあさゐをまひてこふる力合せい
憂くつらき妹ゞかくせる文とりてせめていいうで脇をかゝせん
あふ事のうゐかけ舟ゐ乘りつをゞ打こす波ゐ袖ぬらしつゝ
人を思ふ心い常ゐくもり日のめゐをぬ影のをゐ添ふもうし
ゐふことの泪ゐくもる秋の月それもをしよの影いとゞめを
寒くあるよの秋よりも人心ゐらしのうぜぞをゐいををなる

雲ゐよを　天雲のよそにあびくとをてしより浮て物思ふ身とぞ成ぬる
見るゝも薄らぐ雲の中空ゐむあしくあらむ契をぞふもふ
煙ゐよを　よそゐだゐ靡うざりせゞ藻鹽火の烟ゐ胸のかくいむせゞじ
火ゐよを　とこといゐ有といをせぬ石の火を打出ていつう人ゐ知らせん
杣ゐよを　戀ゐ名をくさしやはてん忘らるゝをの杣木のこりも果あで
坂ゐよを　我思ひあるとしきうゞ瓜生坂日ゐやちさびもゐり登りあん
橋ゐよを　末終ゐさえもやをらん岩橋のよをもとゐさぬ中のちぎりい
絶ぬべき人の心のうきはしゐあゐて悔しきよゝはうねでと
信濃あるきそぢの橋も何あらずあやふき中にうゝる思ひい
水ゐよを　結び置しちぎりをさへや忘水うげざゐをえを人のありもく
池ゐよを　ふもへども仇ゐいはれの池あれゞ深き心をえしも洩らさを
沼ゐよを　とはぬまのうきゐ馴さる艸あれゞうつをあがらも猶ぞ露々き
川ゐよを　人いよし流をてとだゐいをとも山城川のやまじとぞ思ふ
湊ゐよを　我中いうはるをぞ待つ飛鳥川あをざはふちも人のうきせも
つゝめ猶袖の湊ゐよる波のたちのへるべきうき名あらぬを

島ゐよも　立よりていつゝ手をらん陸奥のまがきは島のあでしこの花
潟ゐよも　かり初のミるめも今ハ遠干潟ゝさしや波のよるはちぎりハ
岸ゐよも　忘艸かふてふものを住吉のきしもやするとまつどはゝおき
田ゐよも　うき中ハ驚ゝもとも小山田のひさもらゐこそ忘れゆくらめ
都ゐよも　人を猶思ふこゝろの長岡やふるきミやことふるさるゝ身ゐ
庵ゐよも　人とはぬ我身をよそゐおしてミバ秋果てがさの小田の仮庵
井ゐよも　山のゐは心ハゝねて汲あゞら深くたのミしミづゝらぞうき
閨ゐよも　かぎ〳〵ゐたのめて年を古郷の軒の板まのあハで朽ちめや
草ゐよも　人ハ今のきばゐもゞくさゝ蟹のいとたのミおき中の秋ゝぜ
萍ゐよも　露ばゝり哀ハゝけよ根おし草誰もかりおる世ゐもまふ身ぞ
木ゐよも　おどやゝく深くハゐふもふ萍はねざしとむべき契りおらぬを
槍ゐよも　千年ふる松おらバおそゐはでのミ去ゞる歎も末をたのまめ
紅葉ゐよも　つげねどもやくる槍原を逢ふ事の歎の果とよそゐざゐみよ
柚木ゐよも　染てこそ顯れゐゝれゐゞ袖よ秋のこは葉のいろゐおらふゐ
　　此まゝゐ朽ゝも果んひきさして打ふゝれぬるミをの柚木ハ

鹽木ゐよも　恨ても海士のこゝり積む藻汐木のこりずゞ人を思ひこゞるゝ
鳥ゐよも　おきてふる音ゐ顯れて村とりの立ゐし我名たれゐうおさん
鴈ゐよも　うき中ハ秋霧ゞくれなく鴈の聲はミきゝてミるよしもおし
虫ゐよも　あこゞるゝ胸は思ひやよひ〳〵に螢ともえて人ゐミゆらん
　　いとハもて絶ぬる中ハさゝゞゐは又かきつゝん頼ゞゐおし
玉ゐよも　ゐゞ袖のおミゞの玉をミてもゝれゝげき人めゐくだく心ハ
匣ゐよも　あけぬとてなど急ぎゝん玉くしげ二ゝびとゞゐ逢ハぬ契を
枕ゐよも　ゝきゝへの枕の塵をはらひつゝねしよの夢ハ又やミざらん
裳ゐよも　朝露ゐものもそぬらし妹ゞつむ野べの若菜ゐおらまし物を
衣ゐよも　から衣裾のわハもてねさる夜ハ身ゐ秋風のさむくこそふけ
綾ゐよも　おり立てきるとハなしゐ雲鳥の危ふき戀ゐ身をやゝつさん
紐ゐよも　下紐のゝるしもいゝで頼まゝし人のこゝろのとけぬ限りハ
硯ゐよも　我中ハ猶ゐふことやゝ難ゞらんもゝゞの石の世をつくもとも
筆ゐよも　わすれゆく人の心をとる筆ゐあハれとミえん墨つきもゞゐ
弓ゐよも　そり高き荒木の眞弓押ゞへし起ふしいつゝ手におらしミん

我方ゐよりもよらぬも乏らま弓心ひきをんつゐれまもゞゐ
扇ゐよも　手ゐ馴し扇の風もつゝべてよふるさるゝ身の秋のこゝろを
注連ゐよも　今よりゐかへりましそ通路ゐ乏りくめ繩を引はへぬゐり
車ゐよも　小車れうしやいつまでつゝもゐき人を思ひの家ゐもまゝし
網ゐよも　月日れをつもりの海人の浦ゐゐく網の一めもをでやをゐん
繩ゐよも　よりゐれで此よつきゐばたく繩の長きうらみや人ゐ殘らん
筏ゐよも　思ふせゐいつゐよらまし逢ことのなげきをくをて下も筏ゐ
籌ゐよも　覺つゐゐ何ゐゐゝりてゐゝを火の人のう川ゐもえ渡るらん
澪標ゐよも　いさやまゝ逢瀬もゐをれ澪標ゐふる乏るしゐ立名のをして
貝ゐよも　わをゞひのをゐゐきものゞ思へばやくゞく思も哀とゐをぬ
笭箐ゐよも　たのをしも憂しやゆゐる花ゞゝをめゐらぶ色ゐうつる心を
灯ゐよも　さりともとかゝげ盡して待つ夜半もむゐしく明る閨の燈火
名所ゐよも　防もてぬ人をいつ迄よそゐのをきくの濱ゐるまつ事ゐせん
まれゐきて今宵歸るの山ゐちばいつはゝ我を防んともちん
ふをゐよふ程ゐゝのめでけふも猶戀渡をとやいゐむやの橋

年をへて戀をするゞれゐあゝゐるいつといはゐん命ゐるまゐ
ゝのめつゝいつゐゐ人をまつ山の替らぬ陰をくれおとゐをん
あひをぬゐゝゝ一夜川年月をゐゝるばゐりゐ戀しきやゐぞ
矢　釣山　ものゝふの弓ゐ取そふ矢つり山いるよりまどふ戀の道ゐゐ
磐　手杜　人しをぬ袖の泪やふもふことといはでの杜のつゆとふくらん
粉　濱　まつ人のゐ濱ゐよをるかゝし貝をせばやゐゐで碎く思ひを
恨　山　入立て何ゐゐ人をうらみ山へゞつるゐゐゐひもゐらじを
會地關　はるゞしゐ年のを越て行末のいつゐふちとも知らぬ關ぢゐ
朽木橋　逢をしゐ絶ゐんはしを朽木ともをらでぞ世々を懸て契りし
道浦　つを深を道のうらに乏ゞむとも底のをるめゐ苅んとぞ思ふ
いはみのうを　角さゐふ石見の海の深をるのふゐくゐ思へどをる由もゐし
夢崎川　うつゝゐゐ猶ぞつれゐき戀々てゐゝるとをしや夢ゝきの川
家島　さても我戀しき波ゐゐゐねどもみまくぞやしき妹ゞいへ島
白鳥關　天ゞけける翼もがゐゐや白とりのせきとめらるゝ中もとふべく
加太浦　逢ふ事のゐゝの浦波ゝゐゐれゞ歸るゝゞとゐ袖ぞ乏やるゝ

他　等　濱　うらやまし安くや拾ふ人をとくわくらの濱の戀ゐをれがひ
子　難　海　君を思ふこゝろ此色ゝ紫のおがさのうゑのあさゐらめやゝ
挿　頭　山　ささそめゞ我ぞかざしの山櫻よそめゐをんと思ひやゝせし
人　妻　里　我あらぬ名のりをしてや月よゝし夜よしとはん人妻の里
戀　　川　こひ川ゐ身ゝ沈むとも水の泡の浮さる名をゞ世ゐゝ流さじ

雜　歌

天　此　はら　蘇迷路の山ゐゝ時のおゞればやゑそらの色の常ゐかゝらぬ
卯月ついたち日蝕せりはゐしへゝ此蝕をさま〳〵にいひゝるおとゐりげおれど天文をも
つばらにかうゞへゑる世とおりて今ゝいぶゐる人もなく成ぬと思ふゐつきて
天つ日ゐ月此ゐさおるこゝわりも明らけきよの光ゐゞ知る
晩　風　動　簾　くる人もおもひゐゞぬをうたて我こゝろ動ゐをもの夕風
うづまさゐをみし時軒ゐ高き松おりて風の音信をゐしきを
此宿の軒ばの松ゐことゝふやいづくの山のあらしおるらん
雲ゝるゝおの垣根より立此おるをゝて

とそゐのゑ思ひおれゐし白雲を今ゝ垣ね此も此とこそゑれ
雲有歸山情　我のゑや旅ゐうゐれん雲だゐも歸る山路ゐおもひたつおり
晴　　犬空も野山も雲のはれつきてみとゑる方ゞゑおみどりおる
山もとより雲の此おるゞ煙ゐまゐのひゐるゐ
雨はるゝ里の夕げの烟のとおもへゞくものは此おるおりゐり
くれつゐゐ月くもりてふしゐるよ雨此音のをれゞ
雨やいま降いでぬらん深き夜の軒ゐ去ゐゝる音きこゆおり
今のいへゐまりゐ雨もりゐれゞ政教はゐらひてふきゐのへゐるのち雨だりのおつるゐ
苔ゐのへしゐるやの軒の去ゐゝりゝ猶もるかとぞ驚おれぬる
連日の雨ゐて都のゐとり絶ゐれゞ
此ごろゝ川橋ゐえてちゐおゐら都ゝゐめのくものよそおる
橋　雨　旅人のゐゐゞく袂ゐゐめゑえて雲たちゐゐる木曾此ゐゐはし
遠嶂収殘雨　降ゐして晴ゐ行くをち此山此はゐ殘れる雲やいつのむら雨
ち　ゝり　やつの風六のちまゐを吹ゐびゐ人のこゝろ此塵ぞたちまふ
世のうゐよつもらゞ積ゐはて〳〵ゝ蓬ゐもとの塵ひちの身ゐ

かげろふ　有もものとそれば消ぬるかげろふやゐて我身は行方をゐ思ふ

曉　水のおとも松のあらしも月のげも曉がたゐをもみまさりける

あのつきのといふ句をはじめにをゐて

曉のねゐ覺ゐをゐどおいらくの耳ゐのねやうとくきこゆる

をのうさも月をしそれば慰をき闇こそよるのをびしかりゐれ

夜　はてもおくゐちのさおりて青海の波のをゐのさゐつゐく山々

山　ひんゐし山　月も日もいでくる山の麓ゐのおの〳〵影ゐおそくさしゐる

勝義ゐおづまへまのりゐる道の記をををるゐくさ〳〵をかしき事多かゐる中ゐのをめる

富士の曙は々しきいはんのさおくよくのきゐるゐのきそへゐはし

そ　をずもあらずをもせぬふじの面影をさおゐら寫を言のはの色

は　我のをや歎きおりつむ杣人のまさきの綱もくるしげゐをゆ

野　春秋の色どりかへてめゐをぬい雛の野べのゆふべあけゐの

野路　旅人やあゐさちくらん菅笠のをえかくをる野路の松ばら

關　のゐるべき道やいかゐきゐ世の中ゐとまる心や關とおるらん

寄水雜　雨はるゝ跡よりすみて山川のゐゐるも水のこゝろとい見ず

桂宮といふゐ太泰にありそゐの清水をいさらぬと名づくこれを汲て茶をゐるにいとよし

汲てしれ清くををぬる月の内のゐつらは宮のいさらぬの水

雨後西南の風ゐ川音は々をちこちに聞ゆるゐ

河音は々やくちゐくや聞ゆらんゐつら大井の風のまゐ〳〵

谷水音　幽　ひゐきくる松の嵐にうゐゐもれて絶まがちおる谷のをゐゐと

谷のこゝろや　山彦いをゐがよぶ聲のひゐきゐてたゐの心やつねゐむおしき

流水浸雲根　立つ雲は々うをきゐのさより岩ゐねゐ流るゝ水の苦ゐらふをゆ

瀧　水　白雲のさゐ引く山のさゐのねより落くるたきやゐまの川をゐ

養老瀧の下に人家ゐりゐきなゐむおゐりて打ゐどろきゐるさまをさり若き人ひさゐゐ物

いれてさしいゐしたるかさ人のよまするゐ

大君は々をゆきましゐるたゐの瀧老も若ゆといふをゐゐおれ

若狹の守宗直ゐ白河のゐとりゐ博士さちいゐおひてすゐをし折の歌からうるにゐのゐを

ものきおべてんさる歌一つとゐれど同じまとゐのつらゐてゐゐひゐえのものゝまゐれら

んいはとゐるはらいゐきをましておくれていいゐでと思へましゐどよしゐる翁のせちゐ

いへれゐをげゐうゐえいらへで日頃ふるゐゐれより　白河は々ろきを後と捨ゐゐでうゐ

べてをせよ瀧の言ぬ葉とく〳〵おどわり畫工の丹ぬのをつくしていろどるやうのことの葉ゐあらばこそをろきをのちとものべやらめおれいはさゝかも

思ひよるふしおきまゝに白河の瀧ぬいとこそ日頃へゐゐれ

かのこへるゐゐ

白河の清く聞えし波のをゐあらぬ藻くづとのきおくれつる

涌蓮上人のうける繪ゐ

山かげや江の水すごく澄む月ゐ誰ゐこゞれて夜舟こぐらん

山水の繪ゐ　水清く山のげうつるゐさりゐゐ心のちりもうのばざりゝり

河　おゞれていさらしおゞ川と思いをば世ぬうきせをばいので渡らん

河水流清　山河の一つをおもと清々れば千々ぬおゞれの末もゐゞらを

嶮峨の山川ぬのさ

花もみぢ何のいそへん人めおく靜おるこそさゞのやまゞのい

磯　寄せのへりゆらるゝ磯のさゞれ石も巖とおらば浪や碎けん

磯巖　あら磯ゐ立てる巖やいつのよの波のよせゝるさゞれおる覽

浪聲混雨　よる波の音ゐ隱れて苫やうさもらをば雨のふるも知られじ

風翻白浪花千片

沖つ風吹さつおべゐよる波いちるを殘しまぬ花ゐゞ有々る

老の後北山のゆとりゐいざおいれて遊びゐりさゝる鏡石といふをゝて

城暗雲霧多　雲きりぬ色もゆゝられをさちゆゝるくゐぬ都の秋やさびしき

こゆゝ　天の下ゆさゝおるよゐ住む民いいづくもやをの郡とや思ふ

遠村煙　くもおらば時もわゝじを夕べ〳〵たてるや里ぬ煙なるらん

寄市雜　市中も何ゝこゝろのさゝぐべきうる事なきをうる事にせば

何の道も知かまの市女をを替ばうる事難きよをゞ知らはし

山家　よを遠く身いのがれきぬ山の井の浮き心をいうですまさん

月花のをりいさをゞゐなれしよの友知のばしき山の隱れゞ

よのうさぬ猶聞えんと厭ふてそこゝろの淺き山居なりゝれ

よぬうさも聞えぬ庵の松風いこゝろの塵をはらへとやふく

靜ゐと住む山ゝげをといれぬゞ恐おる身ぬのひゐい有々る

山家夏　時ゝかを茂る檜原のやま住いゐとゝををゐや夏殘知るらん

太秦あすむ頃　今いよをうづまさ人ゐ成果てをやこい雲のよそゐこそをれ

山館雲　山深く住むともよそゐ見えぬ迄猶さちのくせ軒の去らくも

山家雲　やま深を人いゐよいで白雲のゆきゝを庭れゐきねゐぞ見る

山家嵐　ひゝきくる松の嵐拔まちとりて軒端ゐさをぐ山のしさをば

山家曉雨　山深をかさゐる雲ゐ窓とちてゐくるもゐそきあめの寂しさ

山家朝　朝まだき立出てみれば庵の軒端の山ゐくもぞわかるゝ

山家夕　さびしきい軒ばの松ゐのこる日もゐつゐくれゆく山陰の暮

山家水　濁なきもとれてゝろを知る人やいゐ去めてくむ山の井の水

よの憂めをぞば心もすむやとてくを初ぬらし山のゐのをづ

山家木花　と咲き紅葉とそめて山里にうつる月日い木々ぞみせ々る

山家松　軒ゐゐふる松こそいさく老ゐ々れ我山住やとし拔へぬらん

山家苔　世ゐゐよふ心の道もさえぬべし苔ゐゐとなきやまかげの庵

田家を　うきふしいさても山田の笹れ庵よを遁れこし住ゐならねば

よを厭ふ人の住處ゐまぎるゝい小田守る庵のよそめ也々を

田家夏　時きぬとさ苗とり〳〵いで果て田中のさとい夏ぞさびしき

閑中待暮　人といぬ宿ぞさびしき暮ゆゐば月のげをぞゐ友とをましを

夕幽思　詠めつゝ思へば消し夕雲のゆくへぞそでのつゆとなりぬる

林下幽閑　もみち葉を尋ねて入れば山本のはやしゐひゝく鳥のひと聲

昔ことゐゐゐりてより閑人となれば殘生を心のまゝにやしなひ火ゐゐひていうづまさゐ

のがれて幽閑を樂しび病をえていこれ岡崎ゐ來りて我好める風景ゐとめるを思ひて

世中のうきゐ逢いをば心ゆく野べのいやりゐすまひせましや

よの中れうきい我をの幸ぞとも命しなくばいゐで去らまし

青ふし垣のとちめい杉の板戸なりしゞ年をへて柱朽ち戸やぶれていとびしゝればとり

はらひて竹のゐを戸を野邊のへだてばかりゐしゐる

よをいとふ竹の編戸の荒々れば猶うき事ぞもりてきこゆる

布袋のゐさゐ　天地を袋ゐ入をてもちゐれば

僧　苦衣うらなる玉ゐこゝろをやゐけていといぬ野ぶし山ぶし

西行上人の銀れ香爐さびたるをもたるゐさ

家をすて身を捨てしも寶をばめゐくるものと思ひゐるらし

王昭君　面かげを寫しゐへをばさをちふる我憂め、ゐい誰ゐゐふべき

女　打つへを少女の袖ゐ招かれてゐまつそらより雪さへやふる

泉　郎　よを渡るうきめかり舟出もゐへを汀のゐまゐも汐をぞやく

舟人をよめる　いく藻もとむとゐなき舟人も海路ゐとしのかいゐけるかな

泥　孩　兒　うらやましうきより成てうき身とも思ゐを常にゐめる緑子

松を好めれば折々ゐよめる

十かへりゐ咲くゐまざをを一しやのはるの緑ぞ松の花なる

生そめてまゞ二葉なる苗なれどちよ松の木とをれば頼もし

春ゐきの花も紅葉も一さかり松のときゐゐ玄くいろぞなき

いつゐとゐわかぬ緑も夕づく日さをや岡べのまつのむら立

東南ゐさかき松ありてと木にをぐれていとめでさし中つえより下つかたちのしのいと

玄ゆく玄げをていぶせかりれば枝を拂ひそぎけるに松のをゲさいとよく見ていとゞ

めもかれぬなをべきをざもわをれてをる〳〵ゐもふゐ時などゐ十八公と文字ゐよりて

いへるおともありげゐれ花ゆれば

はさとせゐ二とせさらぬ君をれば我も若えし心地こそをれ

いま住む宿の軒に松のあなるゐ昔若狭守宗直あそがをかの浦より移しうゑさるあり此松

を經亮見て　千よろけて君がすむべき庵とやうねてうつせしをかの浦松といへるかへし

うつしかむ人ゐ昔ゐ宿ゐ松ちとせのいろををるもはかあし

松　經　年　軒のまついくよかへぬるとてとゐゐ住て久しき山風のこゑ

をかの浦に松あり鶴ゐまさゐあそぶ

松の色さづの聲さへをかの浦ゐをきくさび〳〵長閑けかりけり

杉　門　此もりゐ神ましかりなゐく深く繁れる杉ゐ玄めはへてをゆ

杉　とへかしの玄るしの杉ゐ誰待てこぼるゝ門に猶さてるらん

くぬぎ　老ゆけど猶言の葉の若くぬぎ若くば添ゐんふしも待たまし

竹　心ざゐすゐゐかりせば呉竹の世のうきふしゐ何ゐ玄げらん

窓　竹　すぐゐれと思へば古き言の葉をさゐがらうつを窓の呉さけ

路　芝　ひとつ色ゐ繁る野もせの芝生ゐもさゐがゐ分し道ゐ殘れり

石　面　苔　ひとかどもあらぬを谷のつぶら石ゐゐ面ゐとや苔の隙せる

れ　で　ををつをて思へば誰もやゐさでの辛き世わさる愛ゐかはらじ

ある人のもとよりさび〳〵はじかををかくれるに

はじかみのかど〳〵しくて辛き世ゐ又口ひいくめをををゐ君

庭ぬ松ゐねぐらして鳥ぬをるに

山陰ゐねぐらさざむる鳥をれば我友えさるこゝちこそすれ

鶴

鳴さづの子を思ふゐもおのゞ身のはぐゝまれにし世をや忍ばん

わゝの浦や月の光もをつしわゐ汀のさゴのこゑもをしまぢ

夜鶴鳴皐

子をおもふ泪やゆづる澤水の深き夜おゑにそでのぬるゝゝ

さづも鳴おる　住吉と汀のさづも鳴おるをうらみてのをやよをれぐもべき

朝ゐ庭鳥の聲をきゝて

里ごとゐ鳥ぞ今おくその鳥におらひて時を去る身とも哉

軒の松ゐ鳥の一聲鳴くはどもおく市人のさゞめきゆく音するを

我松の梢のゝらを音ゐおけば里のいちびとあさだちをおり

朝ゐからをの聲を遠くきゝて

物のねい遠きまされり鳥をら遠ゐにきけばをかしゝりゝり

かちを　思ふことかくてや終ゐやま鳥わがかしらのを白くおれゝば

はおどり　よをこめて旅立ぬれどはこ鳥を二聲きけばはやわけゐゝり

岩ゐうれゐるゝ

浮沉をみおれそおれてよを過を身をゐおうとも鳥い思いじ

山ゐ慈悲心とおく鳥ゐおるゞ木ゞくれてをえ老など人のいふをきいて

み佛の心をこゑゐ鳴く鳥のをゞたいひとゐ見えをとゝもよし

昔思ふでゝろの駒ゐゐらそひてゝふのひを行く影も留らぢ

獣

牛

を田返を牛ぬゝらすき辛きまゐ繋がるゝ身ゐ牛のからをき

猫のよる妻をこふるを遠くきゝてひとゐはれゐおぼえゝをば

から猫の聲うらがおしをき島のやまとゐいゐらぬ妻や戀らん

猫の子を彼方此方に遣して只一つ殘りさるゞ友こふゐやあらんいさく鳴てねゐゝるを

かさゝゝゐ引をゐれつゝ猫の子のむれて遊べる夢やをるらん

宮の御手して夢の字ゐりて蝶のゝさ呉春東洋ゞかけるゐ

現おきまい夢おゞらすぐしおでなゐゐい蝶の人とおりけん

富士のこおさぬうみより龍のぬぼるゝさ

波をさて雲を起してふじの根もおよばぬ空ゐのぼるたつ哉

こゝかしこに文書き通いをべきつゝを紙を手ゴゐらつくりて

文のよふふるのゝ澤の中つゝをゐみし守らば道いさえせじ

無絃琴はゝさかけるに

ひかぬ音を聞しる人も有やとて我まつことぞ久しかりける

ゆみ

ことの葉の荒きのま弓本末もいつかこゝろのよるに任せん

ものゝふの手ならを弓の本末はさもより安きないの年かな

寄車雑

覺つかな何にひかれて小車のうしと思ふよにめぐりきぬらん

太秦に住ける頃ミじかよの明もはてぬに車はきしる音するは嵯峨より都に通ふなるべし

さもやすげなき世をのしと思ひめぐらせば誰が上も同じことなり

しかぞ今廻りくるよのさが車うしとてもはさ身をいかにせん

寄舟雑

朽ねさゝわしまによせし捨舟の漕出ぬべきミにもあらざれば

對鏡知身老

昔みしかしらの雪は朝かゞみ向ふ日ごとにふりまさりつゝ

寄帯雑

人言はかしまの帯はうら表ミせかぬばかりむすぼゝれつゝ

酒

世のうさもわするゝ酒にゑひしきてミの愁そふ人も有けり

政教よりてうじたる鶴にそへて　老のなミよせても君のうらにへんよはひを君にゆづるなりけりとあるかへしに

今よりの千よをゆづると聞からに飛立ぬべき心地こそすれ

古人のおと葉を題にてよめる中に

吹く風もまさでけぬべき露の身を千年の如く思ひなれぬる

石ずゑもなくて幾世に成ぬらんしがの大つの宮のふるあと

めにかゝる人かげもなし明暮に鳥の網はるまどのなきふし

斧とりて丹生の檜山に入る人は心にかなふミや木こるらし

いにしへの筆の林を見渡せば手にとるべくもなき我身かな

ことゝはに風のあなづる露のミの何に懸りて長らへぬらん

杣人のひくすぎくれのつな絶てもてなやミぬる身にこそ有けれ

はて〳〵は手にだにとらぬ梓弓すゑ中ためて何ならひけん

やねよりもかへりて骨を惜る物はミゝむ扇のをりめ也けり

吹おろもむな山嵐などはげしなくさひかけよなきつふな人

明くれにこれる歎きをになへばや翁の腰のかゞミたるらん

なろかにてか弱きもはゝ老されば取どなろなき我身也けり

底ひなき池のこゝろは騒がねど岸の水なみたゝぬ日もなし

言の葉を傳へやしつる吹く風のかさたよりこそ覺束なけれ

何せんに人もすさめぬ言の葉をのひさゆき迄のき集めゝん
つく〳〵と獨し物を思ふあいとはさゞなりぞ常あせらるゝ
いさゝらあ老果んとい思ひきや心れしてそるのゑのさけれ
世を厭ふ人あらせばや遁れていやをくへぬるを老づとあして
うれしきも憂も涌いづる水のごと共あ流れてとまらざりゝり
かはら田もつひあぬさあぞ成ぬべきかくのゑ常あ石を拾いゝ
ねるもおきやく鹽竈のゝぶゑあも辛き世渡る業ぞ去らるゝ
紅れ塵の中あもすをつべしこゝろのおぜのとはあはらいゝ
夢をのゑみちれねなゝれ身のうさも浪のまあ〳〵よ荒盡さばや
名所岡　ゆきのへゑなそべ遊の岡のべの松も千年のおぎりこそあれ
名所杜　秋いきり春い霞のうすものを立のへてきるころもでのもり
名所瀧　ぬしあしと誰のいひゝんおりさちてきてをる人の布引の瀧
名所河　おれやこの空あおりてふ同じ名あおれて高き天の川あゑ
名所浦　入日さゝ浦あつのしをきてみれば波ぞ錦の名あいさちける
宗直朝臣の山庄のよもの山々をわのちてよませしあ阿さで山を

くらべていひえの爲うき高ねとてあさで山といいふあやある寛
牛尾山　世中いうしのを山の柴車くゞりやをるみあこそありゝれ
泉杣　かしてきも道ある御代あひられつゝ今いづみの杣とこそきけ
鹿背山　今いとて憂世をよそあ隔てあばゑの身を隱ゝころもの せ山
鞆岡　梓弓いての舍人おとも岡のをざゝのえのい矢あやはぐらん
八坂里　都まで民の家ねをさてそへて今いやさのさともわのれを
口無山　思ふ事いふのひあらん身ありせば口あし山あ遁れましやい
勾池　つき影もすまで幾よぞ島のゑやまごりの池い水ぞあもあし
いのるがの里　み佛の道を廣めしいのるがのさとみゝれをあやこゝあましゝん
置勿橋　ゝふの日も仇ふ暮をあれをのをぎおきあに至る人の程あさ
大橋　水底にさつもやふをとさあぬりの大橋うつをのたあをい川
橋本寺　ゝふも又幾その人ゝゑさをらん橋もとでらの鐘ひゞくあり
伊勢野　神風のいせのゝ艸の靡くあもみよのしをよの民のこゝろい
布引山　見るおうちあ高ね去らみて別れ行く雲いさあゞら布引の山
家田松　とひあれし家田の松をめあのけて駒うち渡をあのゝ板はし

二村山　はな紅葉誰うゑおべて春秋ゝにしきをさゝぬ二むらのやま
田籠浦　海うけてふじのねおろし吹あれぬ沖ゐな出そたごのうら舟
草河　かりの身いよし沈むともあし河の濁れる名をゞよにい流さじ
秩夫山　子を思ふ道ゐまどひて今ぞ去るちゝぶの山の深きめぐみい
いさしき山　よを厭ふまゝをうい苔を去とねゐて山の名ゐ聞く板敷もおし
筑摩　世ゝうきに心つくまのゝくり縄長うれとしも身をゞ祈らゝ
白月山　かくるべき隈こそおゝれ明けき御代ゐゐふゝの白つきの山
松賀浦島　色うへぬ松ぞうら島いつゝてもさゴぞひれねる松ぞうら島
遠浦　人ごとゐ有りとい聞々ど花さうぬ胸の蓮のうらめしのゝや
菅山　入てしもうきよときけゞ菅の山まそ〳〵しくもえこそ道ゝね
境川　明るよのさうひの川ゐよる浪の色ゝき初ておびくうきぎり
皷山　萬代の聲ばうりこそひゝきゝれつゝゝの山い苔ふうくして
引島　今もうもゐゝのうけ縄ひく島のゐまのよび聲とゐく聞ゆる
小池　水たまる小池の魚もおゐ海のくぢらのごとやみゝ思ふらん
可也山　旅人の枕うるよいこゝろしてふきゞゐたゆめかやのやま風

竈山　さうえ行く民の竈の山まつやたえぬゝぶりの色をゝまらん
入立山　早くより言葉のゝちゐ入立の山のうひおくゝけまよひぬる
うきみの浦　長らへてうきゝの浦のうひやおに波の去わゝのみ立重ねつゝ
人妻里　うしおぐら門ひき入るゝ小車ゐまつよ去らるゝ人つまの里
衣浦　ありと聞く衣のうらの玉やこの浪の白たま手ゐもとられゝ
別　ゐゝ去らぬ身を長うれと祈るゐ行末とやき人ゝわうれゐ
悠々一別已三年
一度のゝうれゐうけて思ひきや年のゝとせを隔つべしとい
老の後ひとりずみゐてゐるをゐはれぐりてことゝひゝる人の遠くゆくゐ
身ゝ憂さを語りてだゐも慰めし君ゐさへこそ又ゝうれゝれ
尾張の宗則ぐとひきてうへるを見おくりて
又こそとことゐいへど老ぬれゞ是やうぎりとおもふ別路
越後雁島の惟清ぐきて四日五日ありてうへるゐまたとゝえこしおどいふゐ
命あらゞ秋こん雁を聞くさびゐきて別れしゝふや恐ばん
丹波の忠慶ゐづまゐくだるとてあうちさまゐふちよりて　思ふことといはで別るゝかおし

さいわふ嬉しさわまさりこそもれとやしたるわのへし

年々わまさる言葉の色をそてわあるゝうさも今ぞあぐさむ

播磨の義巻の國わのへるわ　まさもこん時をいつゝと思ふよりわへず涙の袖わこ花るゝ

とよめるわのへし

さひらのわいませといはん外ぞおき又わふべくも志らぬ別い

備ちうは夏鼎の此道はことゝひきのむとて二月はじめより五月わおるまで都わあ里しの

えさちねことゝ為りて國わのへりあんとせる里のれわ　こん春いこんと就もへど陰さのむ

君のわさりい猶ぞ立うきといへるのへし

こん春をまちつけてこん時わこそゝふの別のそでいの里かめ

政子も　こん春を契るもとをさ里のれぢわわやめも里のぬ袖の露々さとありしのべ

こん年をまちもつけそべ菖蒲ふく五月はいつの君わ語らん

柳齋の播磨わわるはど六月ばのりかの國へ歸る道のやどわつゝりおんといへべ　おとの

葉のつゆのめぐそをおもふわいうへる旅路もすゞしかりおんとよめるうへし

ことのはは照日をさふる物おらべ君ぞ旅ぢの陰とおりおん

尼智乘ぞ故郷わうへるわ

道すがらわつさ志のかと添へてやる扇の風を我と志らおん

紀の國の是正ぞ國へいくとて　立うへり又もきおうんやとゝぎそはな立花いうれずもわ

らおんとわりしうへし

時鳥よそわもきうん立花のうけはおるともこ志ゑえそおけ

下野國の滯生君平い古陵の里ぎぞさく成ゆくを歎き山陵志つくらんとて都へ登りこゝか

しこ行きめぐりさるぞわが家わも志べしわりてまゝ國わうへりおんとする里うれわ

旅　君がさめきその山道くも分々て又いぬらんうきその山志ち

宿もおき野原志の原わけくれぬ又やこよひも草まくらせん

志るものきくものわつゝて泪もろくて宿わくしてゐらんよりいと思ひて旅ねしそめし夜

よの憂さもまぎれやすると山伏をおらいそ袖い猶ぞひぞゑき

そやゴうへしけるとき人やりのそちわてわゴまわおもむくべき名殘をしまんと賓與ぐい

へわまねうをて行路霞といふことを

立里うれ遠ざうりおべかへりそる都の山もうのそそはてまし

おおじどき資芳より旅の調度おどおくりて　雁ぐねわおくれぬ旅もうへるさい秋よりさ

きのちぎりたぐふおうへし

鴈のくる秋をも待さじ歸るさの雲井遥々き旅ゐいありとも

佐渡の千鶴が都ゐありていさうわゴらへるを

北の海の千さとの外ゐ親を置てやをふしぬるゥゐはれ旅人

かへしゐゥれ　故郷の親を思ひてやめる身弦ゐはれぶ君も又親の如とどよめる

をはりゐ下りし時行く方もをえを霧わさりゐる夕べやどるべきさとい猶とゆくたどりわ

びさるゐ月やゝさしゐゲれり

霧旅　うらは波嶺の松ゥぜゐ宿れつゆやゐくらん

行旅　山べゆき野ゆき里行きゆけど猶行末とゆきをちのくのさびし

夜旅　やどからん庵ゥとへば深きよの塚やゐ殘る火影ゐりゥり

旅宿雨　分ゐれし露い物ゥい假ねして雨きくよいのかたしきのそで

旅宿夢　をげ暮てつゐれやをむる旅ねゐも猶野山こそ夢ゐをえゥれ

霧中橋　打をさし思へば遠き古さとのたよりいいつのまゝのつぎ橋

渡りきてゥへををすればそことゐく雲の夕ゐる峯の嶺はし

霧中磯　波風のゐらき磯やのゐりねゐい思ひもゥけをふるさとの夢

海路　うをつ路のにいしよければ昨日迄波高ゐをし憂さも忘れつ

跡もゐき波の上ゐゲら心ゐてゐ行ゥゲばまどいぬ舟ぢ也ゥり

旅泊夢　波の音ゐ打ゐどろけば見し夢も共ゐ跡ゐきうきねゐりゥり

旅人渡橋　くれゥゝる遠の野川の一橋こゝろゆそしやゐたるたびゝと

遥見行客　殘る日のゥげをたのをて旅人や猶行き過るをちのひとむら

暮望行客　さび人の行く先ゐゆくく暮ぬとや道いそぐらんはべの遠ゐさ

夏眺望　山陰の青をゐ月の江の水ゐつりをる小ぶねをゝしげゐをゆ

海眺望といふことを

追風ゐみぎいこぎ出し浦舟のはるゥき沖のくもゐいりぬる

老のはち西山ゐかさぶく日を暮でとゐをて

山のはは入日の名殘見る度ゐとゆゥらぬをの夕べをぞ思ふ

文をるゐいと物うく覺えゥれば

ふけぬとてかゝげ添へをば殘るよの猶くらゥらん窓の燈火

ゐやゐる時ゐもくゐゴらひゥるゐ

惜からぬ命ゐゲらもたちちぬのある世よい斯てある由もゐゐ

おきふしもいといとう苦しく日々に衰へ行くをおぼえて

心のゑ昔のまゝとおもひしゞそも物ごとにうちヨせれつゝ

いりおる折に

花をめで月にうゑれていつの春いつは秋をゝ身に限らまし

思ふ事ありて

人のよは富む草葉におく露の風をまつまはひゝりおりゝゝり

無常

悟りえて驚かぬふいあらぬゑのよの常おさに習ひしも憂き

さゞれ石の巖とおるもといまらで移り行くよの姿おらぢや

年の始に齒のおちなれば

木のめはる春しもおつるこのはふで定おきよの風に去らるゝ

幻世去來夢

はゝおさいいつまはさらん宵のまにゑえゝる夢と幻の世と

さめぬべき物と去りせば夢のまはうきに誰も惑はざらまし

夢

現に思ひさえぬる昔にもゝへるゝゆめはさゞちおりゝゝり

曉眠易覺

曉の八こ去の鳥はいく度ゝかいのねぶりをおどろかにらん

懷舊

おゝ〳〵に去のぶ昔の夢おらば稀に去るよもあらまし物を

人おゑに思ふさまおる世をやへしをこおも怨ぶゑの昔ゝお

住の江は松風のゑや我こふるむゝしの聲をおゝのこゝらむ

ゝきつめし古言の葉のおゝりせば何を去をりに昔去のばん

こしかたを去さひて

何をゑの憂きにおおしてい歎きゝん親のいませし古へのよに

寶興ゞ十七年忌に夏懷舊といふことを

植しその木立ゆゝしゑかげとへばこゝへゞやに薫る立花

獨懷舊

戀しさを語りてだにも慰めん身のいにしへを知る友もゞお

閑居懷舊

まぎるべき人めいゝをて古へを忍ぶ草ふふる宿のさびしさ

草庵懷舊

ふることを何と怨ぶの草の庵よをいとひこし住ゝおらぢや

僧正遍昭の九百年忌に古寺懷舊といふことを

ふりせぬい君ゞ言葉の花の山いませし寺いおらぢおれども

おぞの墓女院ゝくれさせ給ひなれば例の初春のゝしきもおゝらん雲は上を思ひやり奉る

お例事おどもさはることおりておこおはをぬよしきけば

雲の上いいゝ寂しきくぢもめさじさりとて法の聲も聞えじ

いつの年にかやよひの末つゝ風のよきゝる一木もやと尋ねおりき禪林寺に詣でぬれば

虚ゐうゑもれし心もをむさまゐ覚えていとをゴりあるゐつく〳〵と思へば

常もあき色香ややゞて時ヨりぬをれヨの花のをるべあらまし

ま、さ　色ゐ香ゐ染めし心をいつしゐもをのれ此花の上ゐうつさん

風あらましき夕べ軒の花此ふさあゞらちれりとてをるゐ

人の世の盛をまさぬことヨりもふさあゞらちる花ゐこそをれ

重愛ゞ身まりヨしいさをゐ若菜を

言此薬此手向もゝふの法の爲つめるヨりあ此外あらめやい

法眼元通身まりて天龍寺ゐ葬をる後いさみゐ霞を

この春い霞あさちそさゞの山いりゐし人のあとをゞゐをん

房共ゞいさをゐ薄暮霞を

一村の霞とありてあゞし此ゝゝぶりの色もヨりをくれゆく

安藝の頼春水ゞ父の惟清ゞ十三年忌ゐ歌すゝめゝる時江上霞を

立うへる物といあしゐ霞む江のむりしゐ似さる春の夕あを

元廣ゞをまのれるいさみゐ獨見花といふことを

ひとりヨゞあど過ゞてゐ打をるとぬしあき宿の花や思はん

松齋ゞ身まりりしを悼みて月を題ゐて

ともゐをし人も宿りもあき跡ゐひとりぞをめる秋のよの月

りて此小路の家ゐてともゐ月見はべりしその宿もゝぶりとありてあと

りさもあゝをバよめるゐあん

情言ゞ身まりりて百日此手向ゐ同じ題を

あきりげの雲隠れゐし月あらバまさまし物を明日のよとだゐ

一室身まりりしのち手向せんと思ひあゞら病していさう月日も過ぬれど昔の友澄月蒿蹊

をはじめて歌すゝめけるゐ秋思といふことを

月もいりぬともに見しよを繰返しをのべバ長き秋の思ひゐ

喜之ゞ手向ゐい雲をよめり

あき人の雲ゐやあると眺むをバそれもむあしき空ゐ消つゝ

方俊ゞ身まりヨし手向ゐ風を

とりとめぬ風を出入る息のをの絶をい有とも頼むべき身り

此人身まりりし後ゐ惜歸雁といふことを　見るゐ猶名殘ゞをしき春此雁とほよるまゝゐ

かををそふ空とよめるをを出てあはれゐ覚えゝれバそのりさいらゐ書付ゝ侍りし

かへりくる秋しもあるを春の雁おごり惜をし人いづらい
朝顔の花のさかりゐ難波の昌蒲とひきて此花をゐあらんときゐあらぢをさべといひしがい
くやどおくて身まかりしゐ思ひ出て

朝顔いはゐおかれども人のよ此ゐをも待ぬ身ゐい増れり

ゐさらひ侍りゐる女の身まかりて此ち其家に住かはりゐる人のをゐさしく侍りゐれば月ゐ
のきよ友ゐさそはれて行きしゐ夜更るまで人いをおゐもふことおげゐ遊べど我いたい有
しよのおもひ出られて

いく年をへゐゐる宿ゐあらねどもあらぬよゐこそ月も澄ゐれ
身まかれる姉の三回忌ゐ殘菊句といふことを

ちよませとよそへし秋の花の香い霜ゐふりせで殘る白ぎく
ある人のおやの身まかりて此のち子うまこおんどうちつゞき家ををさゐえて田畠おどお
はくもゐをゐるををのちて僧坊ゐつけ侍りていうおらん世ゐもこのゐむげゐえまじうお
どゐつらへてこの秋五十回の法事いとおを侍りて秋懷舊といふことをよませ侍りけるゐ

遠きよを忍ぶゐまりゐをゐち置く秋のゐむけい絶じとぞ思ふ
秋のころ硯水がうまでをうしおひておがきゐるゐまゐうまおうまれゐるゐ　よをうをの
ゐまのうけ繩うき中ゐまゐよろこびのくるもゐやしきをとよみて見せゐる歌此ゐゐいらゐ
かきてつゐはしたをし

人のよも何ゐいかはる置けが散りちればゐつゐく秋草の露
よべの夢に泉下の人をゐまゐを侍りてゐき出るゐ軒の霜ををて

朝まだき日ゐが待まの霜よりも我身よゐふる程ぞはゐおき
鈴木龍い絲竹の交ゐて年頃をさしく語らひぬる中おりゐるを此夏此頃いさいか心えぬ事
のあればいきていひをいさばやと思ふ折ゐらいとゐもくわづらふときけど常ゐゐよをき
人ゐもゐらねばゐどおくゐたらむ折ゐてそと思ひて打過ぬる程俄によをくおりて終ゐ
身まかりぬ齡い今年いそぢとゐきいしよろづたど〳〵しからを呂律のことおどいとよう
心えゐる人ゐてかばゐりおるもたづねんゐいいとゐをかるべし惜をつゝせんをべおくて
月日をふるゐこよひ雪いと深うふりて寒ゐればとくふしぬ曉がゐの夢ゐこの人とひくと
をて身まかりぬときゝしいそらでとおゐりゐりゐもくわづらふゐいゐでゐいませしといへ
ばをいめせでい心の結ゐはをとくべきやうも侍らを心一つををるべゐてといふいと苦し
げおりゐ此心えを思ひしこといひとくとぞ思ひし雪のをづりの音ゐめさめたるゐ燈火ゐ
をゐ嵐はゐしく吹ゐつ涙玉をみだすがごとし

思ひつゝぬるともおきをおき人のさだゝゑえし夢ぞあやしき
ありしよのうらみも消て白雪ふるにし人ぞさらゐ戀しき
覺て後おもかよはさん道をゞゐもとはまし物を夢と云りせバ
在し世ゐあしさの雪ゐ消やせし夜の雪ゐいとひて絲竹のあそびせんといひしを思ひ出て
雪の夜ゐゐらぎこんとさのめしを消ゐし人や思ひ出々ん
澄月法師の一周忌ゐ
こゝまでもかさゝゐ問し古おとを雪のしたゐも思ひ出らめ
山陰ゐ一木此てりてふる松のふゝきゐむせぶ聲ぞゐおしき
初雪のあしさ喜之がおもしよおとひしをゐもひいでて
消ゐべりゐもひぞ出るふるきよのゐも影ゐゐぶゐさの初雪
妻のゝまゐりしころ久しくおとゞれぬゐ難波の昌蔵より　かきさえてとりのあとゞゐゝ
えざるゐふゝをしとしも思ふおるべし
これゐ勅撰名所外集をこひゐるゐやらでゐりゐるをいへるゐおん
か　へ　し　ふゝをしと思ひもゐへゞ消ゐしを歎きてぞふるやどの白ゆ
やまとの字陀の法正寺へ詣でけるとき手向け奉る歌并序

かゐちの君の身まゐりたまひし頃ゐかぞの君ゐ二つばゐ
りゐやゐはしゐん九つときこえし時より家名さえてゐゐ
さこゐさの國ゐさゐさもらへ給へるゐどゐ年月を重ねてまう
で給へゝし事もゐゐりゐんゐしまして其末の子ゐ生れ侍
もゞ此國といきゝゐぐらいゐゐる所何といふ御寺ゐやと
年頃ゐつゐしゝ思ひ奉りしゑるしゐやこぞさゐゐゐ敬ふ
る人の侍りていと嬉しく思ひさまふるゐこん年ゐ百年ゐ
ゐさり給へり其頃詣でゐんとゐ思へどいとかよゝき身の
病さへ多く齡もはさかさぶきて其期をまちつけ奉らん事
のおゐつゐゐゐれ此春まうで侍るゐゐんもとより貧し
ゐれゞ佛事供養ゐどやうの事もかさのごともえせで唯慕
ひ奉る志をゐろゐる言葉につゝけてたゞゝ奉る年頃の
ゐこゐりを免しゐはしまして我露ばゐりの志をうけさせ
給へゐしとてゐん
もゝとせの昔の古墳さゴねきてむゐへゞ袖ゐ露ぞゝぎるゝ